

An analysis of the historical change of Korean signboard design and its socio-cultural background

郭, 明姫

<https://doi.org/10.11501/3148617>

出版情報：九州芸術工科大学, 1998, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：



KYUSHU UNIVERSITY

氏名・本籍(国籍) 郭 明姫(大韓民国)
学位の種類 博士(芸術工学)
学位記番号 甲第29号
学位授与の日付 平成11年3月18日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 韓国の看板デザインの歴史的変遷とその社会的分化的背景
の分析
審査委員会 幹事 教授 石村真一
委員 教授 糸井久明
委員 教授 波平恵美子(お茶の水女子大学)

論文内容の要旨

本研究韓国の看板デザインの歴史的変遷とその社会的文化的背景の分析を目的とし 5 章で構成されている。

第 1 章は、序論として研究の目的、研究方法、および看板の定義を明確にした。韓国における看板の歴史的研究は全くされていないため、主に文献と絵画、写真資料、現地調査を元に分析を行った。本研究における看板は伝統的な商業標識である「目じるし」を含め、「商業のために使われている商業標識全般」と定義した。

第 2 章は、韓国における看板の出現と伝統的な商業形態を中心とし、看板の出現を基盤とした高麗時代の社会構造や都市の基本性格、および看板の特徴を考察した。続いて、朝鮮時代の商業と看板の特徴、市場の機能と役割、常設市場の発達過程、商業建物の特徴、開港後の都市の商業と看板の特徴について考察した。

第 3 章においては、絵画と写真に見られる朝鮮時代商業と看板を中心とした、ビジュアル的な資料に見られる当時の商業行為の特徴とされる男性中心の社会、酒店と旅宿、看板のない店舗について分析した。最後に韓国の看板と関連を持つ韓国の伝統的な建物標識と看板、扁額と懸板、柱聯、看板を意味する言葉の変遷について考察した。

第 4 章においては、韓国の近代化と植民地時代の看板を中心として分析した。主に、大都市を中心とした看板の特徴と植民地政策による日本語教育とハングル、またハングルがもつ社会的意味について考察した。また、写真にみられる植民地時代の看板の特徴を看板の文字や素材、形態、看板に書いている内容と分けて考察し、また、当時の看板の調査資料である『朝鮮人の商業』から商店名、文字、形態、素材などについて分析を行った。

第 5 章においては、現在の韓国の看板の成立過程と特徴において大きく影響していたハングル政策である日本式看板撤去運動とハングル専用表記運動、国語醇化運動について述べた。また、韓国の代表的な都市であるソウルの仁寺洞看板と伝統的な都市である慶州の看板文字を調査結果をもとに、ハングル看板の表記方式、文字の種類、ハングル看板の書体などの特徴を明らかにした。最後に、韓国の看板の歴史的変遷とその意味について結論

を述べた。

韓国における看板の大きな特徴は「看板文字」を軸として形成され、変化、発展してきたことである。文献上では高麗時代から看板に漢字が使われてきたが、その文字表記は朝鮮時代を経て今日に至るまで、社会的变化に大きく影響され、時代別に大きな特徴を表わしてきた。

看板に関する最も早い記録である『高麗図経』には市場の坊門には永通、廣徳、興善、通商・存信・資養・孝義などの内容の看板が設置されていたと述べられている。これらの看板は全て 2 文字であって、商業とは直接関係のない儒教的思想や経営信条などを主に表していた。朝鮮王朝に入ってからは、官設商店や六矣塵は、基本的に一つの店には一種の商品を販売していた。このような常設商店は御用的生活を持ち、その規模や売っている品物によって「塵」「店」「房」「局」「家」など、それぞれ異なる言葉を表わした。このように朝鮮時代の看板には主に売っている商品の名が商店名となっていたが、看板という言葉は統一されておらず、「榜木」「懸額」「懸板」など多様な言葉で表わしていた。これらの言葉が持つ意味の関連性や一般的な建物標識との区別のため、伝統的な看板を「商業懸板」と定義した。

朝鮮時代末期からは身分制度の崩壊や日本による植民地政策が本格化されていくにつれ、ハングル教育とその使用の重要性が高まってきた。この時期は漢字だけではなく、ハングル、ひらがな、カタカナ、アルファベットなど様々な文字が各々混じって使われるなど、植民地政策による社会的な状況を著しく表わしていた。書かれている文字の内容は、主に売っている商品の種類や商号を表していたが、それだけではなく、商品の品質の説明や店の住所、電話番号、店主の名前、シンボルマーク、商標、絵など様々な情報が書き込まれるようになった。韓国における看板という言葉はこの時期につまり、植民地時代に日本から移入された言葉であったことが明らかになった。

1945 年、解放と共に日本式の看板は「ハングル専用運動」によって撤去され、中国の看板を除いたすべて漢字表記の看板はハングル表記に書き直された。これらのハングル政策は「看板のハングル化」という大きな軸を形成したが、表音文字である諸問題点を抱えながら、80 年代からはハングルのみの「詩的な表現」を看板に用いて、商店名を一つのイメージとして与えようとする新たな現象を生み今日に至っている。

論文審査の結果の要旨

看板は世界各地で発達するが、その視覚伝達要素は必ずしも一様ではない。商業のシンボルとしての目印を事例にした場合、東アジアに限ってみても多様な展開を示す。つまり、似たような文化圏であっても、共通の要素と地域固有の要素が混在し、独自の商業的目印を形成していく。看板はこの目印に文字という伝達要素が付加されたものと規定することができる。

本論文においては、韓国における看板の歴史的変遷を、特に文字とのかかわりを軸に考

察している。最初に看板の定義をする際、扁額、懸板というのも広義の看板と規定し、その形式が商業看板に移行したとしている。こうした看板の形成作用は、日本と大きく異なる。その根本にあるのは、両班という身分制度と儒教の精神と本論では述べている。商業従事者に対する強い蔑視感が、商業の発達を遅らせ、また文字の使用も遅らせた。そして、その身分制度のギャップが、両班社会の懸板が商業看板化に結び付いたことを明らかにしている。

韓国の商業懸板は基本的に漢字文化であり、ハングルの使用は極めて少ない。こうした傾向の根本にあるのは、やはり身分主義であり、支配層が使用する漢字の文化を、地位の低い商業従事者が専ら追従していたのである。韓国の看板が大きく変化していく契機は、1910年に始まる日本の韓国統治である。確かに、韓国文化の排斥という政策が、日本文化の強制へと展開するが、日本の看板に見られた庶民文化としての看板が商業懸板に与えた影響も見逃せない。身分主義を重視した商業懸板から、商業自体を基盤にした文字表現への変化は、日本の看板文化が与えた影響なのである。本論においては、この変化の過程を詳細な資料を通して明らかにしている。

日本の商業看板の影響を受け、韓国の商業看板も急速に発展を遂げていく。ところが、第二次大戦後の韓国においては、ハングル専用運動によって日本様式の看板はすべて撤去されていく。また、漢字表記そのものも排斥され、中華料理店の看板のみが漢字表記を認められという状況になった。当然、学校教育においてもハングル化が成され、国語醇化運動が全国的に展開された。こうしたハングル化の基盤はナショナリズムであるが、ハングル表記の看板の表現性が過去の漢字表記による看板を簡単に上回ることはできなかったようである。特に漢字の熟語をそのままハングルに直した場合は、情報伝達の機能が損なわれる場合が多くあった。本論においてはこうした機能の事例を資料より抽出している。

ハングルは、元々漢字に対して下位に置かれていた。換言すれば、両班という支配層の文字が漢字であり、社会的地位の低い層がハングルを使用していたことになる。このことから、ハングルと漢字は看板には混用されることが少なく、それぞれが独立していた。日本の漢字とひらがなというような混用が当初からなかったのである。本論においては、この文字としての独立性が、情報伝達の機能を難しくさせていることを示唆している。

ハングル専用運動が開始されて30年経た1980年代において、都市部の看板において、ハングルで詩的な表現やロゴマーク化した表現が示されるようになる。毛筆書体も含め、本論ではハングルによる新たな傾向に着目している。こうした傾向をハングルの進化と簡単に位置づけることはできないが、表現性が広がったという指摘は実に興味深い。

その後、民間においては漢字の使用についてしばしば議論が成されたが、韓国政府としては一貫してハングル専用政策を進めてきた（現在、金大中政権で漢字の使用を検討中）。

韓国という一つの地域における商業標識の変遷を、目印も含めた看板デザインで詳細に論究した研究成果は高く評価され、今後のデザイン研究に寄与するものと思われる。

よって、本論文は博士（芸術工学）の学位論文に値するものと本委員会は認めた。

最終試験の結果の要旨

最終試験を兼ねて公開発表会が、生活学、文化史学、視覚伝達学、美術史学など、関連する専門分野の研究者の出席のもとに開催された。論文提出者の発表に対し、出席者から、韓国の看板の定義について、文献における商業看板の初見史料の扱い方、目印や扁額の扱い方、文字と文字以外のマークの定義、中国や日本文化との比較、職業としての看板業の歴史認識、現代の景観としての要素、近年の詩的な表現性等について活発な質疑があった。いずれの質問に対しても、的確で納得のいく説明が論文提出者から成された。

よって、最終試験については、審査委員会合議の結果、合格と認定した。

韓国の看板デザインの歴史的変遷とその社会的文化的背景の分析

An Analysis of Historical Change in Korean Signboard Design and Its Socio-Cultural Background

郭明姫

Kwak, Myeong-hee

九州芸術工科大学大学院

Graduate School of Kyushu Institute of Design

The purpose of the study is to examine how the signboard in Korea developed throughout its history referring to documentary evidence, paintings, and data collected on field trips. By examining signboards from the view point of their design, color, material, content, locale, and so on, it is possible to grasp the social background, business practices, lifestyles, and people's values in the various periods examined.

One of the most predominant features in the signboard of South Korea is that Chinese characters were used. Chinese character started appearing in signboards from the Koryo period (918-1392) according to documentary evidence. The signboard in this period can be characterized by the fact that it did not carry information about merchandise or business matters but rather business philosophies and Confucius thoughts, such as "Practice virtue."

Governmental stores appeared in Yi Dynasty (1392-1910), and they dealt basically with one commodity per store. Signboards showed the merchandise a store dealt in ; as a result, the name of the commodity eventually became the store's name.

Until 1925 there had been no established word for "signboard." Then "Hanging business signboard" (sanup hyunpan) was invented for the traditional Korean signboard. During the colonial period (1910-1945), signboards carried Chinese characters, Japanese kana letters, and Roman alphabet because of a prohibition against using Hangul (Korean characters). Not only the name of merchandise but also the address and phone of the store, owner's name, trademark, and an explanation on the goods the store dealt in appeared on the signboards.

After 1945, when Korea was liberated, the Japanese-type signboards were removed and replaced by signs with Hangul (phonetic script) under the national policy called the "Hangul only movement." Although there is some inconvenience in using Hangul for signboards, its use continues to be strong. In the 1980s, poetic expressions that are available to Hangul users began to appear in signboards.

Through this research, I could find the fact that the word "kanban" was brought in Korea from Japan in the colonial period.

韓国の看板デザインの歴史的変遷とその社会的文化的背景の分析

目次	1
緒言	4
第1章 序論	
1-1. 研究の目的と方法	7
1-2. 看板の定義	7
1-3. 本論文の構成と概要	9
第2章 韓国における看板の出現と伝統的な商業形態	
2-1. 新羅時代の市場の成立と商業形態	12
2-2. 高麗時代の商業と看板の出現	13
2-2.1. 社会構造と都市の基本性格	13
2-2.2. 市場の形成と看板の特徴	14
2-3. 朝鮮時代の商業と看板の特徴	18
2-3.1. 市場の機能と役割	18
2-3.2. 常設市場の発達過程	23
2-3.3. 商業建築物の特徴	27
2-3.4. 開港後の都市の商業と看板の特徴	30
2-4. 総結	37
第3章 絵画と写真資料にみられる朝鮮時代商業と看板	39
3-1. 男性中心の社会	40
3-2. 酒店と旅宿	44
3-3. 看板のない店舗	46
3-4. 伝統的な建物標識と看板	54

3 - 4 . 1 . 扁額と懸板	54
3 - 4 . 2 . 柱聯	55
3 - 5 . 看板を意味する用語の変遷	57
3 - 6 . 総結	63
第 4 章 韓国の近代化と植民地時代の看板	
4 - 1 . 近代期の社会的状況と都市の一般的特性	65
4 - 2 . 大都市を中心とした看板の特徴	67
4 - 2 . 1 . 植民地政策による日本語の教育とハングル	70
4 - 2 . 2 . ハングルがもつ社会的意味	70
4 - 3 . 写真にみられる植民地時代の看板の特徴	75
4 - 3 . 1 . 看板に書かれた文字	76
4 - 3 . 2 . 看板の素材と形態	77
4 - 3 . 3 . 看板にかかれた内容	79
4 - 4 . 『朝鮮人の商業』にみられる韓国人の看板の特徴	81
4 - 4 . 1 . 商店名	83
4 - 4 . 2 . 文字	83
4 - 4 . 3 . 形態	83
4 - 4 . 4 . 素材	83
4 - 4 . 5 . その他	84
4 - 5 . 総結	103
第 5 章 現在の韓国における看板の成立過程と特徴	
5 - 1 . ハングル政策が看板に及ぼす影響	104
5 - 1 . 1 . 日本式看板撤去運動とハングル専用表記運動	105
5 - 1 . 2 . 国語醇化運動	104

5-1.3. ハングル専用運動	107
5-2. ソウルの仁寺洞看板	111
5-2.1. 文字の表記方式（文字の配列順）	112
5-2.2. 文字の種類	119
5-2.3. レタリングタイプ	119
5-2.4. 看板文字の数	120
5-2.5. 看板が示す情報内容	121
5-3. 慶州の看板文字	122
5-3.1. ハングル看板の書体	123
5-3.2. ハングル看板の書体の変遷過程	123
5-4. ハングル看板の課題	125
5-4.1. 表音文字	125
5-4.2. 表記方式と文字の数	127
5-5. 総結	130
結語	132
注	135
図・表の目録	139
参考文献・参考資料	143
謝辞	194

緒 言

韓国の慶州では、文化博覧会が1998年9月10日から11月10日まで約2カ月にわって開かれた。博覧会の開催に際して元文化芸術庁長官であった李御寧氏は新聞記事の特別インタビューにおいて、慶州の看板について次のように述べている。

「……この機会に慶州のプラスチック看板を撤去してほしい。千年古都慶州にふさわしい文化的看板の整備だけでもExpo開催の意味は大きいと思う。」

しかし、慶州のExpoに訪れた人の多くは彼の希望が叶えられなかつたことを実感したことであろう。

現在韓国の看板は、まずその数の多さが、景観の面だけではなく商業広告のための情報が伝わらないということにおいても大きな問題となっている。また、その質の面をみると材料やデザイン的な面で洗練されていないものがほとんどである。しかし、韓国の今日の看板は、そうならざるをえなかつた歴史的背景、社会的状況、慣習的な条件によって形成されてきたものである。そして、長い歴史の間、看板そのものの質の高さを判断する何らかの基準を持たなかつたのも事実である。

これまでの看板に対する韓国政府の政策は「日本式の看板の撤去運動」や「ハングル専用使用」など数多く推進してきたが、どれ一つをとっても看板本来の在り方についての政策ではなく、それぞれ時代の政治的な状況の一環として、つまり、国家的的理念や政策方針などのための広告手段として看板に対する規制を利用してきたともいえるのである。従って、韓国の看板の在り方について考えるには、まず、韓国の看板の変遷過程を通して、社会的な背景や政治的状況、生活慣習などが看板にどのように影響したかを論じてようやく可能となる。

本研究に取り組むに至った経緯を少し述べておきたい。1992年、私は留

学生として初めて日本にきた。留学生活を送っているうちに、日常見かける日本の都市の看板が私に大きな疑問を投げかけた。

「なぜ韓国の看板は写真で見るヨーロッパやアメリカの看板に比べると日本の看板とこんなに似ている点が多いのだろう」という疑問は、修士論文のテーマであるデザインにおける「地域性」を研究するきっかけとなつた。

地域性というものは、自然と人の営みが長い時間をかけて醸成されてできあがったものである。よって、韓国の看板も長い時間をかけて成立したものであって、いつから始まったか、どのように変化してきたか、なぜここまで日本のそれと似ているかを考察する研究へと進んだ。

一つの商店に掛けられる看板は、店舗の規模、商店の経済的条件、店主の商業思想、商品の特性など、複合的な条件が看板デザインの要素として、最終的にかたち化されるのである。また、看板の形態、素材、看板に記される内容、色彩、設置場所などを通して、それぞれの時代の社会的状況や商業習慣、生活文化、人々の価値観など多様な条件が反映されている。従って、看板は単なる商店の広告というだけのものではなく、看板の変容というのを詳細に検討することによって、看板はその地域が持つ文化や社会的状況そのものを投影させていることになるといえる。

これまでの韓国における看板の研究は、こうした歴史的、文化的な背景から考察したものが少なかった。その理由は、現在でさえ看板（商業用の広告看板）は日本とは違い、その商店や商店主の歴史や格を示すものとは考えられないからである。日本では「看板を上げる」とか「看板に傷が付く」という表現をし、その時の「看板」は商家や商店そのものの「顔」としている。

ところが、韓国では看板にそのような意味を持たせたりはしない。確かに、朝鮮時代以前は商業の社会的な地位が低かったのは事実である。しか

しながら、韓国は19世紀末より近代の道を歩み始め、商業の社会的地位や認識が少しづつ変容し、看板そのものの重要性は高まって今日に至っている。

本研究では、韓国における看板の歴史的変遷過程を通して、各々の時代の社会的文化的背景が看板にどのように影響してきたかを考察する。

なお、第1章は日本デザイン学会誌『デザイン学研究』126号（1998）に掲載されたレフリー付き論文「高麗時代から李朝時代末期までの韓国の看板に関する歴史的研究」を骨子としている。

また、第4章は現在『デザイン学研究』のレフリー付き論文として投稿中であり、第1回の査読が終了している。

第5章は「日韓デザインシンポジウム、韓国、1997」、レフリー付きの論文「現代韓国の看板デザインの特徴とその形成過程について—ソウルの仁寺洞の商店街の看板を中心に」を骨子としている。

第1章 序論

1-1. 研究の目的と方法

本論文の研究目的は、高麗時代以降の韓国の商業広告としての看板の出現、定着、発達の過程を通して社会的、文化的背景が看板にどのように影響してきたかを考察することにある。特に、看板に用いられる文字の変遷が看板の機能や役割とどのように係わったかを明らかにする。

研究方法は対象とする時代によって異なる。実物の看板がほとんど残っていない朝鮮時代末期までは、主に文献をもとに考察し、各々の時代の絵画や写真資料という画像資料を分析の対象とする。植民地時代の看板については、当時の看板に関する調査報告書と写真資料、またいくつかの実物看板を分析する。今日の看板については、ソウルおよび慶州の看板の現地調査の分析を行う。

韓国の看板の歴史的な変遷を直接分析した研究論文は管見の限り見当たらない。看板のデザインに関する論文および著書は本文の後に「参考・引用文献」としてまとめておく。

1-2. 看板の定義

今日使われている「看板」の意味とは、「見える板」あるいは「見せる板」という意味で、視覚に働きかけ情報を伝達する視覚伝達機能を表した言葉である。また、看板は英語のサインボード (signboard)と同じく、店の名や職業を板などに描いたもので、それを屋根や店頭に掲げるものという意味である。

『国語新辞典』(国語国文学会、東亜出版社、1958)においては「看板」とは、「文字や絵を用いて大勢の人の目によく見えるようにかける板。また人に知らせるために示す外観上の表示」と説明されている。

『国語大辞典』(イファスン、民衆書館、1961)においては「店などで大勢の人の目を引くため商店の名やその他商品名、営業種目などを記してかける標識、木材、鉄材、布材」と表現されている。

『新しい国語辞典』(東亜出版社、1989)においては看板の意味を「商店・営業所などの商号・商品名・業種などを書いて外ににかける標識」としている。

『朝鮮語大辞典』(社会科学出版社、1992)にはよれば「商店、奉仕機関及び、その他の一定の組織の名前や事業種目などを記して、尋ねてくる人が見つける事ができる場所に掛けるか張るかするもの」が看板であるとしている。

上記のような看板の解釈のみでは看板の持つ機能をすべて規定することは難しい。居酒屋などを中心として使われた「目じるし」としての「吊すもの」や「旗」などは、古くから看板の役割を果たしてきた。よってこれらは広い意味で看板と定義し、本論文での「看板」とは、辞書的な意味を基本としながら、「商業的空間および、商業標識全般」と定義する。

なお、1897年大韓帝国樹立以前の時代を対象とする時には、各々の時代を示す「高麗人」とか、「朝鮮」、「朝鮮人」とし、その以降の歴史を対象とする内容には「韓国」、「韓国人」とした。

1 - 3 . 本論文の構成と概要

本論文は 5 章で構成されている。

第 1 章は序論とし、研究の目的、研究方法、および看板の定義を明確にし、本論文の構成と概要について述べている。

第 2 章においては、韓国における看板の出現と伝統的な商業形態を中心とした新羅時代の市場の成立と商業形態、高麗時代の商業と看板の出現を基盤とした社会の構造や都市の基本性格、および看板の特徴を探る。続いて、朝鮮時代の商業と看板の特徴、市場の機能と役割、常設市場の発達過程、商業建築物の特徴、開港後の都市の商業と看板の特徴について考察した。

第 3 章においては、絵画と写真にみられる朝鮮時代商業と看板を中心として、ビジュアル的な資料に見られる当時の商業行為の特徴とされる男性中心の社会、酒店と旅宿、看板のない店舗について分析した。最後に韓国の看板と関連を持つ韓国の伝統的な建物標識と看板を意味する用語の変遷、扁額 [注1] と懸板 [注2]、柱聯 [注3] などと、看板を意味する用語の変遷について考察した。

第 4 章においては、韓国の近代化と植民地時代の看板を中心として分析した。主に、大都市を中心とした看板の特徴と植民地政策による日本語教育とハングル、またハングルがもつ社会的意味について探った、また植民地時代の写真資料にみられる看板の特徴を看板の文字や素材、形態、看板に書かれている内容と分けて考察し、また当時の看板の調査資料である『朝鮮人の商業』 [注4] から商店名、文字、形態、素材などについて分析を行った。

第 5 章においては、現在の韓国における看板の成立過程と特徴において大きく影響していたハングル政策である、日本式看板撤去運動やハングル専用表記、国語醇化運動について述べた。また韓国の代表的な都市である

ソウルの仁寺洞〔注5〕の商店街の看板や韓国において最も伝統的な特徴を残した都市である慶州の看板を事例とし現地調査を行いその結果をもとに、現在の韓国の看板の、文字の表記方式（文字の配列順）、文字の種類、レタリングタイプ、看板文字の数、看板が示す情報内容お特徴を明かにした。

また、これらの考察をもとに今日ハングル看板の課題として表音文字、と表記方式と文字の数について述べた。

最後に、韓国の看板の歴史的変遷とその意味について結論を述べた。

表1 研究の構成と概要表

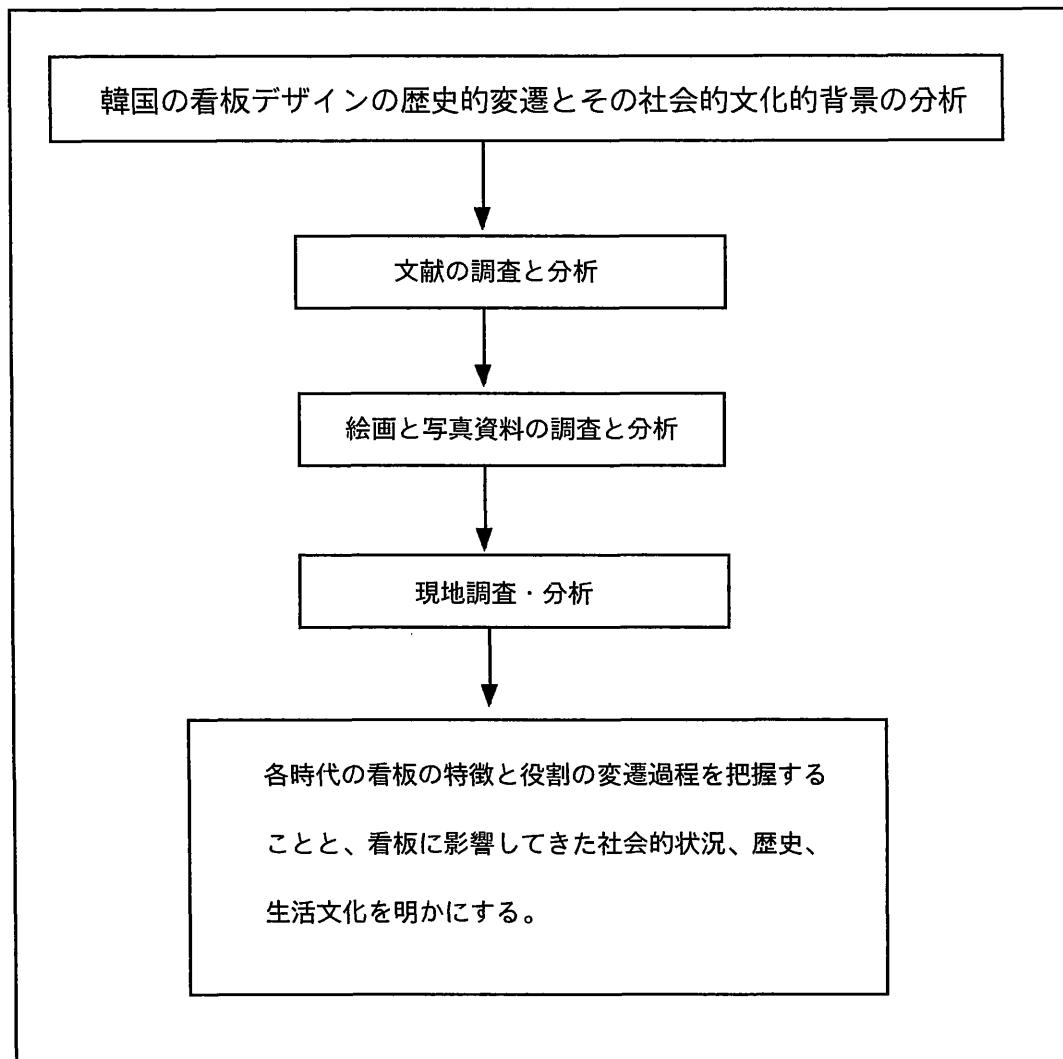


表2 韓国の年代表

	韓 国	日 本	中 国
100			
西暦後	三国時代 (新羅、高句麗、百濟)		
200			三国時代(220-280) 普王朝(265-420)
300			
400			
500			南北王朝時代(420-580)
600		飛鳥時代(552-645)	隋王朝(581-618)
700	統一新羅時代(618-935)	奈良時代(645-794)	
800		平安時代(794-1185)	
900	高麗時代(918-1392)		五王朝(906-960) 宋王朝(960-)
1000			
1100		鎌倉時代(1185-1392)	
1200			元王朝(1279-1368)
1300	朝鮮時代(1392-1910)	室町時代(1392-1568)	明王朝(1368-1644)
1400			
1500			
1600		江戸時代(1603-1868)	清王朝(1644-1912)
1700			
1800	大韓帝国宣布(1897)	明治時代(1868-1912)	
1900	韓日合併(1910) 第2次世界大戦終戦(1945) 大韓民国の建国(1948) 李承晩大統領 朝鮮動乱(1950) 第3共和国(1963)	大正時代(1912-1926) 昭和時代(1926-1989) 平成時代(1989-)	中華民国樹立(1912) 中華人民共和国の 樹立(1949)

第2章 韓国における看板の出現と伝統的な商業形態

2-1. 新羅時代の市場の成立と商業形態

『三国史記』の記録によると、「……初開京師市 以通四方之貨」とあり、5世紀末（490年）新羅時代に初めて首都に市場が設置されたことがわかる。また、509年には京都東市が開設され、首都に二つの市が設置された。さらに、新羅が三国（新羅、高句麗、百濟）を統一した（695年）後には、西市と南市を設置し、首都の東大門と南大門通街路に市場が設けられていた。それらは「東市典」と言う官庁が管理しており【注6】、一つの市場の区域に最少限8名の管理者が配置されるなど、その商業活動は活発なものであった【注7】。

『新唐書』【注8】には「新羅市皆 婦女貿販」という記述があり、これから見ると、当時の女性たちは自由に商業活動ができたことが想像される。こうした新羅の首都であった慶州は、商業的性格が強い都市で、最も繁栄した時期には慶州の城内（街の中心部）に藁屋根の家は一軒もなく、すべてが瓦屋根であり、奇麗な市街地を形成していたと言われている【注9】。

韓国の古代国家の市場は政府によってつくられ、政府によって管理されてきた国家事業であった。このような状況における商業標識は、国家の政策の下での市場の設置およびその管理と共に出現したと考えられる。

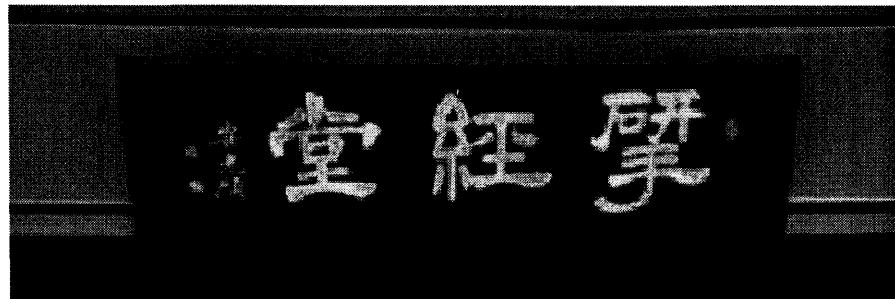


図1 現在海印寺にある商店の看板

高麗時代の商業建物は国家的な次元で造られたことから当時の寺院の扁額や大門の上に掛けられた懸板の形式が用いられたのではないかと考えられる。

2-2. 高麗時代の商業と看板の出現

2-2.1. 社会構造と都市の基本性格

高麗の首都は根本的に支配階級のための都市であった。首都内には王室、官僚、貴族、僧と彼らの生活のための奴隸、手工業者、商人、それから彼らの身辺を保護するための府兵がいた。

地方都市住民の大部分は、郷市（地方商業都市）の発生にも関わらずその身分が農民であって、guildが中心であった同時代の西洋の商業的都市とは異なる性格を持っていた。

市場は御用商店として、首都の中心部に常設店舗をもって商業行為を行なったが、地方都市では週1～2回の郷市が開設された。このような週市の発達は農・商・工業の生産過程を分離させた。専業的な市場商人が都市で定住商人として出現するようになって、都市経済勢力を形成するうえで重要な原動力となった〔注10〕。

2-2-2. 市場形成と看板の特徴

高麗時代の太祖2年（919年）春に開京を首都と定め〔注11〕「立市塵」、「創宮闕」、「辨坊里」を首都建設の3大要件とした。即ち、高麗時代には貨幣の使用や宋との貿易を通して商業経済が非常に発展し、首都に官設市場を設置することは首都建設の3大要件の中の一つになるほど重要な事業であった〔注12〕。

首都の商業建築物に看板が掛けられていたとする最も早い記録は、1123年高麗に来た宋の人が書いた『高麗図經』〔注13〕の「推自廣化門至府及館 皆爲長廊間 榜木坊門 曰永通、曰廣德、曰興善、曰通商、曰存信、曰資養、曰孝義、曰行遜...」という記述が引用されている。これについて『韓国の商業の歴史』では都城の中心地である廣化門から府及館に至る道路辺に建てられた市場の各坊門には看板が設置されていたと解釈されている。だが、具体的になにを売っていたかについて知ることは難しい。この看板がどのように設置されていたかについて、金裕聖の「朝鮮時代漢陽

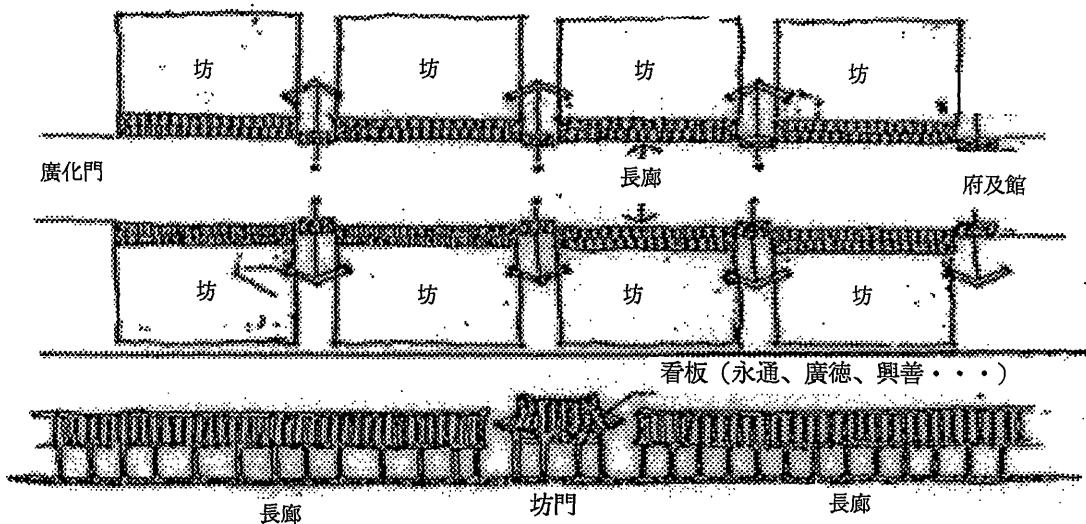


図2 高麗時代の商業建物である長廊の推定図

「市街の行廊建築に関する研究」には、朝鮮時代の商業建築物の原形は高麗時代のものであるとし、文献を元に推測した図2は高麗時代の看板の設置場所について記している。

『高麗図經』に書かれている「榜木」と言う文字の「榜」は、「かけふだ、たてふだ、看板、掲示板」という意味をもち、かかげ示す。掲示することを示す」の言葉である〔注14〕。これは当時の商業標識を示す言葉であり、今日の看板にあたるものと考えられる。この榜木の上には永通・廣徳・興善・通商・存信・資養・孝義などの文字が書かれ、建物の坊門に掛けられ

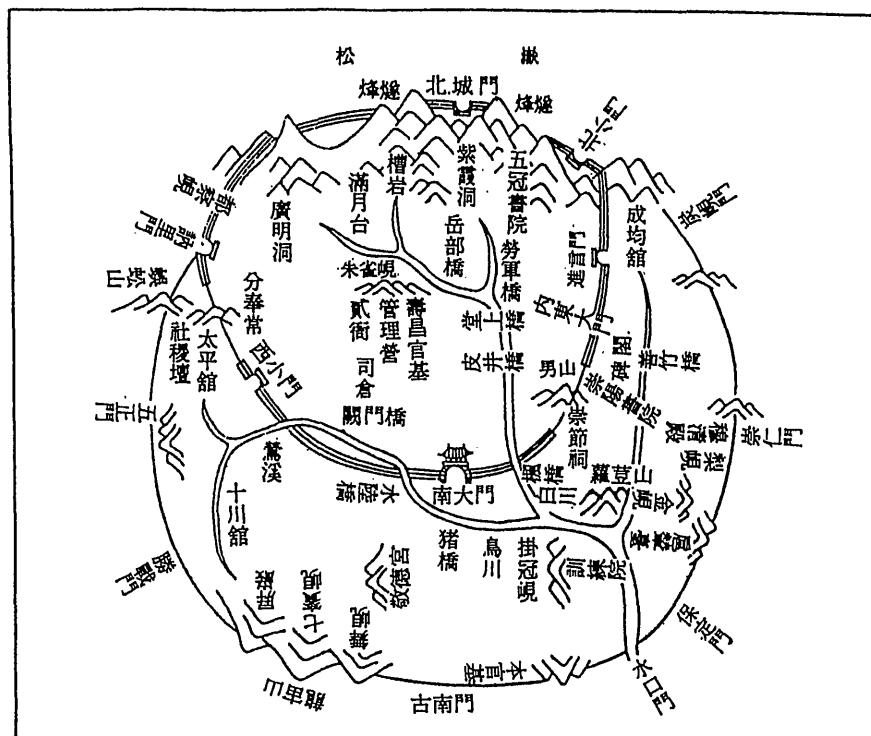


図3 開京図

ていたと記されている。当時高麗の首都ではアラビア、インド、中国、モンゴル、日本など諸外国の商人が行き交い、国際的な貿易が行われるなど、活発な商業活動が行われた〔注15〕。また、当時東アジア圏でのコミュニケーションの手段は漢字であったことなどにより、早くから文字看板が形成されていたことが推測できる。

これらの看板が設置されていた市場建築物は、長廊（長屋・図2）の形式であり、この長廊形式の市場は次の李朝時代にも応用され、漢陽（今のソウル）市街の商業建物である「行廊」として現われた。このように高麗の首都である開京の商業は長廊形式の商業建築物を中心に発達し、朝鮮王朝（李朝）が首都を漢陽に遷都した以降にも商業都市としてその機能は発達し続けた〔注16〕。即ち高麗の商業建物は李朝時代の商業建物の原形ともなっているのである。さらに、金裕聖は「朝鮮時代漢陽市街の行廊建築に関する研究」の中で、「高麗の長廊は10間ごとに垂幕を垂れ、仏像をまつり、そこを通る人には貴賤の区別なく飲み物を与えていた」と述べている。このことから、市場の機能だけではなく宗教的な役割も担っていたことが推測できる。つまり、単純に交易だけではなく、住民らの生活の場として開かれた公共空間として機能していたと推察されるのである。上記論文の筆者が再現した図2〔注17〕は看板の位置や形態を推測するうえで参考になる。

図1は現在の海印寺（802年創建）にある商店の看板であるが、高麗時代の商業建物は国家的な次元で造られたことから、当時の寺院の柱や大門の上に掛けられていた懸板形式が用いられたのではないかと考えられる。

最も規模の大きい都市の市場である開京の官設市場は、国初以来、御用商店としての市場が常設店舗であった。商店は都市の中心地に形成され、すべてが長廊を設け、坊門には看板が掛けられていた。高麗中期、末期に入つてからは特に中国の宋との貿易が活発化していくにつれ、長廊と大倉

庫など、大規模の商店街が形成された。その他、一定の場所に路上市場が設置され、朝夕市が開かれ、周辺農民たちの生産物や地方特産物直接相互交換された〔注18〕。

商業形態は店頭での座売であった。商品は正面及びその両側の数段の棚に見本だけを陳列し、取引品は都家という倉庫に置いていた。また、これらの商店街では旧正月、旧4月8日、5月5日端午などの節句に様々な祭が行われた。4月8日には花祭の行事を行い、市街が彩旗や提灯で飾られ、煙火が打ち上げられた。また、端午の節句には、敬徳宮にて上下の婦女が雅趣味に富んだブランコ遊びをするため近郊数里より客が集まり、その機会を利用して商人たちは店頭を装飾し、商品販売に熱をあげた〔注19〕。

これらの商業形態や『高麗図經』に書かれている看板の内容、市場の特徴、また社会的な状況から、当時の看板の機能と特徴は次のようなものと推察できる。

- (1) 高麗の看板は、国家次元で商業建築物に設置されたものであって、公共性をもったものと考えられる。
- (2) 看板には文字（漢字）が書かれていて、顧客は主に文字が読める上流階層であった。
- (3) 高麗時代は中国の宋と交流が多かったため、看板においても宋の影響があった。
- (4) 看板に書かれている文字は商品や業種を表わすものではなく、店主の儒教的な精神世界や経営信条を表わしていて、商業のための広告宣伝の役割というより、当時の一般的な建物標識の機能が大きかった。
- (5) 当時の商業建築物の形態や建物標識との関係を考えてみると、設置されていた場所は建物の門の上か、あるいは柱であった。

2-3. 朝鮮時代の商業と看板の特徴

2-3.1 市場の機能と役割

韓国における看板の性格が近代以前にはどのようなものがあったかを知るために、主にカンマンギルの『韓国商業の歴史』[注20]、ウンチョンソプの『都市計画史概論』[注21]を参考にしながら朝鮮時代の商業活動について概観する。

1392年に朝鮮王朝が成立され、今のソウルに首都が移された。最も重要な事業は、新たな市塵建設であった。初めての市場建築物の計画は、1399年鐘路を中心にして惠政橋から昌徳宮の入口に至る道の左右両側に、800余軒の市塵建物を建てるものであったが実践できず、1410年に改めて計画され、1412年から始まり、4つの段階に分けて造られた。

第一段階は、1412年2月から始まって、その年4月まで、惠政橋から昌徳宮入口に至る道の左右両面に、800余軒の市塵建物を完成した。第二段階は、同じ年5月に始め、宮の大門から貞善坊の洞口まで472軒の建物を

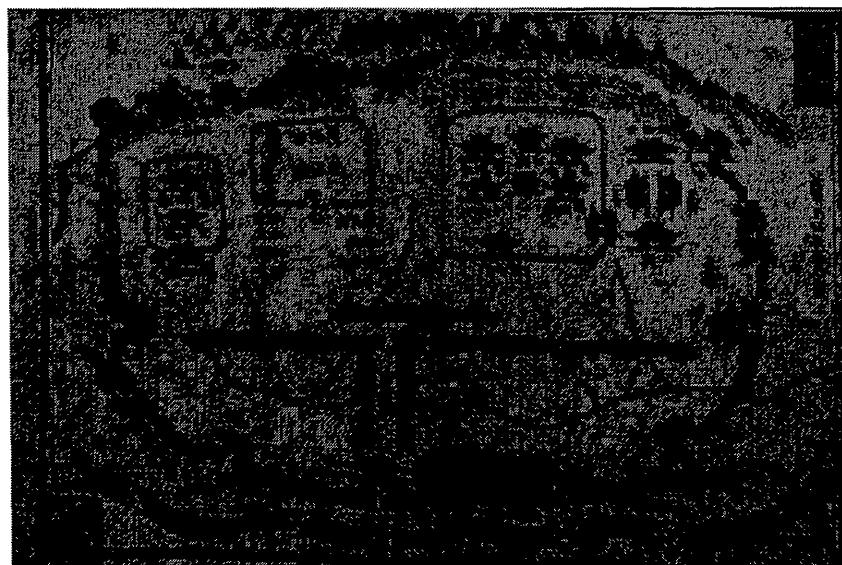


図4 「天下図」

17世紀ソウルの公共建築物のイメージ地図

下半分が _____ 常設商店である。



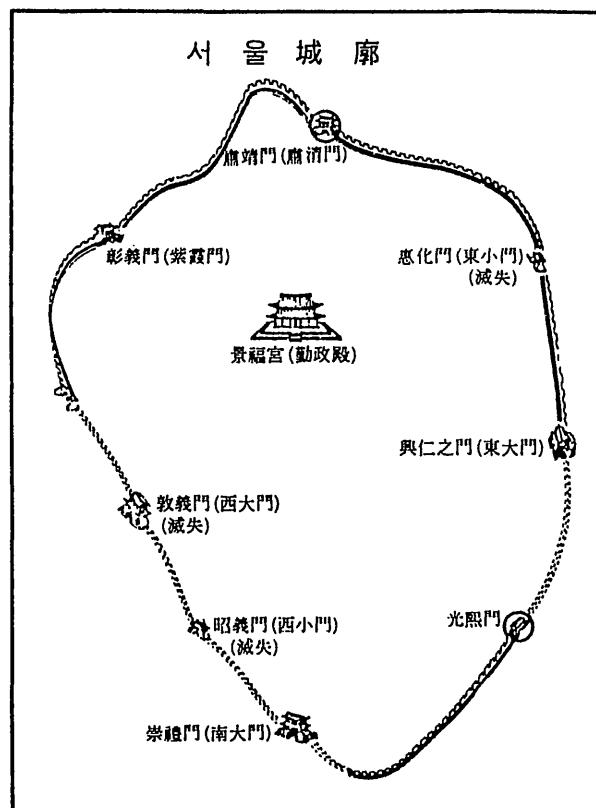


図5 朝鮮時代のソウルの城廓

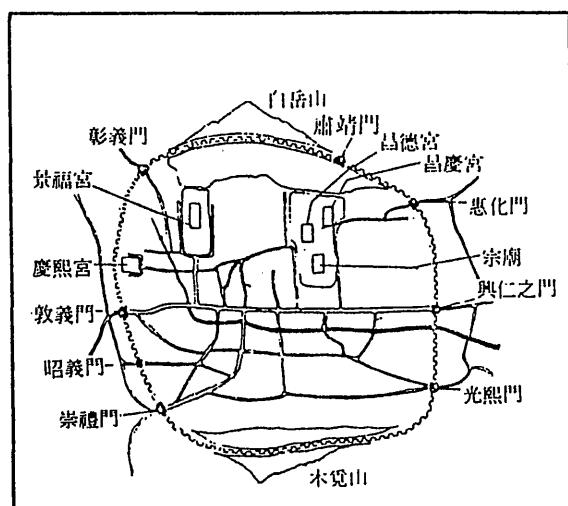


図6 朝鮮時代のソウルの幹線道路図

建て、第三段階は同じ年12月から翌年の1413年5月に鐘楼から景福宮までと昌徳宮から宗廟前まで、さらに南大門付近など総1360軒を完成させた。第四段階は、1414年鐘楼から南大門までと宗廟から東大門までの道の両側



図7 朝鮮時代末期の常設市場配置図

に市塵建物を完成した。

政府によって造られた市塵建物は、政府が指定する一定の商人らに貸して公廊税を徴収した。また、朝鮮時代の市塵組織は、同じ商品を売る市塵商人らが集まり、同業者組合をつくって、政府との関係を継続的に維持していた。

ソウルで最も規模が大きかったのは立塵、即ち、絹の商人組合であった。

立塵建物は鐘路通に位置し、各組合別にその業務を処理する事務所と言える60坪ぐらいの広い「都家」があり、一定の運営条例と役員組織があった。組合員の条件と加入は非常に厳格なものであった。年齢の制限も厳格で、50才以上の人には許可されず、24才以下の人には総会の満場一致を得なければならなかつた。市塵組織の構成において最も重要な基準は血縁関係であつて、その会員の資格は世襲されるものであった。

朝鮮時代の市塵の機能は大きく三つであり、その第一が、ソウル市民に生活品を調達する機能であった。15世紀のソウルの人口は15万人で、大部分が消費者であり、その都市民の生活品を供給する市塵の役割は大きかつた。

第二機能は、政府が必要とする物品を調達することであった。調達品の内容は、政府が直接使う物品や中国に送る進献物であった。このように政府は実に大きな需要者であったのである。特に中国に送る進献物は、市塵商人が独占調達したため、彼らの社会的な立場は極めて重要なものであった。

第三の機能は、国家の残りものを処分することであった。つまり、農民からの徴収させた物品の中で、国家が使って残ったものをソウル市民に販売することであった。これらは市塵商人達の特権であった〔注22〕。

16世紀に入ってソウルの市塵商業界に変化が始まった。農民らがその本業を捨てて商業や手工業に従事するため、ソウルに集まって来ることで、

都市の商業人口が増えて、従来の市塵商家以外のいろいろな所に新しい市場が立つようになった。市塵商人以外に新しい商人、いわば私商人が現わされたのは、都市の人口が増加したことと、商業の発達の証拠であるが、これまでの市塵商人との間に大きな競争が起こるようになった。

朝鮮時代の経済的な基盤は、儒教的な農本思想によっており経済施策は農業を根本とし、商工業は末業する政策であった。商業は貴族階層に対する御用的性格で、貨幣経済の未発達などによって、自由な発達はできなかたのである。

身分階級は両班、中人、常民、賤民として大別できる。身分によって国家に対する権利と義務はもちろん社会的な権利と対応とが異なり、職業を世襲し、身分によって居住地も異なる場合が多かった。

両班は農工商や特殊な技術のような生業に関わらず、ひたすら官吏として出世することを目標とする身分であり、国家に対する生産と賦役の義務は持たなかつた。中人は特殊な技術を持って政治を補佐する従属的な位置にある階級であり、大部分が農民であった。社会最下層階級としての賤民は人権が認められず主人による売買と譲与、および相続の対象とされた。蔑視された職業としてガンデ [注23]、ムダン（巫女）、ベクジョン（屠殺業、肉屋）があった。

16世紀に入ってからは、外勢の侵入によって経済状況と財政が悪化し、社会制度が混乱した。両班支配の社会体制が揺れ、伝統的儒教的な規範から抜け出そうとする社会風潮が著しくなったのは、18世紀になって産業経営者が発生し、自営農民が成長し、流通過程においても貨幣的要素が増大し、官営工業の不振にともなって独立自営匠人が多数出現したことによる。

実学者たちは重農主義に基づいて土地制度の改編を主張し、一部は商業を起こし、手工業の発展と技術の開発や導入に積極的に努力するべきであると主張するようになった。彼らは重商論と技術尊重論など、伝統的な職

業觀、身分觀を脱皮することで一致し、それは近代的思想に一步近づいたことで非常に大きな意味をもたらした。この時期から一部の両班層が没落し、庶民の社会的進出が目覚ましくなるにつれて産業の発展が始まるようになり、地方都市でも商工業が徐々に起こるようになった〔注24〕。

2-3.2. 常設市場の発展過程

16世紀頃から現われた私商人の発達と市塵商人との競争は、壬辰倭乱(1592年)の後、17世紀頃から本格的になった。

17世紀後半から現われ始めた商業界の変化と発展は、三つの側面に現われている。第一は、民間商人らによる外国との貿易、つまり日本と中国との貿易が発達したことである。このような民間人による外国貿易の発達は、国内商業界に活気を及ぼす結果をもたらし、市塵商業界の変化の原因となつた。

第二の発展・変化は、金属貨幣の全国的流通であった。朝鮮王朝初期から金属貨幣の全国的な流通を政策的に試みたが、経済的な条件が成熟されてなかつたために失敗した。しかし、17世紀に入ってからは常平通宝を鋳造し、通用させてからは徐々に流通が拡大され、ついに17世紀末期には全国的な流通を果たした。

第三の特徴は、都市の商業人口が急激に増加したことである。壬辰倭乱で国土が廃虚となり、農土を失った農民らが都市に移住して、商業人口となり、この現象がますます深刻になっていた。当時のソウルの人口は20万を超えた。商業人口の増加は、商人の間に激しい競争を生じさせ、大きな変化の原因となった〔注25〕。

このような17世紀の発達と変化は「禁乱塵権」の成立に大きな原因となつた。

1) 禁乱塵権の成立

「禁乱塵権」とは、特定の商人が政府より独占売買権を受けた商品を、市塵商人や私商人が売買する場合、独占売買権を持った商人がその商品を押収し、その商人を政府に告発できる権限をいう。一部の商人らは政府権力と結託し、独占的に商業行為のできる特権を得ることによって、他の商人との競争から抜け出そうとした。

「禁乱塵権」の成立は独占商人の法律的な根拠になった。その代表的なのが六矣塵（李朝時代に鐘路を中心に設置された六種の市塵を称する言葉）であった（図7参照）。主に、立塵（絹布販売）、錦布塵、錦紬塵、紙塵、苧布塵、内外魚物塵など6種類であるが、時代によって商品種類や市塵の数が増えることもあった。乱塵と言う言葉は、市塵が設置されている都市内で、許可を得た市塵商人ではない私商人を示す言葉であるが、同じ市塵商人でも決まった商品以外の品を売買する場合を示すことでもある。朝鮮時代後期に至っては、都市生活に必要な新しい商品が現われた時、それを特定市塵商人に独占的に販売することのできる根拠にもなった。

「禁乱塵権」が成立したもう一つの要因は、政府側にあった。朝鮮王朝の重要な財政収入は、土地税と人頭税であった。しかし、壬辰倭乱などの戦争のため、土地台帳や戸籍台帳が焼かれ、この二つの収入に大きなつなづきが生じた。

政府は市塵商人から受け取った従来の公廊税以外にも、国役と言う名目で必要な時に物品を集め、または収めさせ、その代わり彼らに禁乱塵権を認めざるをえなかった。

朝鮮時代後期の市塵商業界には、新しい市塵が多く現われ、市民の生活品大部分が市塵商品になっただけではなく、禁乱塵権が市塵全体に拡大されていくにつれ、生活品の大部分が市塵商人らの禁乱塵権の対象となっていました。しかし、これらは都市商業の流通秩序を大きく乱し、都市民の生

活を脅かす結果となった [注26]。

2) 通共政策の実施

朝鮮時代後期の禁乱塵権は、深刻な物価高を及ぼした。特定商品に対する独占的な売買権を持った市塵商人らは品の値段を自由に調停でき、そのため、今まで見られなかった物価の上昇をもたらした。物価高は都市民の消費者、特に貧しい庶民の生活を大きく脅かした。

禁乱塵権の拡大強化は、都市の小商人と零細手工業者たちにも大きな打撃を与えた。資本力が弱い零細商人らは、都市生活品すべてが市塵の独占化されたため、生き残ることは難しくなり、禁乱塵権の撤廃のために戦わざるをえなかった。

市塵商人の禁乱塵権に対抗して、それを弱体化させたいま一つの勢力はこの時期に成長していた手工業者であった。従来ソウル市内の手工業者、つまり、工匠の大部分は、政府が経営する官庁の手工業場に動員された。しかし、16世紀頃から官庁の手工業場の一部が廃止されて、そこで手工業者の一部が都市の民間手工業者として成長していた。

民間手工業者の一部は、自ら同業組合をつくり、市塵を開設し、自分が作ったものを直接消費者に販売した。この場合、手工業者は一つの経営者として成長していきながら、一般市塵商人のように禁乱塵権を持つ特権商人として昇格した。しかし、他の手工業者らは、この時期に急激に成長していく商業資本家の雇用者として転落するか、あるいは零細手工業者として、市塵商人や市塵を開設した手工業者たちによって圧迫されていた。

都市商業において、禁乱塵権の強化拡大は、都市の貧しい消費者と商人たち、そして手工業者は大きな被害を受け、強く反発するようになり、それまで市塵を擁護し、乱塵を弾圧した朝鮮王朝は、徐々にその本来の商業政策を変更するようになった。

1741年、当時の政治家である李普赫は市塵政策の変更について次のように

に主張した。第一は、規模が大きく、扱う商品が肝要な市塵だけが禁乱塵権を行使できること。第二に、市塵商人が直接乱塵商人を処罰できないようにすること。第三には、市塵商人が禁乱塵権を行使できる地域をソウル市内に限定することであった。

朝鮮王朝の商業政策の変化の重要な要因は、当時の都市商業界に広い範囲に勢力を延ばしていた私商人層がついに1791年に、官営の市場である市塵から禁乱塵権を奪った政策である。それは「辛亥通共」の実施であった。これは朝鮮王朝の商業史において最も画期的なことであって、自由な商行為を可能にした政策である。

市塵商人たちは禁乱塵権の復活を要求したが、政府によって拒否された。その理由として、禁乱塵権は民衆の公共の利益に反することと、禁乱塵権が復活すると市塵商人には利益になるが、都市零細商人らが失業するからなどをあげ、またそのことをソウル市民の8、9割が支持していることであった〔注27〕。

辛亥通共(1791年、特定の市塵商人の専売特権をなくし、すべての商人に平等な権利を与えるために実施された政策)以降、市塵の禁乱塵権が完全に廃止され、すべての商品が完全に自由売買になったと断定するのは難しいが、この政策が適用された以降の都市商業界は、特権商業体制がだんだん解消され、私商人らの商業活動が活発になっていったのは事実であった。

3) 朝鮮後期の都市における私商の発達

都市で発達した市塵商業は、政府から許可を受けて、一定の特権を持った官商としての性格をもたらしたが、これと反対の純粋な民間商人である私商、即ち、乱塵商人は前に述べたように16世紀頃から発達してきた。

ソウルの場合を事例にあげると、市塵商人が持つ禁乱塵権の適用地域がソウルに限定されたため、その商圈もソウル市内に限定されていた。しかし、私商人はソウル市内はもちろん、その周辺に発達している衛星都市と、

生産地から商品がソウルに運搬される中間都市などまで、その商圏が拡大連結されていた。ソウル市内の私商人は、禁乱塵権と戦いながら、一定な組織を備え、規模を大きくし、資本や営業規模が大きくなつて「私商都賈」と呼ばれた。1786年における一人の官吏の報告によると、私商都賈の発達によって物価が高くなり、市塵が被害をを受けるなど、富が偏重されている。その例として、私商人らが地方から輸入される米を買い溜めて、ソウル市内の市塵商人たちを勝手に操縦するのをあげた。

ソウルの場合、私商都賈らが活動した中心地は、今のチョンバ洞付近である七牌と東大門近所であった。鐘路と広橋通は市塵商人たちの中心地であったため、私商人らはこの場所を避けて七牌と東大門近所を根拠地にした。これらの地域がいつから私商人らの根拠地として発達したか、正確に知ることは難しいが、18世紀の前半期に、もはやソウル市内の最も大きな商業中心地として発達していたのは確かである。

一方、朝鮮王朝後期にはソウルや周辺都市以外にも、地方の重要な生産地周辺や各交通中心地に私商人が集まって來た。地方交通中心地が除々に商業都市として発達していくに連れ、行商人の中にはそこに定着する者が現われた。国境都市でも民間商人たちによる外国貿易が発達することによって、そこに定着する商人たちが増えるようになった〔注28〕。

2-3-3. 商業建築物の特徴

朝鮮王朝（李朝）は1392年、今のソウルに首都を移し、最も重要な事業として重要幹線道路（図5,6参照）を設備し、市塵を建設し、常設市場の設置を始めた。この市場建築は、高麗王朝の開京の長廊をそのまま継承した建物を造り、李朝時代の記録では行廊は長廊と書かれている〔注29〕ことから、形態やその用途においても高麗時代の市場建築物と非常に類似したものであったと思われる。

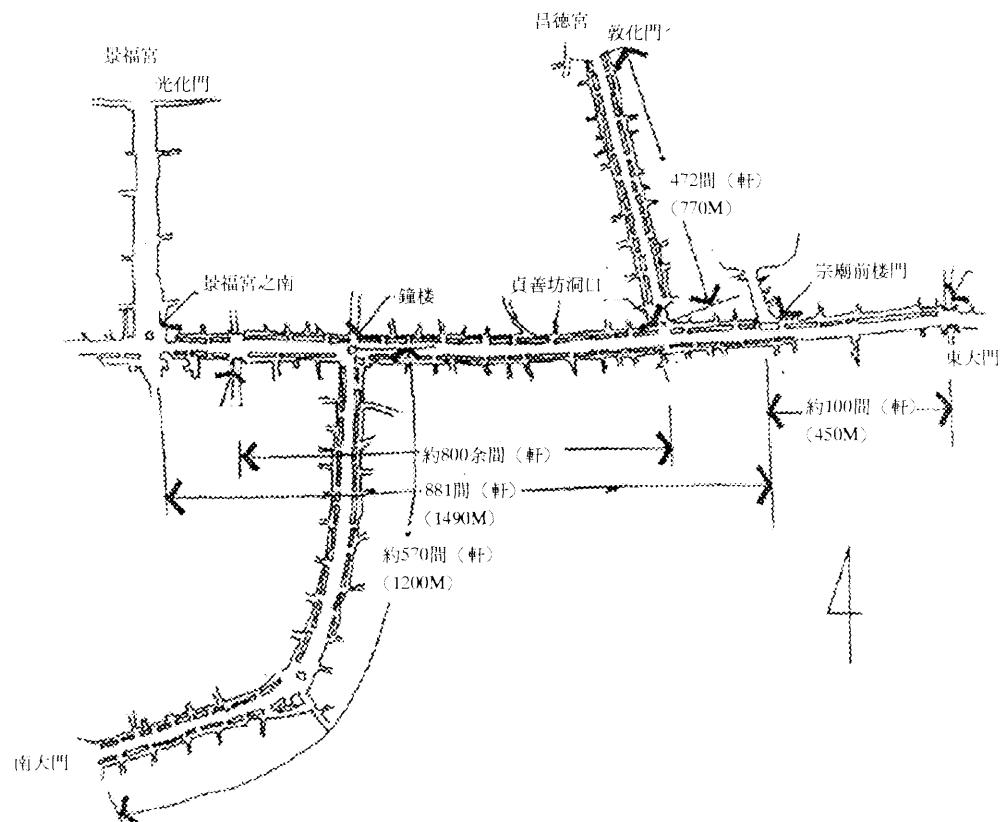


図8 朝鮮時代の道路の長さと行廊（常設店舗）の軒数

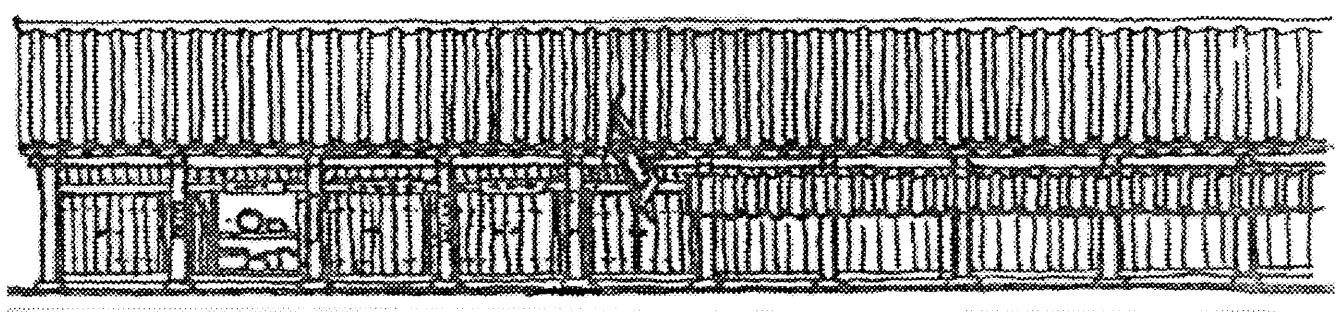


図9 市廻行廊の立面の推測図

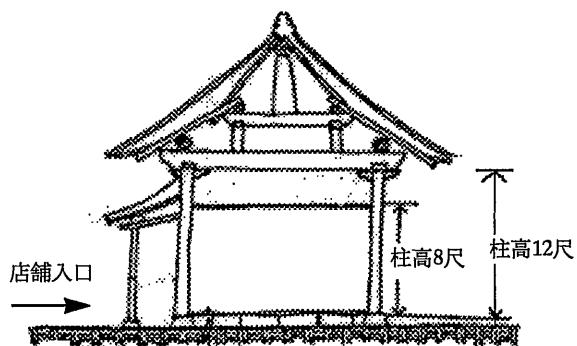


図10 行廊断面推定図

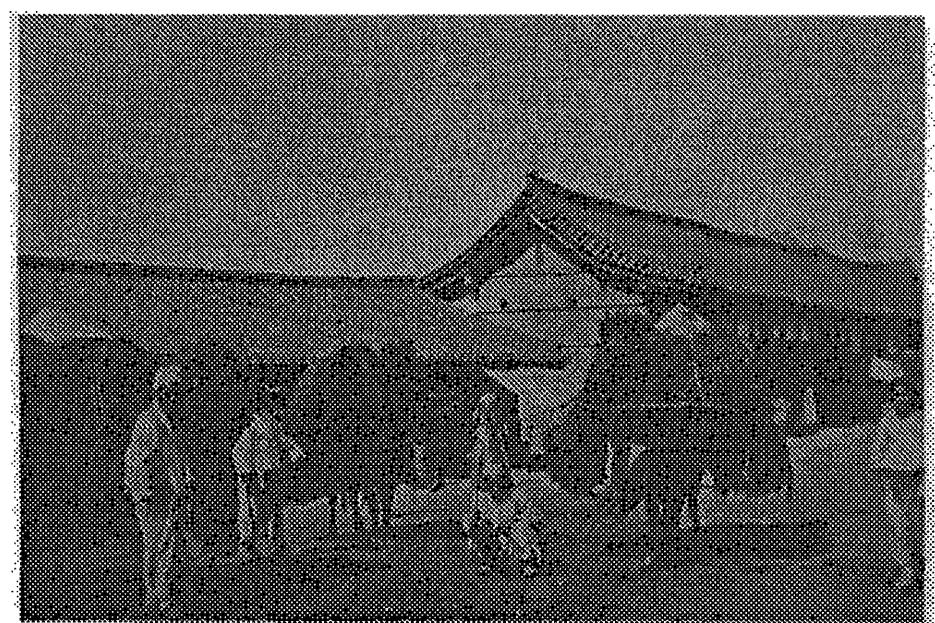


図11 李朝時代ソウルの商店街 19世紀末期
行廊建築が見られる。

金裕聖によれば、これらの商業建築物の具体的な位置や道路の長さや行廊の間（軒）数は図8のとおりである。また、当時の建築物は高さや規模、方向規制の制度が「陰陽五行説」によって制限されていた。韓国のように山が多い国は国土そのものが陽で、そこにもし陽の性質の高い家を建てるに陽と陽が互いにかちあうので、すべての建築物は低くすることにより、陽（多山）と陰（低尺建物）の調和を計った。従って高麗時代の初めから李朝末期まで1000余年間このような原則が守られていた〔注30〕。

当時は住民らの贅沢な生活を禁じるための「家事制限令」（1431年）が施行されていたが、最も代表的な市場であった市廬建物は例外とされた。このことから、市廬建築物の装飾が可能であったと考えられる。しかし、1592年日本の豊臣秀吉による李朝侵略以降、国の財政難から後期の市廬建築物にはこのような装飾が見られなくなり、徐々に官府や仏寺でも真彩丹青使用は禁止された〔注31〕。図4「天下図」は17世紀のソウルの公共建築物のイメージ図であるが、これらの行廊形式の商業建築物は国家の公共建築物として建設され商業だけではなく、街路の景観を保つことや外国との貿易において国の権威を表わすことを目的としたのではないかと推測される。

2-3.4. 開港後の都市商業と看板の特徴

朝鮮時代後期からは商品流通の発達や手工業の発達によって市場経済が非常に発達してきたが1876年、日本との間に丙子修好条約が採決され、それによって、釜山を始め、重要都市が外国商人たちに開放された。それは韓国の商業歴史上、商業の近代化という大きなきっかけになることであった。

丙子条約によって、始めは海岸都市のみ開放されたが、やがて外国商人の商圈はだんだん内陸地方の都市まで及ぶようになっていった。

1882年、中国との間に商民水陸貿易章程が結ばれ、この条約によって旅行証を持った中国人が内陸地方まで入って商行為が可能になった。1883年には条約の改訂によって、開港場の周辺百里までは商行為が可能になった。従って、常設商店の設置の可能な地域が拡大され、地方の各重要な都市にも外国商人たちの常設店舗が増えていった。

開港後にも禁乱塵権の適用は部分的に継続されていて、朝鮮に来ている外国商人に損害を与えたため、1894年ついに廃止された。そのためソウルにいる日本と中国の商人らは自由に商売ができた。

李朝の政治的構造をみると、中央の政治機関は中国のそれが多少変形された李朝特有の体制が整えられ、特に王朝と両班（貴族）官僚の権力が強大されていた。政治的基盤は儒教的農本思想によって主に土地経済に依存したことから、経済施策は農業を根本とし、商工業は末業とされる政策であった。朝鮮王朝の初期から政府と緊密な関係を持ち、その保護に守られ



図12 朝鮮時代地方市場の風景

左後ろに日本式の建物がみられることから、おそらく韓日合併後の市場であると考えられる。

維持してきた市塵商人たちは、この時期に入ってからは新しい思潮の影響を受け、総商会は全国の商人を加入させ、また、独立協会の助けを求め、ようやく自由な商人として変化していった。

開港後、市塵商人たちは彼らの資本を近代的な生産工場を建てるために投資した。開港直後には、外国商品の浸透になんの対策もなく、それを受け入れるばかりであった。しかし、近代的な商品を国内でつくって使うべきだという自覚を持つようになった。布を織る工場、煙をつくる工場に市塵商人の資本が投資された。外国の商人たちに対抗しながら、各都市の土着商人たちは資本や経営の面で次第に規模を大きくしていき、商人としての資格や性格が近代的なものに転換されていた。

しかしながら、図12にみられるように大部分の市場の商業形態は朝鮮時代の慣習を保ち、女性が市場に出て買い物する風景はみられない。

韓国語で市場は「*저자 ジョザ*」である。文献には市場ジョザの意味での漢字が「市」、「店」、「埠」、「塵」などと書かれており、市場に行くことを



図13 朝鮮時代末期の雑貨店

を「行市」と言い、買い物に行くことを「看場」、或いは「看集」とも言う。ここでの集は場と同じく市場を意味する。そして李朝時代後期になるほど市よりは場という言葉が多く使われた。また、首都で交易することは「市」とし、地方で売買することは「場」と区分した。

「場」という名称について李朝後期の学者であるイキュキヨン(1788~?)は自分の著書である『五州行文長散稿』[注32]に「高麗時代仏教が盛んで、仏僧と一般市民が集まる道場を数多く建てたが、市場の姿が、このように入人が大勢集まる道場と似たことから市場が『場』(図12参照)と呼ばれたのではないか」と書いている。

朝鮮時代の常設商店は、その規模や売っている品物によってそれぞれ異なる言葉で表わされた。

「塵」は一番規模の大きい商店を称する。公廊 [注33] と六矣塵- [注34] がこれに当たる。

「店」は鉄器や土器などを造って売るところである。例えば金店、銀店、



図14 柿と煙草の販売をしている一番小さい店、朝鮮時代末期

銅店、鉄店、陶器店、酒店などである。店幕は旅館を言う。

「房」は塵より小さく、笠房、玉房、銀房、など製造販売ができる、普通の部屋一つの大きさの商店である。

「局」は主に薬局に限って使う。

「家」は仮家とも言い仮設物、或いは露店を言う。

「在家」は一番小さい店のことである。本店に対する支店や分店といえる [注37]。

18世紀末から私商たちの活躍が活発になることによって、ソウルの商家の姿もだんだん変化していた。『雜巧、姓氏巧及族制巧・市塵巧』 [注35] に「六矣塵」は各所に代理店を設け、それを「在家」と称し、六矣塵専売品が「自家にある」ことを示し、紙を売る店ならば「紙塵在家」、絹布を売る店ならば「絹布塵在家」と看板を掲げていたと述べている。このように李朝時代には売っている商品名が看板に書かれるようになって、高麗時代の看板より積極的に商業意思を表したと思われる。また、鐘路十字街の六



図15 朝鮮時代末期の簡易飲食店

このような飲食店の顧客は主に旅人や行商である。

矣塵は四面が土の壁に囲まれ、街路に面している方に入りだけの門がある、その長廊を仕切って各店房になる。そこで何の商品をどこで売っているかを客は知ることが難しいことから、看板に直接商品名を書いて売っている商品を表わすだけではなく、客を招き入れる「列立軍」という「客引」を使って六矣塵独特な広告活動をしてきたと述べている。

図13は朝鮮時代末期の写真である。外から店の中の商品の大部分がみえ、店の中には店主と思われる人が座った姿勢で商売をしている。また煙草を吸っている姿は、当時ならではの商業風景と考えられる。

「仮家」は、臨時仮設物として、屋根の下に草で日除け程度をつくって、品を陳列するものである。これは王の行幸があると撤去し、その後また建てるものであった。この仮家は道路を占領したが、1896年道路を設備し建物の高度を9尺に制限された。

図14は柿と煙草の販売をしている一番小さい店である。右に煙草を切る



図16 埋式用の用具店

柱聯や文字看板や吊看板などが見られるが、吊り看板も屋根よりそれほど高くない。李朝時代末期の写真。

風景は朝鮮時代の風俗画の中にのよく描かれていたが、今日では一切に見受けられない。図15は朝鮮時代末期の簡易飲食店であるが、このような商業形式は現在の市場でもよく見かけられる。図16は朝鮮時代末期の写真で、葬式用の用具店である。商品を店の前まで陣列し、店舗の入口の柱や門の前に大きな文字が書かれており、また吊すものがみられる。図17は一般的な住宅を改良した「質屋」である。この店舗には、日本式の屋根看板、伝統的な韓国の建物標識である懸板、文字が書かれているのれん（垂れ）、柱にかけている柱聯形式の看板など多様な形式の看板が用いられている。のれん（垂れ）には漢字とハングルが一緒に用いられていて書く順は右から左へと書かれている。



図17 質屋の看板

この店の看板には四つ種類がある。まず一番伝統的な看板である屋根の下に掛けている懸板と、木の柱にはられている柱聯、漢字とハングルが一緒に書かれている垂れ、それから左上の屋根には、日本の屋根式看板が置かれている。

2-4. 総 結

第2章は韓国における看板の出現と伝統的な商業形態について、主に文献を元に考察した。

韓国において看板の出現は高麗時代であった。これらは国家的な次元で設置された商業建物を中心とした「文字看板」であることが明らかになった。これらの看板には漢字が用いられていて、今日の看板の機能、つまり、広告の役割をどれほど果たしていたかについて知ることは難しい。しかしながら、看板そのものが商業のための目じるしとなることが可能ならば、これらの漢字看板は旗や吊すものと同じく、一般庶民においては一つの目じるしとなっていたことは間違いない。

高麗の都城には数多くの寺院や城の門に一般的な建物標識として、「扁額」、「柱聯」などを用いて門の名前や建物の名前を漢字で書いたものが多く、建物のシンボルとして機能していた。これらの建物標識や看板に書かれていた文字の内容から、高麗の看板は広告のための機能より、むしろ当時の一般的な建物の標識と同じ機能と役割をしていたのではないかと考えられる。

このように長い歴史の間、常設商店での広告行為は非常に乏しかったとが、高麗時代や朝鮮時代の看板を大きく特徴づけるのは、看板に商品の絵などではなく、もっぱら文字が多用されていたことである。書かれている文字は漢字で、その内容は高麗時代の看板には商業とは直接関係のない、扱う商品とはまったく異なる内容で、当時の社会的思想や商業信条を看板に表わしたことが注目される。

朝鮮時代に入っての看板は、基本的には商業建物が高麗時代のものと同じ官設市場で長屋形式であることから、看板形態は高麗のと等しい。また、用いられている文字も主に漢字であって、朝鮮時代末期になってからようやくハングルが部分的に使われるようになった。

朝鮮時代の看板に書かれている文字の内容は高麗と異なり、一つの店は一つの商品のみ売ることで、主に扱っている商品名が記された。しかしながら、朝鮮時代末期から開港期になり、身分制度の撤廃や特定商人らの専売特権などが崩壊するなど、社会的な状況が大きく変わることによって、より積極的な商業活動が行われ、商店において看板は最も重要な広告手段となってきた。その他、文字看板とは別に「旗」や「吊るすもの」も用いられていたが、伝統的な「文字看板」については「商業懸板」と規定し、他のものと区別された。

第3章 絵画と写真資料にみられる朝鮮時代の商業と看板

韓国の絵画には商店や商業場面を素材として描かれているのは非常に少ない。しかも、その大部分が19世紀前半に描かれたもので、以下に示す絵画には商業場面が描かれている数少ない資料である。

＜絵画の目録＞

- ・「練光亭宴会図（部分）」金弘道、19世紀（図16参照）
- ・「酒幕風景図（部分）」19世紀（図17参照）
- ・「行旅風俗（部分）」18世紀後半（図18参照）
- ・「風俗屏風（部分）」金得信、19世紀（図19参照）
- ・「酒幕図」、金弘道、19世紀（図20参照）
- ・「行商」、金弘道、19世紀（図21参照）
- ・「負商」、金弘道（図22参照）
- ・「市場行く道」、金弘道、19世紀（図23参照）
- ・「大快図（部分）」、傳劉淑、19世紀（図24参照）
- ・「酒幕肆拳盃」、申潤福、19世紀（図25参照）
- ・「相撲」、金弘道、19世紀（図26参照）

このように看板に関する絵画資料が少ない原因と考えられる理由の一つに、韓国は長い間、両班（貴族）、中人、商人、賤民という身分構造が社会を支配してきたことが挙げられる。日本や中国と比較すればものをつくる行為やそれを売るという行為は非常に低級な仕事であると認識し、それが絵画の素材となったのは、19世紀に入ってからのことである。商売が行われている数少ない風俗画には朝鮮時代の商業内容の乏しさや商業行為の特徴が見られる。写真資料にみられる商業には開港後に撮られた写真が多いため多様な商店を見ることができる。

一方、写真機が韓国に始めて紹介されたのは1890年代以降のことである

が、欧米人らが韓国の風物を撮り始めたのはそれよりもっと前である。1871年、朝鮮と米国の戦争当時の関連写真が韓国関係写真では最初である。その後、写真技術は王室にも紹介され、王族や大臣らが撮られるようになった。1890年代後半からは韓国を訪れる外国人を相手に写真を販売する写真商まで出現するようになった〔注38〕。

以下に示す写真資料は朝鮮時代の生活習慣や風俗がそのまま写されていて、韓国の伝統的な商店や商業行為の特徴を見い出すことができる写真資料である。

＜写真資料の目録＞

- ・『Coreae Coreani』、Carlo Rossetti、ソウル学研究所、森と木、1996
- ・『写真から見る朝鮮時代・生活と風俗・続』、ソムンダン、1987
- ・『写真から見る近代韓国上・下』、ソムンダン、1986
- ・『民族の写真集 1.2』、ソムンダン、1994
- ・『朝鮮人の商業』、朝鮮総督府、調査資料第二十一、1925

3-1. 男性中心の社会

朝鮮時代の風俗画に描かれている顧客は主に男性である。このような絵画資料には、韓国の伝統的な社会の特性でもある女性の外出を禁じること、特に市場での買い物が全く女性には許されなかった当時の状況を断片的に見ることができる。

1902～1903年の間、韓国を訪問したイタリア外交官である、Carlo Rossettiは、当時の韓国の風俗について次のように記録している〔注39〕。

「世の中、どこの国でも韓国のように厳しく女性の生活を隔離させるところはない。ヤンバン（貴族）層であろうが、中類層の女性であろうが、家から出かけることはめったにない。やむを得ず外出する場合は必ずカマ（かご）を利用した。路で見かけられる数少ない女性らはすべて社会的に最

下層の人であって、また大部分は顔を隠している。

韓国を訪問する人々すべてが経験する面白い事実の一つは、若い少年らを女性と錯覚することである。街の群衆の間に女性はめったになく、それも路で見かける数少ない女性は体を隠している事実、また、顔と胸を出して通る女性は視線を引くほどの魅力がめったにない事実から、韓国の青年たちの女性らしい服装、肩の後ろに編み下ろしている髪の毛、優雅な顔などから訪問客は騙されるのである。」

当時の男性たちは、年齢と関係なく結婚の日までには髪を編んでいなければならなかった。結婚式を前にして特別な儀礼行い親戚や友たちが見守るところで髪の毛を頭の上に結ぶことによって、大人になったのである。

このような記録から女性がいかに社会性を持たなかったかだけではなく、女性が買い物することそのものが認められていない風習は、韓国の商業文化を特徴づける大きな要因となっていたと考える（図18参照）。

また、『韓国とその隣の国』〔注40〕は、地理学者である著者イサベラ・



図18 朝鮮時代末期の商店

この写真にみられる後ろ姿の髪の毛の長い人は女性ではなく、結婚していない青年である。商店の柱には紙の上に文字を書いたと思われるものがはられている。

ビショップが1894年から11カ月間4回にかけて訪問し、当時の韓国についての詳細な調査をした記録である。その記録の中でソウルの商店に関する状況や風景を次のように述べている。

「ソウルで一番大きい商店に行ってみた。その商店の隣には恐ろしくも、全ての韓国人は外国人の侵略に立ち合って死の覚悟をもって戦うべしとの内容が書かれた石碑〔注41〕が立てられていた（図19参照）。商店の商品は数少ないものであった。ソウルの大路の中、一つの大きい道の両面には車輪がついて動ける簡易売店がある。そこにはたまに韓国スタイルの黒金象眼細工品や銀を張った鉄象眼細工品が売られる。

このようなところやまた他の商店で取引されている韓国的重要商品22種類をあげると次のようである。

- 1) 白い綿製品の布
- 2) 薦の靴
- 3) 焼もの類
- 4) 外の風が遮断できるろうそくの燭台
- 5) 櫛
- 6) ガラスの玉
- 7) キセル
- 8) タバコ入れ
- 9) 痰つぼ
- 10) まるいプラスチック眼鏡
(近来高官らが愛用する)
- 11) 多様な種類の韓紙
- 12) 薦笠（竹やアシで粗く編んだ笠）
- 13) 木を削ってつくった枕
- 14) 刺繡でつくった枕

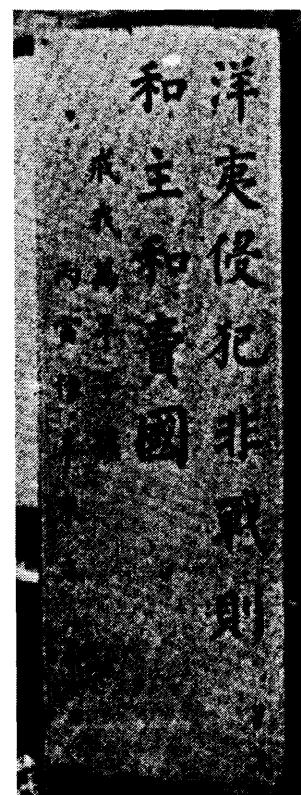


図19 斥和碑
高宗王が1871年に立てた斥和碑。挙国一致の團結を促すため、全国各地に斥和碑を立てた。

- 15) 扇子
- 16) インク瓶
- 17) 銀を張った革の覆う物が下についている大きな木材
- 18) 洗濯のための棒
- 19) 干柿
- 20) 赤紫、真紅、緑のおぞましい顔料で染めたあめ
- 21) 干したわかめ束
- 22) 干したきのこ束

その他にも平凡な真鍮の食器セットとや黒の漆を塗った木工製品に貝殻の伝統模様を作つて張つたものがしばしば売られていた。今は化粧台や新婦の箪笥の生産が中断されているが、外国人たちは英國公使官のある道をジャンロンの道（箪笥の道）（Cabinet Street）と称した。これらの箪笥はそれほど大きくないが本当に素敵である。このような製品は徹底に韓国的であるにも係らず極度に華麗である。しかし、朝早い時間を除いては買い物をする人はそれほどなかった。ショッピングが余暇の善用と思われないことと、極貧層を除いて女性たちが昼間に出かけないという韓国の風習にも部分的な原因があると思われる。」と朝鮮時代末期のソウルの商店についての印象を述べていて、当時の常設商店で主に売られている商品や商業環境について部分的に知ることができる。

図19のような碑は国家的な広告で、一般の庶民に漢字が読めるがどうか考えず、当時の政府は一般庶民のレベルに合わせなかつたことと考えられる

3-2. 酒店と旅宿

韓国の風俗画には商店や市場が描かれているものは究めて少ない。数少ない商店の大部分は酒幕である。その最も古い形式は朝鮮時代中期、16世紀の山水画にみられる（図20,21参照）。川辺にある商店と思われる店には旗を設け、遠くからもよく見つけるように高く掲げている。これらは最も古い形式の商業のための目じるしであり、広い意味での看板である。

19世紀の風俗画にみられる限りでは、店主は客のために何らの配慮も無く、究めて簡単な飲食が提供できるような場所を設けている。また、店主は座って商売を行い、客は立ったまま酒を飲む風景が描写されているにすぎない。

酒幕の絵の中には子連れの女店主がよく描かれている。この時代は女性が社会活動をすることができない時代であって、しかも、酒屋をすること



図20 16世紀 「山水画（部分）」作者未詳

このような目じるしは朝鮮時代末期まで使われたが伝統的な商業標識で、一般的に使われたことではなく、川辺や海辺にある店に主に用いられていたと考えられる。



図21 「岳陽樓図（部分）」15世紀前半



図22 朝鮮時代末期の居酒屋

店の屋根の下に掛けているものは飲食店、特に麺類を売っていることを示す目じるしである。

は一般的に考えられない時代であった。従って、このような幼子づれの女店主による商売は、韓国ならではの社会的な慣習が伺える風景であるといえよう（図26,27,28参照）。

3-3. 看板のない店舗

韓国の絵画に看板が描かれているのは認められない。しかし、山水画や風俗画の中には旗や吊すものものはそれほど多くはないが、容易に見つけることができる（図20, 21, 22, 25参照）。このような目じるしは高麗時代から朝鮮時代末期まで一般的な庶民生活の中で用いられてきた。また、朝鮮時代後期の写真資料である図22には、麺類を売っているという目じるしを掛けているが、このようなものは日本や中国にも古くから用いられてきた目じるしでもある。町の中の商店と考えられる図23, 24, 26, 27, 28などに看板らしいものは一切見つけることはできない。

文献資料や絵画写真などを通してみても、これまでの韓国の伝統的な社会の看板広告は非常に乏しかったと思われる。その要因の一つは、当時の都市におけるコミュニティは人々の生活の慣習や学習によって行動範囲の情報はすでに身に付いていると考えられる。また、一つの町に同じ商品を売っている常設店舗が何軒もあったとは考えられない時代であり、また知らない町を訪問する旅人や行商などにとってもその町の地形を通して、またこれまでの慣習によって酒店や旅宿を見つけることはそれほど難しいことではなかったと考えられる。従って、近代化以前の一般的な都市にとっては看板を必要とする要因が非常に微弱だったということになろう。



図23 「練光亭宴會図（部分）」金弘道、19世紀初期
一番小さい店として座った姿勢で販売をしている。
顧客の服装から両班（貴族）であることがわかる。



図24 「練光亭宴會図（部分）」金弘道、19世紀初期
扉が設置されているところに店が数軒あるがいずれも女性と看板はない。

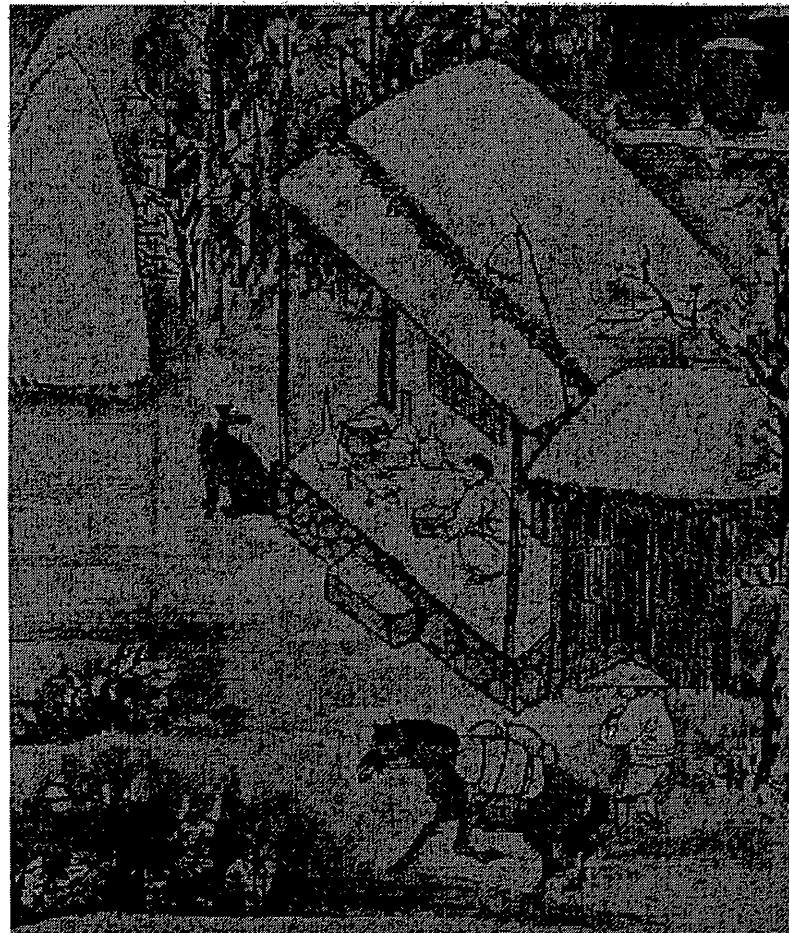


図25 「酒幕風景図（部分）」19世紀

絵の細長い木に布と思われるものを掛け、遠くからもよく見かけるように工夫されている、最も古い形式の商業標識で、広い意味で看板の機能を果たしてきたものである。



図26 「行旅風俗（部分）」19世紀

客は商店の外で、簡単な食事をもらい、子連れの女店主は建物の中で座ったまま商売をしている。店には看板はない。
(原典の絵が不鮮明なため筆者がリライトした。)

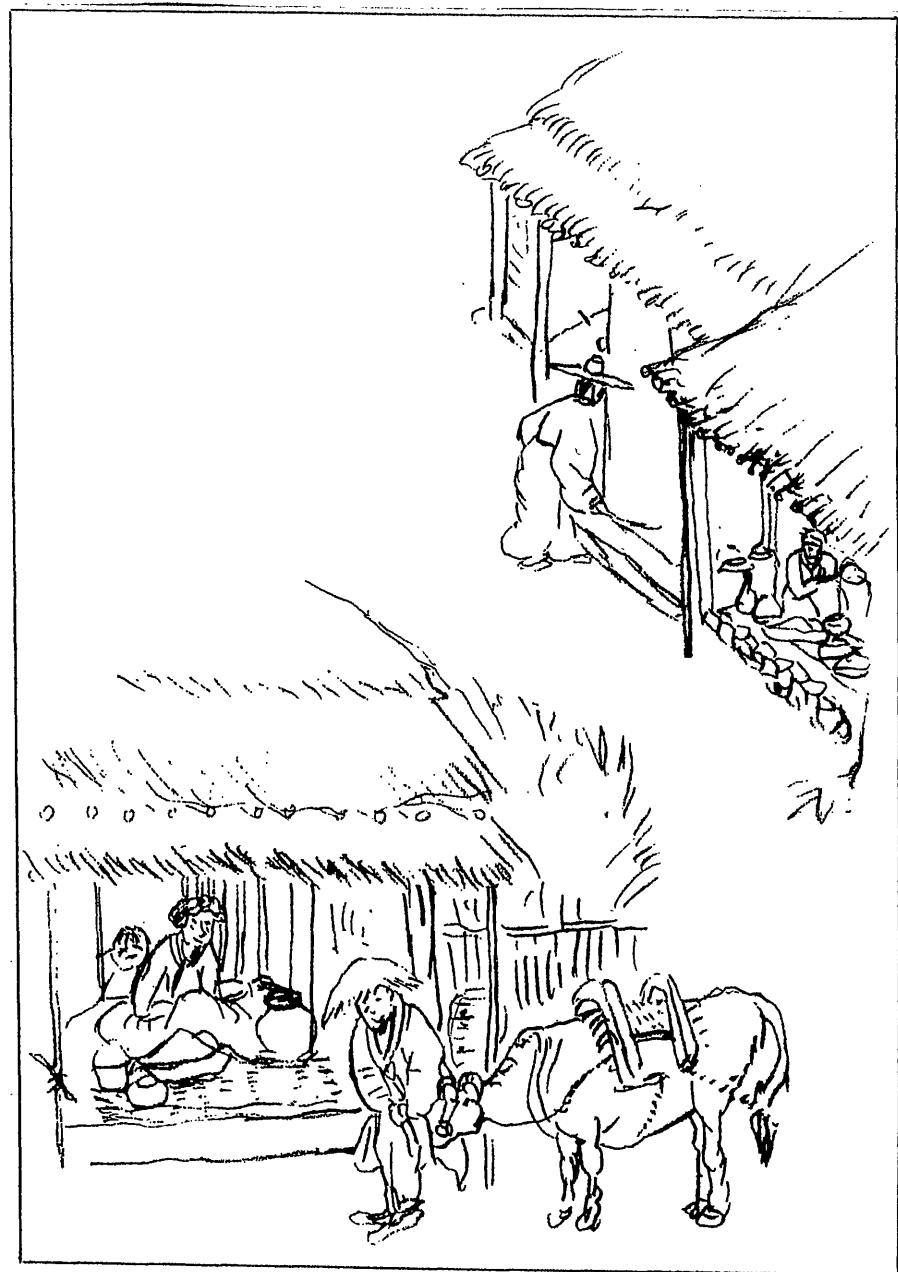


図27 「風俗屏風（部分）」金得信、19世紀

店頭には品物が並べられているが看板はない。いずれも子連れの女店主は座った姿勢で商売をしている。

（原典の絵が不鮮明なため筆者がリライトした。）

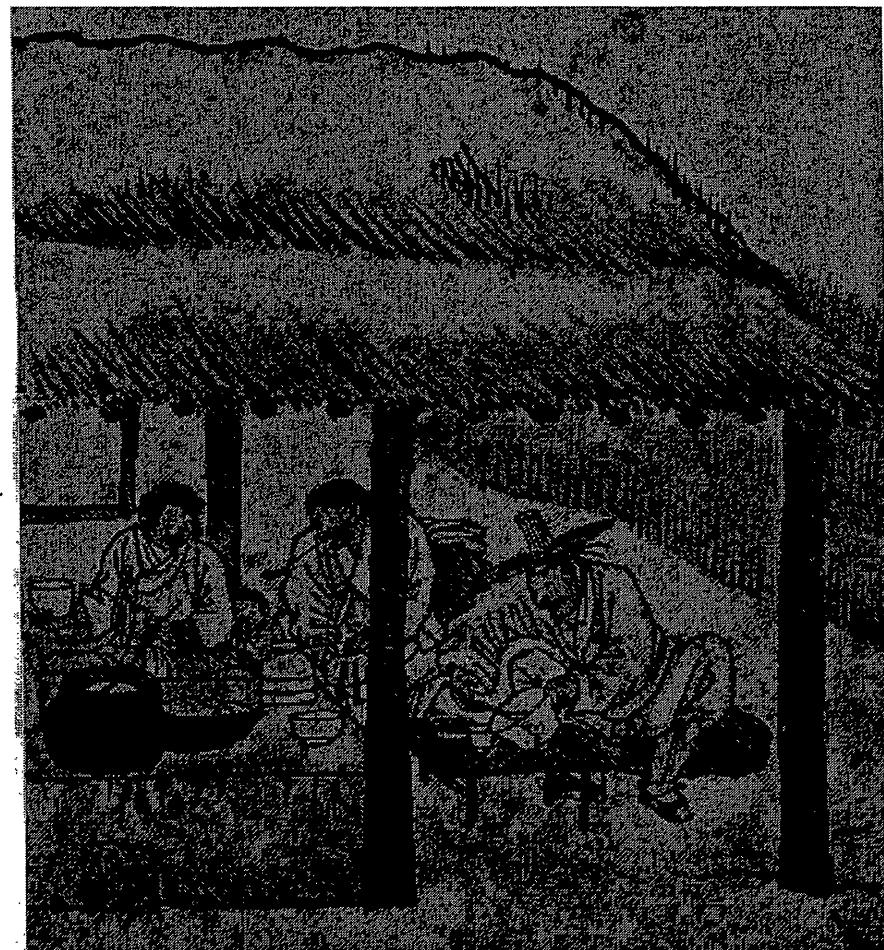


図28 「酒幕図」、金弘道、19世紀初期

この店も看板は見当たらない。子連れの女店主が座った姿勢で商売をしている。このに描かれている店主はいずれにしても子連れの女店主であるが、商業行為を行っている動作が描かれて、もっと客との距離が近く描かれている。



図29 「大快図（部分）」、傳劉淑、19世紀

この画は戸外で商売をしている場面が描かれている。お酒と思われるものを売っている人は男性である。この絵は戸外で相撲をやっているところに、大勢の人が描かれているが女性は一人もいない。



図30 「酒幕肆拳盃」申潤福、19世紀

この居酒屋の顧客は服装からみると主に上流階層の人とであるが、店主は座った姿勢で商売をしていて、客は全部立っている風景が描かれている。

3-4. 伝統的な建物標識と看板

3-4.1. 扁額と懸板

韓国における一般的な建物標識は、長い歴史の間培われた生活文化として、設置される場所によってそれぞれ異なる名を持っており、今日に至るまで伝統的な建物に多く使われている。

「扁額」の意味は絵、或いは文字を書いて部屋の中や門の上に掛けておく板〔注42〕である。その建物の名前や周囲の風景や道徳的な言葉などを板に書いて彫り、屋根の下や広い板の間の壁に掛けるものである。宮殿や亭子、寺院などの扁額は四角の枠で構成して、色彩や装飾を加えて贅沢につくった。扁額に書かれた「堂号」〔注43〕はさまざまな言葉で表わされているが、その大きな特徴は道徳や風水と関わるもの、邪鬼をはらう意味を持つ言葉が書かれていることである（図31, 32参照）。また、このような国家次元の建物標識には、それを書いた人の名や印まで描かれている場合がある。その目的は誰が書いたかによってその建物の格が左右されるからである。

「懸板」の辞書的な意味は「文字や絵を彫って掛ける木の板」である（図32参照）。一般的な形態は扁額と同じである。扁額の「額」の辞書的な意味は「門の上や部屋の中に掛けておく懸板」〔注44〕を意味する。この



図31 朝鮮時代の鋳字所の懸板

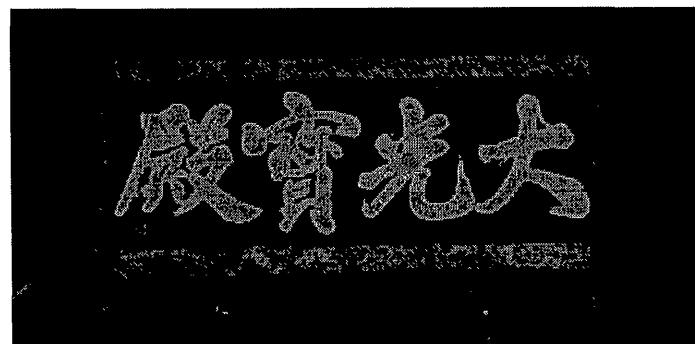


図32 韓国の公川の麻谷寺の懸板

新羅時代の金生(711-791)という人が書いたものとして、現存する懸板の中で一番古いものである。

ように「扁額」と「懸板」という2語の意味区分は明確ではない。それらが掛けられる位置や機能、用途においても、ほぼ同様の意味で使われてきたのである（図28参照）。

一般住宅における懸板の場合、自分の家の来歴を彫って記録したのもあってその用途は他の建物標識よりも広く使われていたと思われる。

3-4.2. 柱聯

「柱聯」の辞書的な意味は「木の板の上に対句や詩を書いて建物の柱や壁に張るもの」である〔注45〕。柱聯に書かれていた詩や教訓などを通して、そこに住む主人の風流が見られる。大部分の柱聯は白の板に墨か藍色で書かれ、彩度の対比が大きいことで目に付きやすく、伝統的な建築物において柱はその建物の歴史と共に存在するように、柱聯は建物のシンボルとされ、また建物の代表的な飾りでもある。柱聯形式の看板は長屋のような柱が多い商店に多く使われていたと推定される。

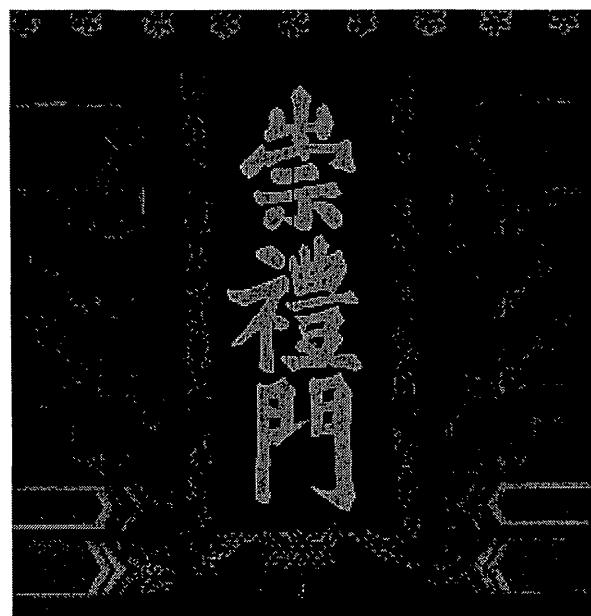


図33 ソウルの南大门に掛けられている懸板

表3 伝統的な建物標識の比較表

	素 材	形 態	設置場所	内 容
扁額	木材	□ □	主に建物の外部の門の上	文字（漢字）
懸額	木材	□ □	主に建物の外部の門の上	文字（漢字）
懸板	木材	□ □	建物外部及び内部の門の上	文字（漢字）
柱聯	木材 紙	□	主に建物外部の柱	文字（漢字）

3-5. 看板を意味する用語の変遷

日本語の「看板」の辞書的意味は、「商家で屋号、職業、売品などを人目につくように記してかかげたもの、あるいは劇場などで、俳優名を記し、または演芸の題目・場面などを画にして描いてかかげたもの」である【注46】。そして今日、韓国で使われている「看板」という言葉は、日本の辞書に記されている意味と全く同じ意味で使われている。しかし、本来韓国で商業のための建物の標識は看板という言葉ではなく、次のような多様な言葉で表わしていた。

「榜木」：『高麗図經』の記録には「王城本無坊市 推自廣化門至府及館 皆爲長廊間 榜木坊門 曰永通、曰廣德、曰興善、曰通商、曰存信、曰資養、曰孝義、曰行遜...」とし、「榜木」と言う文字は看板と言う意味で使われていた。『漢韓大字典』【注47】によれば、この辞書的意味は文字を書いて標識とする木牌であり、また榜額や扁額と同じ意味に用いるとしている。

「額」：李朝時代の『朝鮮王朝実録』（図32参照）の世宗11年12月初3日乙条による当時、看板の必要性について、通信使（図33参照）として日本を訪問した朴瑞生が書いた報告書で、日本の商店の看板や商品の陣列の在り方について述べたうえで、行廊に補軒を張り出してその下に品物を陳列して置く層楼をつくることと、店舗に「額」を掛けて分かり易くするべきであることを建議した。この記述から、現在韓国と日本で使われている「看板」という用語の意味は李朝においては「額」（懸額）と言う言葉で表わしていたことが伺われる。

「懸板」：『朝鮮人の商業』によれば、（朝鮮総督府、調査資料第二十一、1925）日本語での「看板」は韓国語の「懸板」に当たるとしている。（参考資料参照）このような文献に基づけば、日本語の「看板」に相当するものは、開港（1876年）以前の韓国においては「榜木」、「額」および「懸板」

世宗 卷四十六 十一年己酉十二月

図34 『朝鮮王朝実録』、世宗11年12月

という言葉が用いられていたと判断できる。

李朝時代後期に入つてからは私商たちの繁栄によって、新たな商品の出現や同じ商品を売る店が増えて行くにつれ、看板廣告は非常に重要とされ、商人らの間では競争のためにも看板への要求はますます増大していったと考えられる。しかし、今日「看板」と呼ばれている標識は李朝時代末期までには、統一された言葉でよばれなかつたことが本研究で明らかになった。そこでこれらの言葉が持つ関連性から、一般的な建物標識が持つ機能と異なる、商業のための役割をしてきた伝統的な看板を「商業懸板」と定義した（表3参照）。

この他、広い意味での看板の役割をしてきた「旗」(図30) や「吊るすもの」(図31) などは看板とは形状が異なるが、「商業懸板」と同様の機能を果たしていた。李朝時代後期の実学者は「商家は瓦の屋根を張り、衛生的であるべきだし、青の旗を掛けて表示とするべきである」[注48] という主張をしており、そのことから商店において「旗」や「吊るすもの」の役割は非常に大きいものであったと考えられる。その例ととして六矣塵を中心にして占屋、酒幕(酒店)などの旗が挙げられる。

六矣塵の旗の中に今日残っているものとしては布の店である「苧布塵」の旗がある。書かれた内容は商品名であるが、その形からして戦争などの時使われた旗章から応用されたのではないかと思われる。また、形態や色などは多様であるが、これらは古くから使われてきた広い意味での看板で

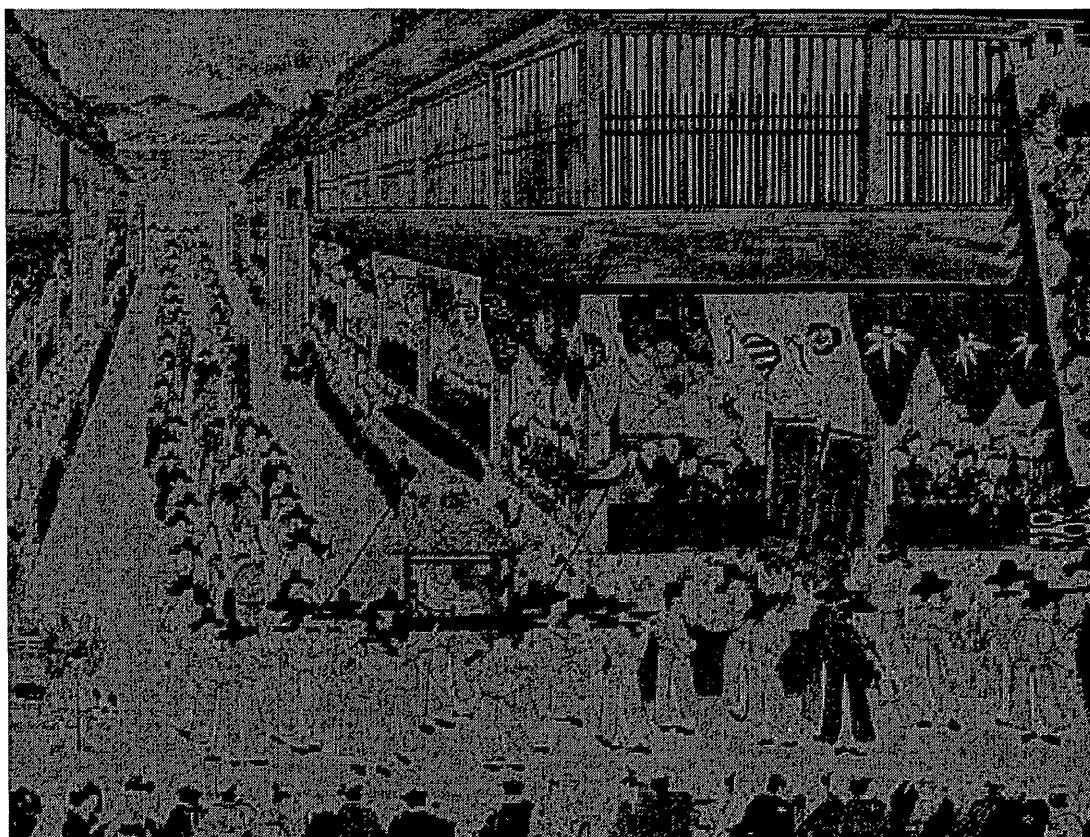


図35 江戸に入る朝鮮通信史、16世紀中半
のれんが垂れている商店は韓国の商業建築物と非常に異なっている。



図36 布を売る店である「苧布塵」の旗
長さ382 cm、文字の大きさ24 cm × 23 cm

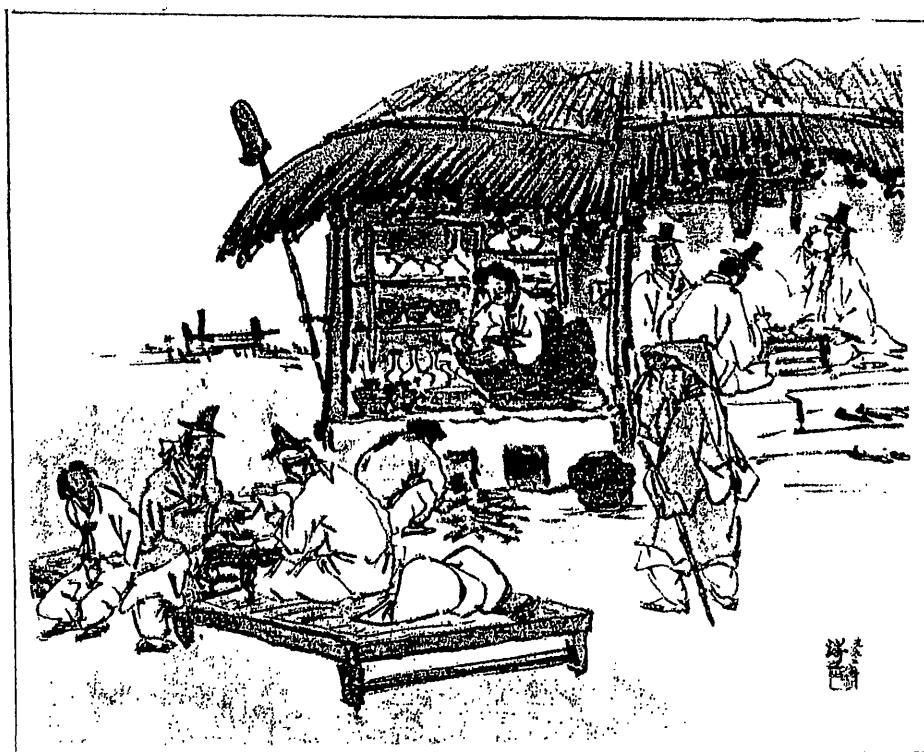


図37 ヨンスという酒幕の目じるし

ある。占屋の門の前には今でも竹を高く立て、布や紙などを掛けておく習慣が残っている。酒幕に関する商業標識は遠くからでも、旅人やお客様がよく見つけられるように細長い木の上に布の酒旗を掛けた。

これらの酒旗に関する記録としてキンジュヨンの小説『客主』〔注49〕があり、そこには酒幕の風景について次のように記されている。

「ヨンス（酒などを漉すのに使う器具、萩又は竹を割った小切れで編んだ、目が細かく底の深い筒のようなざる）を被せた酒旗がはためいて……」このような風景はおそらく図37にみられるものと同一であろう。

また「看品」、「看色」、「標末」、「標木」などの朝鮮時代の商業用語は、日本語の「見本」に当たる言葉であるが〔注50〕、それらも広い意味では看板の役割を果たしていたといえる。

ところで、『朝鮮語辞典』、（1920年、朝鮮総督府、国書刊行会出版）には看板という言葉はなかった。しかしながら、当時の韓国の大都市には多

くの看板が写っている写真資料などがある。要するに、「看板」は言葉より先に商業文化の一種として先に移入されたものであって、それを使い、生活の中である程度時間が経った後に、「看板」と言う言葉が韓国人の生活の中で定着するようになったと推察できるのである。

以上のことから、今日韓国で使っている「看板」という文字は植民地化されてから使い始められた言葉であることが明かになった。

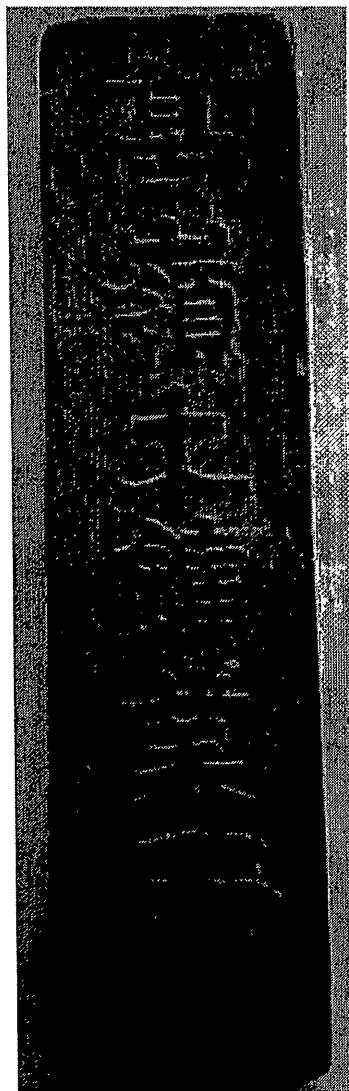


図38 柱聯形式の看板、朝鮮時末期
木材34cm×8cm

3-6. 総 結

第3章では、高麗時代から李朝時代後期までの伝統的な看板について、絵画と写真資料を中心に分析した結果と、看板という言葉の変遷について述べた。第2章に述べているように韓国の伝統的な看板は、国家的次元での商業建築物に設置されており、古くから文字（漢字）が用いられてきた。しかし、これらは主に貴族社会を中心に形成されたものであって、一般的に普及されることは非常に難しいものであった。

一方、朝鮮時代の絵画や朝鮮時代の末期の写真資料には酒旗や吊すものなどの目じるしが多くみられる。それらの大部分は文字が記されていないが、その造形物の色彩や形象を通して、一般庶民の生活の中で古くから看板の機能果たしてきた。

これらの絵画や写真資料は朝鮮時代の韓国人の商業慣習、社会的な状況を反映しているものであって、「文字看板」そのものが描かれているのはまったく認められない。つまり、韓国の絵伝統的な社会における広告活動は、国家的次元での「文字看板」と一般的な商店の「目じるし」が長い間両立してきたと考えられる。したがって、商業において文字看板を使用することはごく限られた地域によるものであったが、19世紀後半からようやく近代的な表現活動が可能な社会に至ったといえよう。

第4章 韓国の近代化と植民地時代の看板

韓国の近代期は激動の時代とも表され、当時の看板にその時代の社会的状況を見る事ができる。その特徴は看板の形態、置き場所、文字の多様性などに示されているが、最も特徴とされるのは看板に用いられている文字である。これまで漢字で記してきた「商業懸板」^{【注51】}と非常にことなる形式で、看板に使われた文字は漢字、ハングル、ひらがな、カタカナ、英語混じりの様々な文字が書かれるようになった（図39参照）。

韓国においての近代期は新たな衝撃とその受容による変化に向かわざるを得なくなつた。

本章は1) 韓国の近代期の看板の定着過程を明らかにし、2) その看板



図39 1920年代のソウルの南大門通り

このような西洋式や日本式の2階建の商店の大部分は日本人の商店である。これらの店には各々ことなる看板が設置されるなど、電柱や街路灯にも広告文が掛けられるようになり、街の外見は大きく変わりつつあった。

のデザイン要素のなかで最も重要視された文字が持つ社会的な意味など、当時の看板の特徴について明らかにすることである。

4-1. 近代期の社会的状況と都市の一般的特性

近代期において韓国、日本、中国が西洋の文物に対してどのような姿勢に対応したかを比較してみる必要がある。この三つの国における開化の様態は、西欧文物の移入という点では類似しているが、これに対しての対応の方法はまったく異なる様相を示している。これら3国は同じ東アジアの文明圏の中に属していて、同じく西欧列強の資本主義的影響を受けざるを得なかった。しかし、韓国の歴史は日本や中国の19、20世紀の歴史とは異なる。その違いは次のように説明できる。

日本や中国は直接的に西欧の文物を吸収することができた。その反面、韓国の場合には新文明の大部分を日本や中国を通して紹介されたことである。結果として、韓国に入ってきた新文物は、主に日本での変容過程を経たものとして生活の中に入り込むようになった〔注52〕。

日本によって植民地化される1910年から約30年間は、既存の都市形態が崩壊され、新しい形態での社会が編成される時期であった。この新しい編成過程で多くの都市が新たに生じ、一部の伝統的な都市はその機能を喪失していった。このような結果、二種類の都市群が形成されるようになった。その一つが開港場所在地の日本居留民たちが中心となって、通商貿易が活発に展開された新都市である。もう一つは地方行政の中心地として1000余年の伝統を受けついでいる都市であった。〔注53〕

この時期は韓国は民族的、社会的伝統性が維持できる基盤が急速に失われる時期であった。

開港と合併の前後、日本は漁業根拠地を設定し、鉄道を敷設して行政区域を改編した。その結果、朝鮮半島の地域機能は大きく変化していった。

鉄道敷設とともにあって、短い期間に大都市と発展した新興都市は、清律、木浦、鎮南浦、城律、雄基、及新義州が挙げられる。この都市における開港当時の人口は3000人内外であったが、日本からの解放当時には府（市）にまで発展した。これらの都市は海岸都市という同一条件であって、鉄道が新設されることによって交通の要衝地として発展した。

また、大都市と新都市を中心として建てられた多くの建物は、日本を通して入った西洋式か、あるいは日本式のものがほとんどで、例えば、西洋建築の経過についてユンイルジュは次のように四つに分類している。

1. 外国公館類の建築
2. 宣教師を通して入ってきた西洋人の宗教建築と公共建物
3. 外国人の商業建築物と住宅
4. 日本の官衙建築物と公共建物 [注54]

上記1～4の建物は図39のような風景と考えられる。西洋式や日本式の2階建の商店には各々異なる看板が設置されており、新たな景観を形成するようになった。

特に植民統治期である合併後から解放までは、韓民族の文化的正統性や独自性を維持できる基盤が失われる時期であった。この時期の韓国の都市は日本の隸属化政策によって他律的統制社会を形成していた [注55]。

日本統治が始まってから、鉄道の設置と共に開発された都市の類型は幾つかの形態に分けられる。

- 1) 日本人によって完全に新に建設された都市
- 2) 都市内に相当の規模の日本人居住地が形成された都市。代表的釜山は日本人の市街地が都市の中心部を形成するようになった都市である。
- 3) 日本の影響で中央道路が拡張されこの道路に沿って商店や住居地が立ち並ぶようになるなった都市 [注56]。

こうした都市では様々な形態の看板がこれまでの景観を大きく変え、新

たな近代文化の一つである「看板文化」が形成されたと思われる。このような都市が形成されるのにいたった原因の一つとなったのは日本人の大量移住である。昭和12年末の人口及び世帯統計数をみると、韓国国内における韓国人の世帯は4,058,867で、日本人の世帯は158,350、その他の外国人は9,900であった。なお、韓国的人口総数は22,355,485名、日本人の人口総数は71,252,800名であった。代表的な都市であるソウルの総人口は706,396で韓国人は572,774、日本人は131,128でその他が2,494であった。これらの統計から容易に推測できるのは、都市において日本人の生活文化の影響が非常に大きくなつたことである。

こうした日本統治期において、日本人の商業の進出は本格的になり、明治44年（1911）末に韓国に本店を有する会社は152社に至った。その中、商業のための会社は66社であった。さらに、昭和12年（1937）に韓国に本店を有する会社の総数は3、217社となり、その中、商業は992社であつて〔注57〕、その増加率は目覚ましものであった。

これらの日本の会社はそれぞれ従来の韓国式の建物とは異なる建築物を建設し、それぞれ建物標識を付設するようになった。

日本の政府による韓国の伝統的建物についての価値観を変える行為も次々起つた。一つ代表的事例を挙げてみると、これまで宮殿であった「昌慶宮」を「昌慶苑」と改称し、大きな看板を掛け、動物園として一般の市民らに開場したことである〔注58〕。さらに、植民政策は、韓国人のそれまでの倫理や生活習慣、伝統様式などを大きく変えてしまった。それは韓国人にとっては衝撃な出来事であり、受容せざるおえない時代の流れであった。



図40 「昌慶宮」、1908年

1908年、かつての宮殿であった「昌慶宮」を「昌慶苑」と改称し、動物園として一般に公開した。「夜間開場」と書かれている看板文字は儒教精神を表わす「弘化門」と書かれている扁額の文字の持つ意味と対照的である。これは建物にどのような標識が掛かれるかによって、その建物の機能まで完全に変わってしまう代表的な例であり、既存の韓国人の価値観が大きく揺らせる出来事であった。

4-2. 大都市を中心とした看板の特徴

植民地時代の全国の重要都市を中心とした写真資料をみると、建物に設置されている看板の多くは日本式の看板であった。韓国の伝統的な商店の場合でも、日本式の看板がより積極的に設置されていた。

この時期は、これまで商業活動の大きな障害となっていた身分制度の撤廃や建築の制限などが事実上廃止されたことから、1900年前後に平安道を始め、大型の伝統的な韓国式の建物が商店として建てられ始めた。これらの建物は外形上は伝統的様式を守ったが、壁面に使用する材料に煉瓦や石灰を使った〔注59〕。瓦屋根の商店にしろ藁屋根の商店にしろ、日本式の

屋根看板が掛けられるなど、従来の韓国における建物とその標識の関係は軽視された。また、既存の韓国の伝統的な商店や改良された住宅にも屋根看板が目立つようになった。

街の大通りをはじめ、商店と言えるものには多くの看板が使われていたが、当時の実物の看板はほとんど残されていない。その数少ないもののうち、ソウル市立博物館の準備委員会委員である、ジョンソンモ氏所蔵の看板（図41参照）からは、当時の外国商品が国内の商人に大きな衝撃を与えていたことを読み取ることができる。つまり、看板の広告文には「最も安く一番よい我が布」とハングルで書かれていて、国産物の愛用を強調す

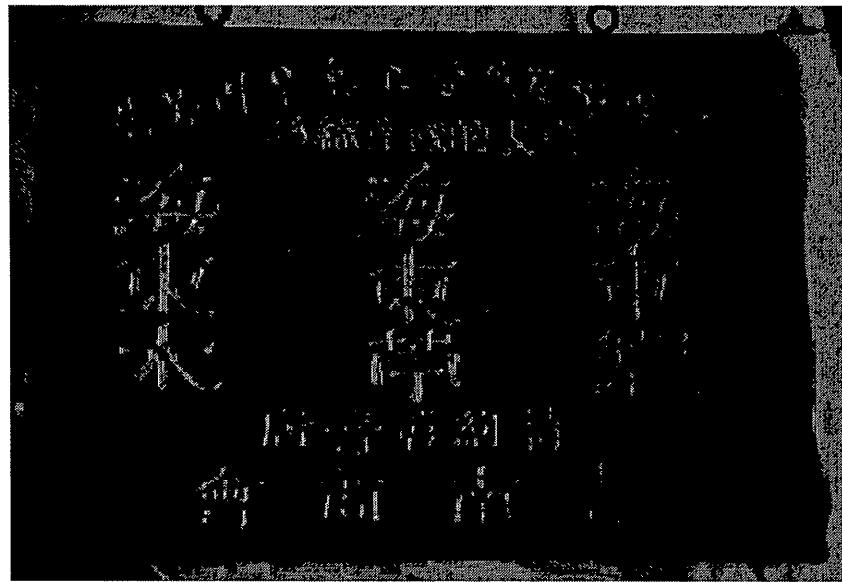


図41 1910～1920年代に使われたと思われる看板

この看板は主に漢字で商品名や商号を表わし、ハングルは漢字商品名の読みと宣伝文に用いられている。ハングルで記されている広告文の内容は「最も安く一番よい我が布」と書かれている。このような宣伝文からは国内生産の品と輸入品との競争が読み取れる。またこのような看板形式は伝統的な建物に書かれていたとは考えられず、近代的建物に掛けられていた看板だと規定できよう。

る積極的な広告活動が行われていたことである。また、漢字が読めない顧客のために漢字の読み方としてハングルを加えるなど、これまで貴族中心の顧客層から一般市民へ広告の対象を広げていたことが理解できるのである。

4-2.1. 植民地政策による日本語の教育とハングル

これまでの韓国の教育は貴族（両班、ヤンバン）階層だけの独占物であって、大部分の庶民は教育とは関係のない生活をしていた。開化という激動期を迎える一気に国は揺れ始めた。そのうち教育に対する新しい認識と、その重要性の自覚は国民的に教育熱を高めていく時代でもあった。しかし、韓日合併と共に始まった、韓日同化を目標とし、植民地教育が実施された植民地末期は皇国臣民化教育などは、韓国人の自律的な教育の発展や韓国の伝統性の継承が大きく失われる時代でもあった。

この時期の韓国に対する日本の植民地教育とハングルの弾圧について簡単に述べると次のようにまとめられる。

1910年11月 韓国人の著作の学校の教科書の押収

1911 培花学堂、学生の伝統的服装の着用禁止

1937年 3月 総督府による日本語徹底使用強化各官署に発送

1937年 9月 神社参拝拒否で38年まで18個の学校が廃校

10月 総督府による皇国臣民誓詞制定、全国民に強要

1938年 1月 総督府、韓国人に日本語普及運動開始

1939年11月 創氏改名公布（韓国名を日本名に改めること）

1941年 3月 国民学校規定公布（朝鮮語学習廃止）

1943年10月 学兵制実施

上記のような日本の植民地教育は、日常の生活の中にも深く関わり、学生の間で交される韓国語も制限・監視され、韓国語の使用は厳しく弾圧さ

れた [注60]。

4-2-2. ハングルがもつ社会的意味

前述したように、植民地政策・教育は韓国人にとってこれまでの生活習慣や行動、思想など様々な部分に大きな制限を及ぼす結果となった。その抵抗の一貫として、ハングルの教育を通して独立を図ろうとする様々な運動が韓国の国民の間で起きた（図42参照）。このような教育の中、ハングルは民族の精神的シンボルとして、また大衆とのコミュニケーションの手段として急速に展開されていった。

1883年10月31日創刊された韓国の最初の新聞である「漢城旬報」は

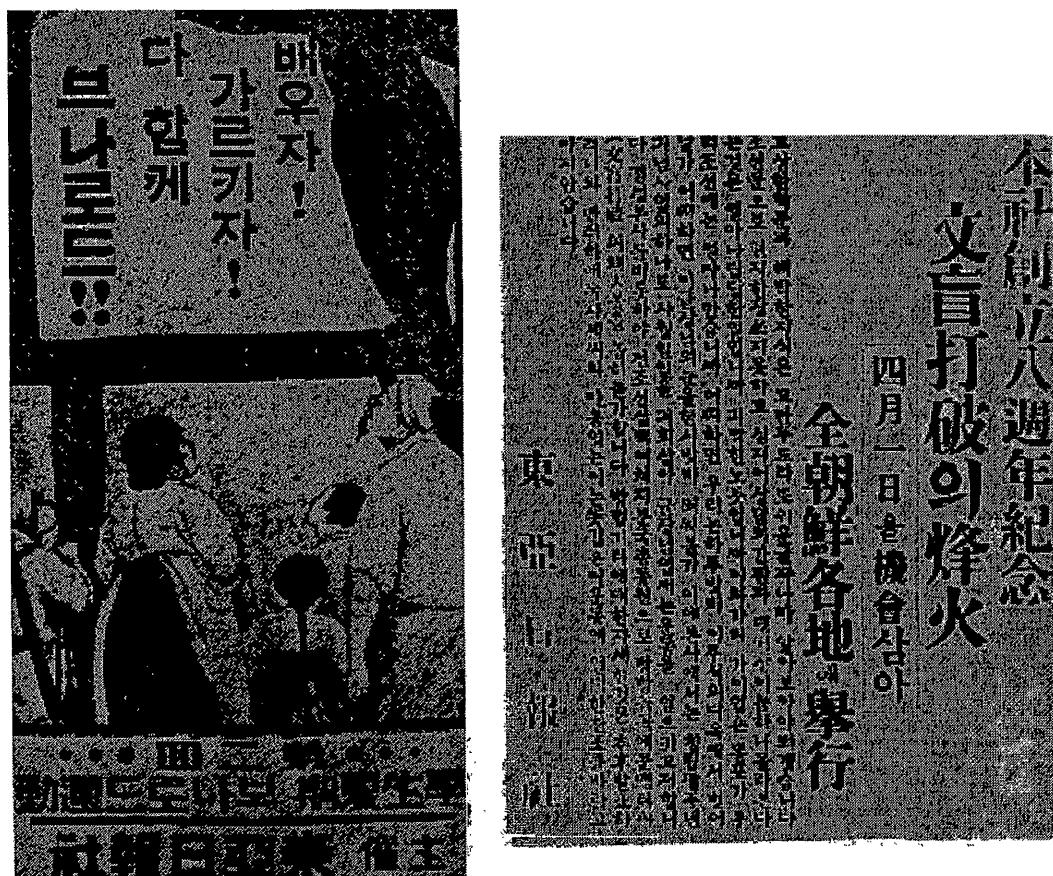


図42 文盲退治のための新聞広告、東亞日報、1928年

100%漢字であったが、1896年4月7日の「独立新聞」は100%のハングルの民間新聞であった。この新聞が創刊されてから各種の新聞や雑誌が多く出版された。しかし、このような出版物を媒体として独立を図ろうとした機関は、総督府によって文章の削除や停刊、廃止されるなど、言論の弾圧が非常に厳しく行われた〔注61〕。

「独立のための意識改革運動」における文盲退治は非常に重要な社会的課題であった。1928年の東亜日報では創刊8周年記念の一環として「停留所や看板文字ぐらいは読めなくてはならない」という文句を新聞広告に出し、一般の大衆に文字を知ることの重要性に呼びかけた。(図42参照)これらの文盲退治運動は表面的には生活の便利依拠していると思われるが、その究極的目的は「韓国の自主独立のための国民運動」のためでもあった。

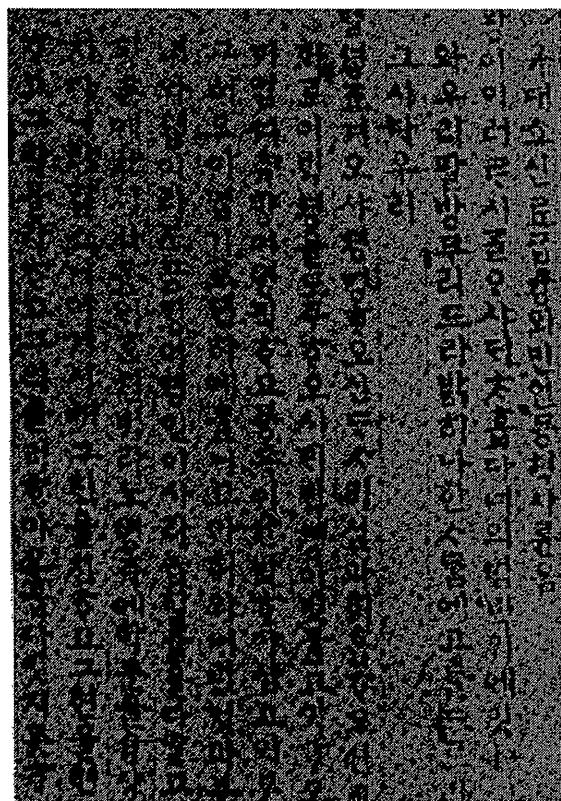


図43 高宗王がキリスト教を排斥するハングルの論音

しかし、植民地政策は韓国語の使用をますます制限し、1922年2月には「教育令」改訂によって韓国語の授業を激減させ、1938年には「朝鮮教育令」を改訂し、中学校の韓国語を必修から選択科目と変え、1940年には韓国語の授業を全面廃止する〔注62〕など、ますます厳しくなるばかりであった。

このような時代に、韓国人に最も優先して要求されたのは韓国人のアイデンティティ確立に最も重要な要素となる言語と文字（ハングル）を守り、知り、使い、それを通して意識改革が行われ、韓国の「自主独立運動」を図ることであった。

1895年、初めて官報に漢字と共にハングルが使われた。このことはその後、韓国の社会的な状況を大きく変えていく出発点であったと思われる。ハングルは庶民の間ではそれより遙かに早く使われたが、このように政府の官報がハングルを使い始めたのは、韓国の歴史の大きな転換点とも言え、それは民族中心主義及び韓国が日本や中国やとは異なる独自の文化を主張する姿勢の一つの象徴であった。

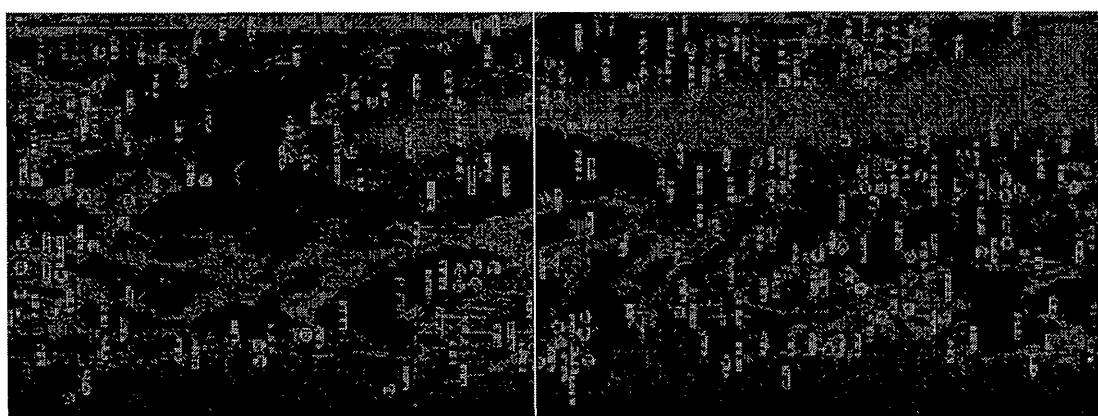


図44 昭和12年、朝鮮総督部鉄道局が製作した朝鮮の観光案内図

この地図は日本人向きに制作された観光用の地図である。この地図に示されている様々な情報は漢字で書かれており、韓国の多くの情報が書き込まれて一目で分かることだけではなく、植民地である韓国を観光地とした、広告活動の一面が分かる地図であると考えられる。

それまでの政府と国民との間に行われたコミュニケーションの手段はほとんど漢字であって、例えば図19に見られるようなものであったが、時代の流れは、ハングル使用の必要性をますます要求してきた。政府の権力者と数多くの一般庶民との間に最も早く、通じる言葉はハングルであって、その一例に、当時のキリスト教を排斥するための高宗王の綸音が挙げられる（図43参照）。ハングルの使用の必要性は、韓国の政府だけではなく、皮肉なことに日本政府にも多くあった。図45に見られるように、漢字と共にハングルが用いられ、漢字の知らない一般庶民を対象にハングルとカタカナでその読みを書いていたからである。

このような社会的な状況を最もよく反映していたものの一つは大衆文化である看板であったと考えられる。

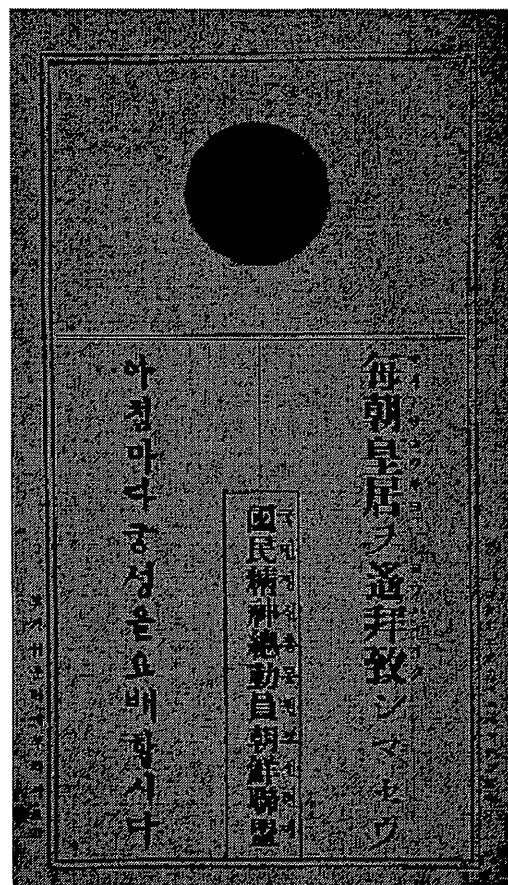


図45 皇臣民化政策の一貫として毎朝日本の天皇の宮城を向け遙拝を強要した。
1940年代（左の小さい文字にはハングルで、見やすい壁に貼って置くようにと書かれている。）

4-3.写真にみられる植民地時代の看板の特徴

韓国の開港期（1876年～1910年）と日本による植民地時代（1910年～1945年）の看板は、今日の看板文化の形成期として看板に用いられる文字を始め、形態、素材、置き場所など近代前とは非常に異なる特徴をもち、商店における重要な広告手段として発達した。開港に始まった近代期はこれまでの商業を蔑視する認識が徐々になくなる時期でもあって、商業が非常に繁栄し、看板は最も重要な広告手段の一つとなったのである。

本項では、近代韓国の看板の定着過程と看板のデザイン要素として最も重要視されてきた文字に関してその特徴となるものを考察した。具体的には、主に当時の商店街の看板がみられる写真資料を元に観察・分析を行い、社会的背景などについては既存の出版物と論文を参考にし、また、幾つかの実物看板を根拠に分析を行った。

分析の対象とした写真資料は、日本の国書刊行会の協力によってソムンダンから発行された写真集である。『写真から見る朝鮮時代・生活と風俗・続』、『写真から見る近代韓国上・下』、『民族の写真集 1・2』〔注63〕全5冊の写真のうち、商業看板が写っている写真262点を中心に分析した。

この時期の社会的状況は、開港による市場の形成や行政制度の改編と新しい経済体系の形成が始まり、都市の形態が大きく変化した時期であった。こうした都市化傾向は、日本による植民地政策とあいまって、商業活動は活発になり、それまで的一般庶民による商業発達の壁となっていた様々な制限や身分制度が事実上崩壊した。そのことによって一層活発な商業活動が計られる要因となった。しかし、植民地政策・教育は韓国人にとってこれまでの生活習慣や行動、思想など様々な部分に大きな制限を及ぼす結果ともなり、その抵抗の一貫として、ハングルの教育を通して、独立を図ろうとする様々な運動が韓国の国民の間で起きた。このような運動の中、ハングル使用運動は民族の精神的シンボルとして、また大衆とのコミュニケーション

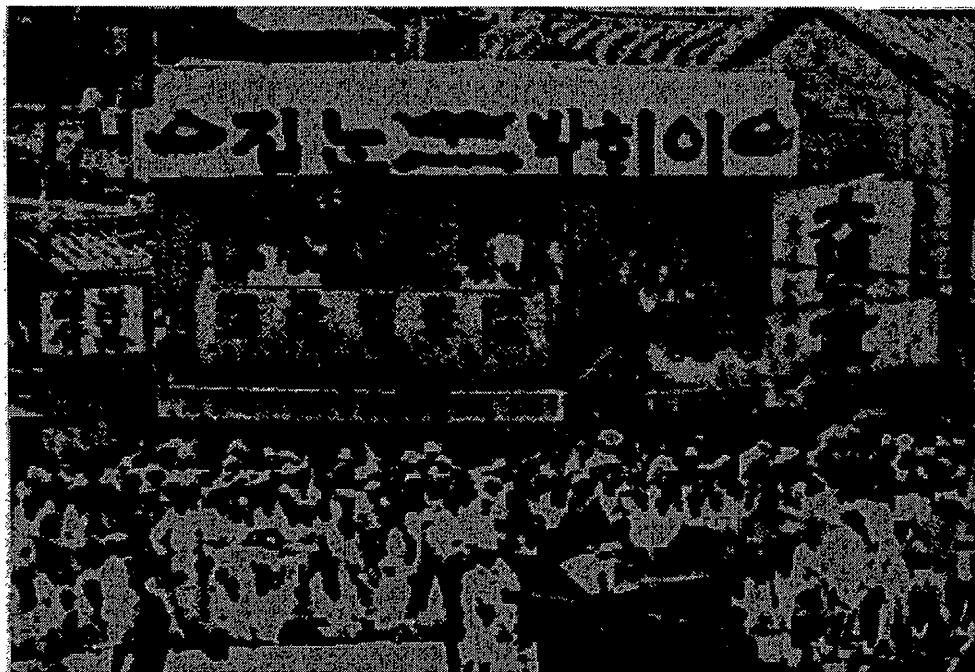


図46 ソウルハングル看板、1920年代

2階の屋根の面に書かれているハングル看板は歯科である。

100%ハングルで表記で、歯を作つて入れる家と書かれている。

ーションの手段として急速に展開されていった。このような社会的な状況を抱えていた当時の看板の特徴を写真資料を基に分析し、次のような特徴を見い出すことができた。

4-3.1. 看板に書かれた文字

それまでの漢字だけの看板とは異なり、漢字とハングル混じり、また漢字とひらがなやカタカナ混じり、アルファベット混じりの看板など、さまざまな文字が見られた。

漢字の場合は韓国の伝統的な書体が看板に書かれたり、日本的と思われる新しくレタリングされた漢字が見られた。ハングルの場合は、図46に見られるように、書体は非常に庶民的で素朴な表現が多い。この看板には古いタイプのハングル表記で、「歯をつくつて入れる家」と書かれており、歯

が描かれているが、いずれも表記順は右から左書きである。アルファベットの場合はその大部分が左から右書きが多く、新しい西洋の商品の広告に多く書かれたが、日本人の看板には日本語をローマ字で表記したものが多く見られた。

4-3.2. 看板の素材と形態

従来の看板広告の範囲をはるかに超えた材料とさまざまな形態の看板が見られる。主に四角の木の板の上に書かれた漢字の看板から鉄板の上にペイントで絵や文字を書いたり（図49参照）、その形態も建物全体を隠すほど大きいものなど、さまざまなかたちの看板が見られるようになった。



図47 薬房看板、1920年代

日本の影響がうかがえる商業建築物である。1階の入り口の上に設置されている看板は従来のものと考えられるが、2階に設置されている屋根看板は形態や設置場所など日本の影響がみられる。2階看板の商店名は「元済薬房」であり、1階の看板には「乾材薬局」と書かれており、ハングルの読みが付けられている。



図48 「仁丹」看板が見られる清川の商店街
様々な形態の看板が見られる。人々の服装は韓国の
伝統的な服装であるが、街は非常に早い速度で変わ
つていった。



図49 屋根看板がみらる南大門付近の商店1930年代
看板文字が遠くからもよくみえるほど大きく
書かれている。

大都市の看板の中、最も目立ち、また全国的に見られる看板は、薬屋の「仁丹」や「呉服屋」の看板である。「仁丹」看板は西洋人の男性のかたちをした絵看板で、中にはその看板に屋根飾りを付けたものさえ見られた。これらは従来にはなかった新しい看板であった（図48参照）。

4-3.3. 看板にかかれた内容

それまでの看板の内容は、主に売っている商品の種類や商号を表わしていたが、商品名だけでなく、商品の品質の説明や店の住所、電話番号、店



図50 薬局の看板「神農遺業」書かれている。

朝鮮時代にはこれらの薬局の看板には「神農遺業」、「萬病回春」などを書いて、これらの仕事を奉仕であるとした。

主の名前、ロゴマーク、商標、絵などさまざまな情報が書き込まれるようになつた。この時期から広告のためのロゴやシンボルマークの使用が始まつたと考えられる（図48, 49参照）。

特に顕著なことは近代期の新たな輸入品の看板が目立つようになり、例えば、レコードや自動車、美容室などは、その商品やサービスの内容を示すため、韓国語に直して書いたり、絵で表わすなど、顧客に理解を求める様々な方法での工夫があった。このように大都市を中心とした一連の近代期の看板は、これまでの街の景観を大きく変え、都市の構成する最も重要な要素になった。



図51 1900年代ソウル中心街

商店の並びは、韓国の伝統的な商業建築物である。書かれている文字は漢字とハングルが混じって、両文字とも筆で書いたと思われる。当時は女性を顧客とする店にはハングルがよく見かけられた。

4-4. 『朝鮮人の商業』にみられる韓国人の看板の特徴

『朝鮮人の商業』、(朝鮮総督府、調査資料第21、1925、全426[°]-シ[°])

では、植民地時代の韓国人商店の看板105点、およそ23種の業種が調査されている。なお、本書は、朝鮮総督府が韓国における従来の商業慣習を調査することを目的として行った調査をまとめたもので、商業都市及び店舗、商人の種類及び性質、商業取引慣習など様々な商業行為を報告している。そのうち、当時の看板について言及されていることは歴史的な側面からも非常に重要な資料となる。この調査書は、当時の看板を業種別に一つ一つ簡単な図にして挙げているが(別紙参考資料1参照)、情報の内容の分析から次のような看板の特徴が見い出せた。

表4 『朝鮮人の商業』における看板デザイン要素の分類統計表

	業種分類番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	統計
商店名	商品名及び業種	5	6	7	1	3	4	3	2	2	2	3	4	2	3	2	4	4	4	2	3	2	4	8	80
	店主の名前	2	1	・	・	・	3	・	1	1	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	1	1	・	11	
	店主の出身地	・	・	1	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	1	・	・	1	5
	儒教思想	・	1	2	1	・	・	1	1	2	・	1	1	・	・	4	1	1	・	・	1	・	1	18	
	自然現象	・	・	1	・	・	2	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	・	・	1	6
	その他の思想	2	1	2	・	2	1	3	・	・	1	3	1	1	1	・	1	1	4	2	2	・	1	3	32
文字	ハングル	2	1	・	・	・	3	・	・	1	・	1	2	・	1	2	1	・	・	・	1	1	・	1	16
	漢字	8	8	8	1	3	4	4	5	2	3	5	4	2	3	3	5	6	7	4	3	3	4	10	105
	ひらがな	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	カタカナ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	アルファベット	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
形態	長方形(横長)	6	1	6	・	3	4	2	4	1	・	2	3	2	3	3	5	5	5	4	3	3	4	8	77
	長方形(縦長)	1	5	2	1	・	・	2	・	1	1	1	・	・	・	・	1	・	・	・	2	・	・	2	17
	正方形	1	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	2
	その他	・	1	・	・	・	・	・	1	2	2	1	・	・	・	・	1	1	・	・	・	・	・	・	9
その他 の掲載 内容	シンボルマーク	・	3	1	・	3	・	・	2	・	・	1	・	・	・	・	・	1	2	1	・	2	3	19	
	絵	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	住所	7	4	6	・	1	2	1	2	2	・	2	3	2	3	3	4	4	6	2	3	3	6	66	
	電話番号	6	2	1	・	2	2	2	2	・	3	2	3	2	3	2	3	1	1	1	3	1	1	1	26
	店主の名前	4	6	5	1	1	3	2	2	1	・	・	3	2	3	2	3	2	3	2	2	3	2	3	55
	振替口座	4	1	・	・	・	1	・	2	・	・	2	1	1	・	・	・	・	・	・	・	・	1	13	

表5 『朝鮮人の商業』における業種とその数

業種分類番号	業種	看板の数	業種分類番号	業種	看板の数
1	布木商	8点	13	冠物販売業	2点
2	委託販売業	8点	14	履物販売業	3点
3	喪式及結婚用具	8点	15	毛筆及毛皮類販売業	3点
4	薪炭販売業	1点	16	木製品販売業	5点
5	運送業	3点	17	結婚用具販売業	6点
6	製薬並に販売業	4点	18	小間物雜貨店	7点
7	宿屋及飲食店業	4点	19	食料雜貨店	4点
8	土磁器販売業	5点	20	穀物販売及精米業	3点
9	質屋	2点	21	金銀細工製品	3点
10	仲介業	3点	22	金物販売業	4点
11	書籍販売業	5点	23	雜業：印章業、 菜種商業など	10点
12	紙類販売業	4点			

4-4.1. 商店名

看板に書かれている商店名は、主に商品名及び業種（80点）（図52, 60, 61参照）が書かれていて、李朝時代末期までの慣習が見らる（図51, 54, 55参照）。店主の名前とみられる人の名が（11点）（図56参照）、また儒教的な思想が（18点）（図57, 58参照）、その他、店主の経営信条のような言葉が合わせて（38点）書かれている。

3-4.2. 文字

105点の看板すべてに漢字が書かれている。ハングルは部分的に使われていたが、あくまで漢字の読み方を示すに過ぎなかった（図54, 57参照）。また、1925年（大正14年）までは、韓国人の商店には、まだひらかなやカタカナは使われていなかったことが明らかになったが、これまでの「塵」「店」「房」「局」「家」「在家」などの表現よりも「商社」「商店」「商会」などの言葉が多く使われていた（図56, 58参照）。書き方は縦書き看板を除いて、すべての表記は右から左へ書かれており、文字は105点すべての看板において漢字で書かれていた。

3-4.3. 形態

長方形（横長）が79点であり、縦型が17点、その他建物との関係からいくつか変形された看板が見られた。

3-4.4. 素材

は主に木材であったと考えられるが、明記されているものだけを挙げる
と木材が11点で、その他、いくつかは布や紙などが使われていたと明記
している。

4-4.5. その他

情報としてはシンボルマーク（19点）が使われたことがわかった。調査されていた105点の看板の中19点は多いとは言えないが、韓国人の看板文化において文字以外のものが書かれたことから、商業風習の中で一つ大きな変化があったといえるだろう。その他、看板に住所（66点）、電話番号（26点）、店主の名前（54点）、振替口座（13点）などが見られるが、これらが書かれた看板を小さくすると今日の名刺のような情報量が書き込まれていることがわかった。

この調査は韓国人の商店に限って調査したものであるが、看板の形態や内容、ロゴマークの使用など、日本の影響が非常に大きかったことがわかる。また、看板に書かれていた書体や書き方に韓国独特な雰囲気が見られると『朝鮮人の商業』には述べているが、おそらく図44や図52のような書体を指していると考えられる。第2章ですべて述べているように、韓国では長い歴史の間、商業が軽視され、特定の商店や官設商店の他は、自由な商業行為が非常に厳しく制限されてきたため、広告活動も官設商店や特定の商店に限って行われた。従って、看板が一般の商人の広告手段として普遍化し、今日のような看板形態が定着したのはこの時期からであると考えられる。



図52 1920年代の紙店

このような店舗は韓国伝統的な商業形式として、一種類の品物を売り、商品名が商店名となっている。店舗の入口の垂れは日本のれんの影響が伺える。



図53 朝鮮時代の筆房の看板

図52と同じく商品名は商店名となっている伝統的な商業形式である。紙の上に書いた文字を張っている。



図54 ハングルと漢字が混用されている看板

伝統的な商業建築物である長屋には、日本の影響と思われる提灯や屋根看板などが設置されている。垂れものにはハングルで売っている商品名を書いている。

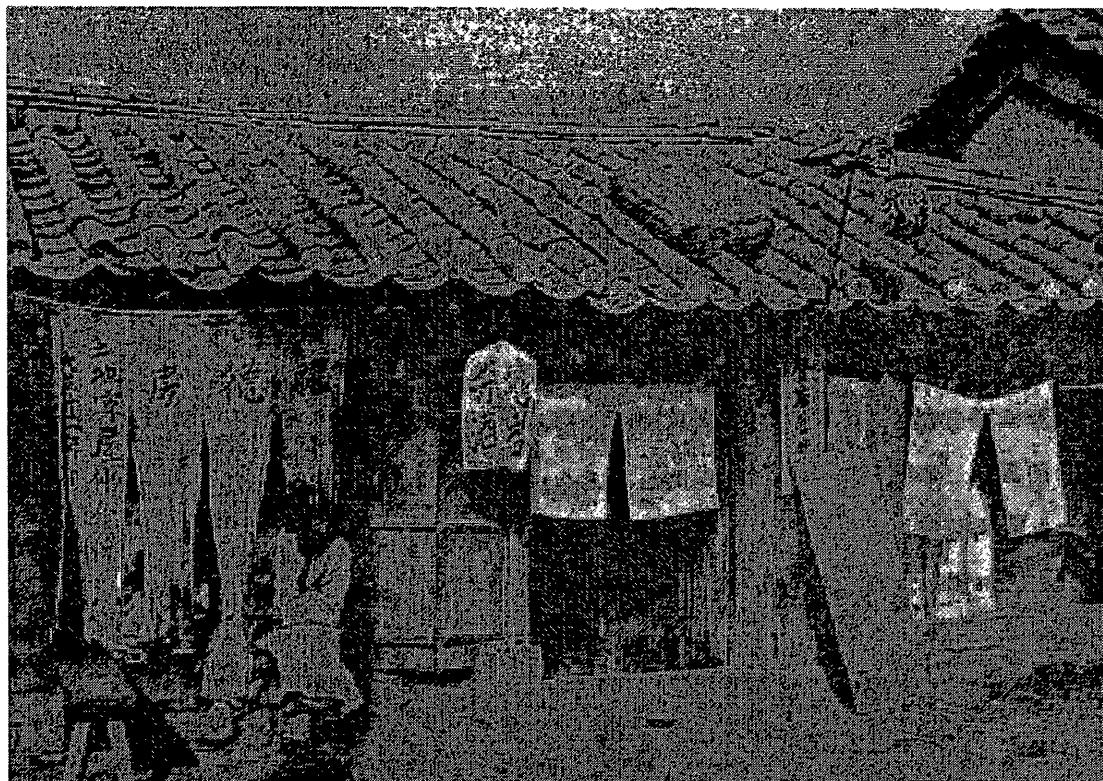


図55 朝鮮時代末期の不動産屋と居酒屋

左の長い垂れに「福德房」と書いているところが不動産屋で、真ん中の白の垂れは居酒屋である。居酒屋の入口左にある提灯のようなものには、漢字とハングルが混じって「酒店」と書かれている。

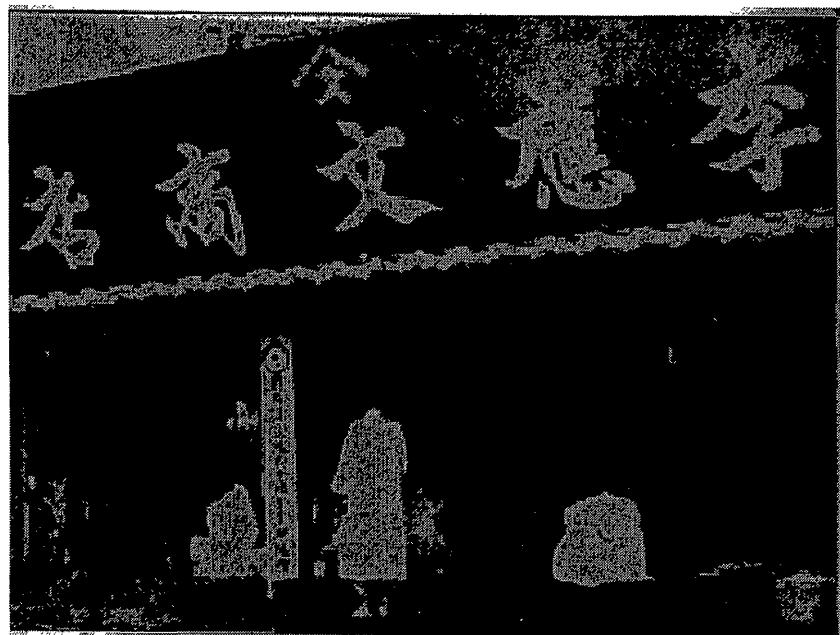


図56 名前が商店名となっている看板

日本の影響と思われる大きい屋根看板と柱に掛けている看板にはロゴマークが用いられている。



図57 布木商の看板と雑貨店

看板の形態は非常に日本の影響が見受けられ、文字のスケールも非常に大きくなり、数多くの文字が書かれていて、ハングルが部分的に使われている。

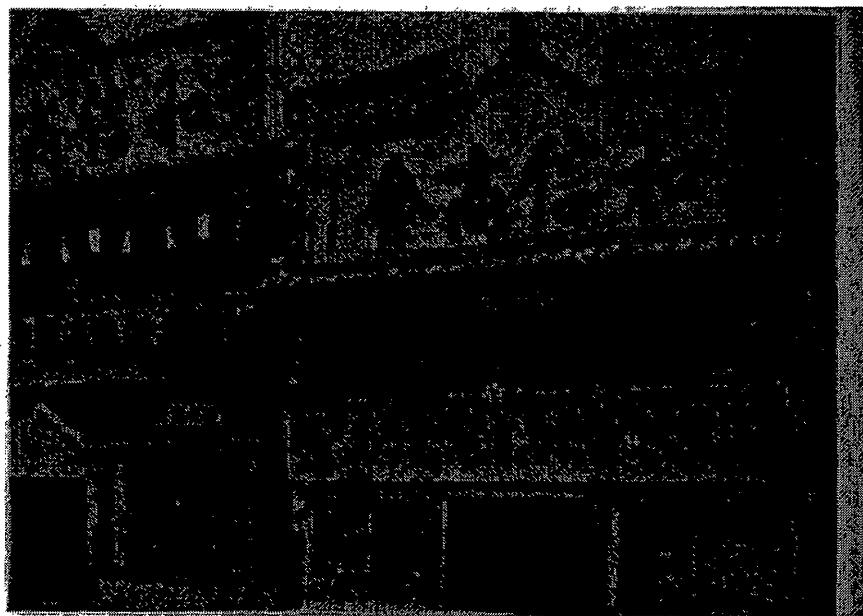


図58 2階建ての商店

図57と同じく看板の形態は非常に日本の影響が見受けられる。各層ごと看板が設置されており、数多くの文字が用いられている。

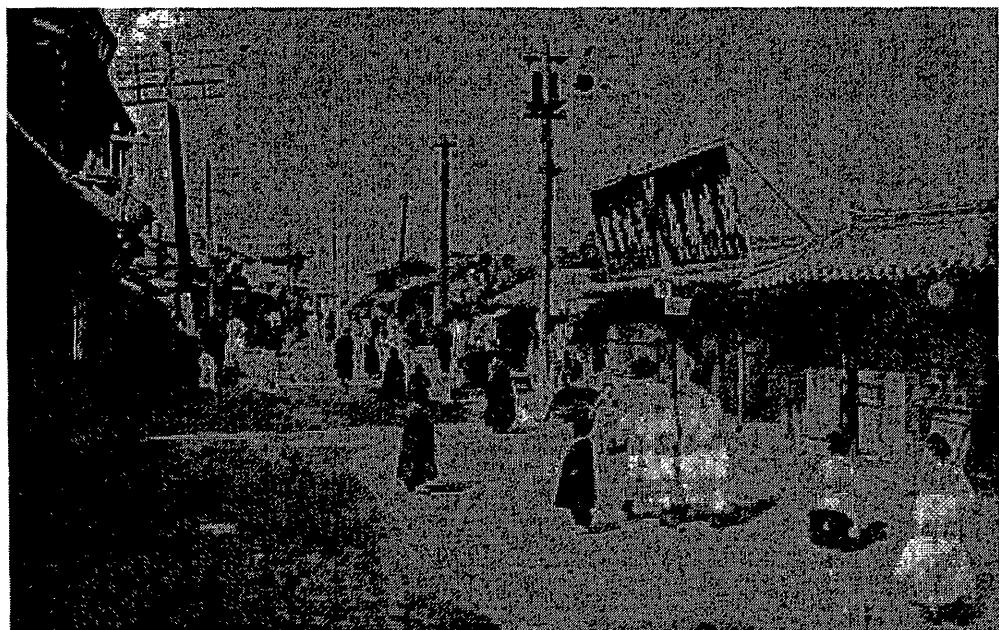


図59 1920年代のソウルの看板

右にある屋根看板は薬房と書籍屋が一緒になった看板である。「漢城薬局」と書かれて地域名が用いられている。



図60 キリスト教の薬種店、1920年代

「聖恩堂薬局」と書かれていて、のれんには十字架がシンボルとして描かれている。



図61 義式用具販売店

韓国の伝統的な儀礼に用いられてきた用具の店で、屋根の下に書いてある沢山の漢字は商品の内容について書いている。窓のガラスの上に商店名と思われる文字が書かれている。

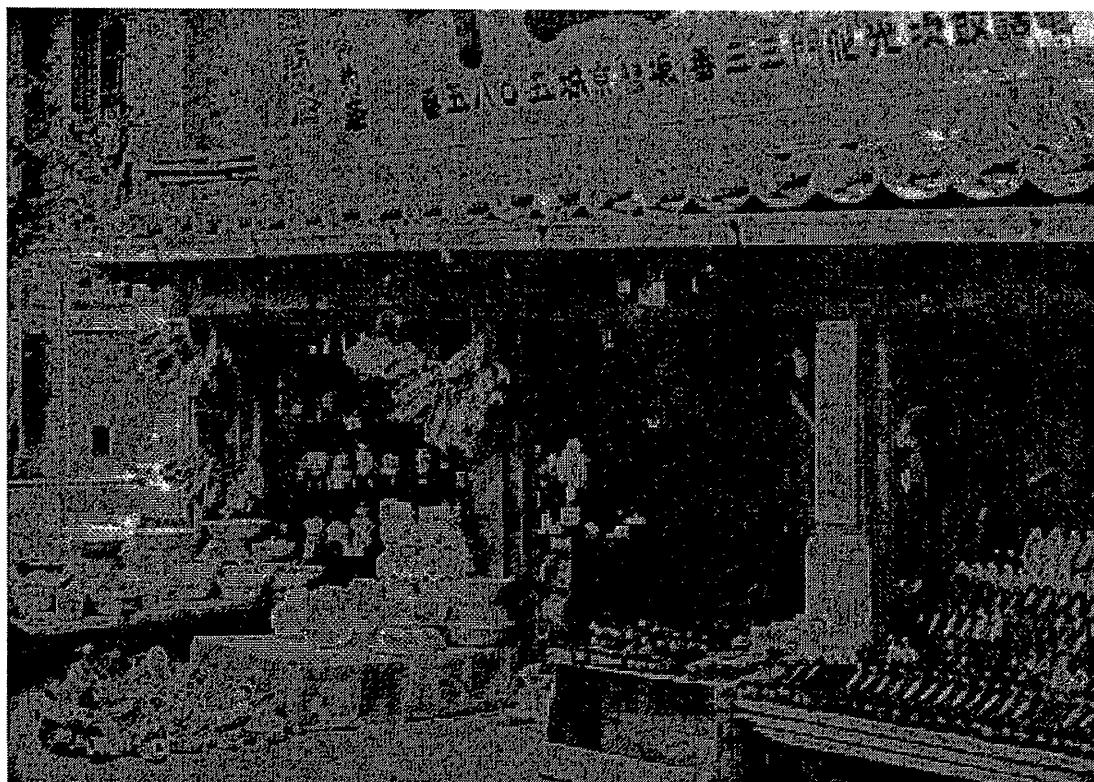


図62 靴店

品物の数や量が非常に多く、近代化された店と思われる。少し見える屋根看板には住所や電話番号などが書かれている。



図63 朝鮮時代末期の金物店

伝統的な商業建築形式で、柱に看板のようなものが掛けられている。路まで出ている品物の数や量は看板以上の広告の役割を果たしているとも考えられる。



図64 朝鮮時代の陶器店

韓国伝統的な建物の商店である。売っている品物が看板の役割をしている。



図65 朝鮮時代末期の荒物店

品物が看板の役割をして何を売っているかよくわかる店である。

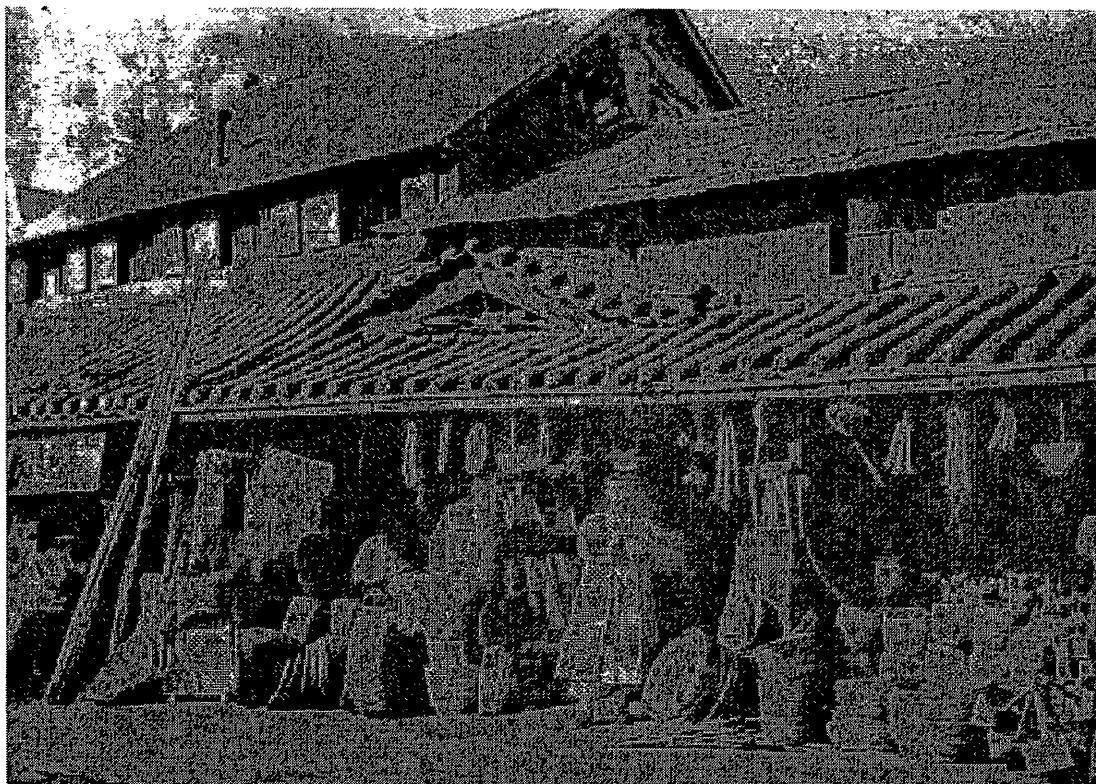


図66 朝鮮時代末期の荒物店

図65と同じく、何を売っているかよくわかる店。品物が看板の役割をしている。

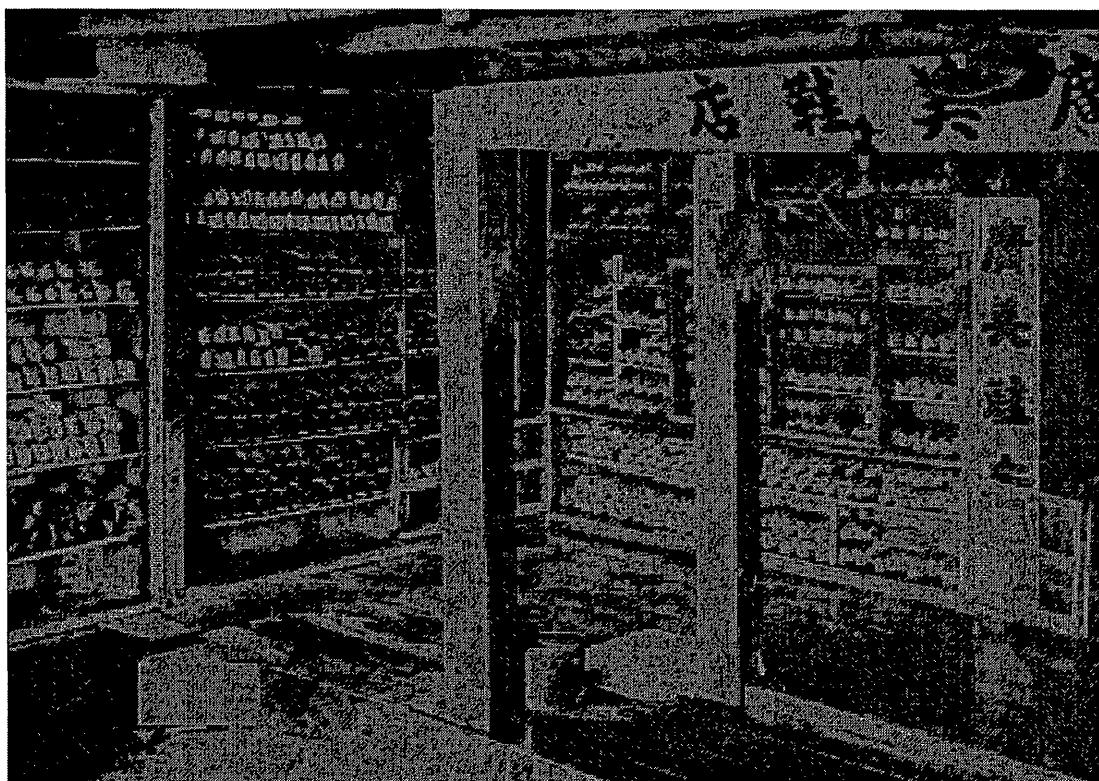


図67 靴店

店内にも商店名が飾りとして描かれている。当時の商店内の風景が伺える。



図68 家具店

韓国の伝統的な商業建築物。室内用品であって店内に陣列している。



図69 開京布木店

このような小さい店舗の中に4人も入っているのは、おそらく同時にくる客の対応をするためと考えられる。



図70 帯類行商

これらの行商は体が商店となって、売っている品物が看板の役割をしていると考えられる。

表6 韓国の看板の時代別比較表

	高麗時代 (901年～1392年)	李朝時代 (1392年～1876年)	近代期 (1876年～1945年)
商業建物の形式	・長廊・行廊形式の平屋	・長廊・行廊形式の平屋 ・仮設物	・一戸建ての二階屋 ・洋風建築物（洋風のフラット屋根）
看板の形態	・長方形の板 ・旗	・長方形の板 ・柱聯・旗	・長方形の板 ・日本式の屋根看板 ・のれん・旗
看板の文字	・漢字	・漢字 ・ハングル	・漢字 ・ハングル ・日本語 (漢字、ひらがな、カタカナ混じり) ・アルファベット
看板に書かれて いる内容	・儒教的の思想 ・経営信条	・商品名 ・思想的なもの	・商品名 ・店主の名前 ・思想的なもの ・電話番号 ・住所、振替口座 ・シンボルマーク
看板の素材	・木材や布	・木材や布	・木材や布 ・金属
看板の設置場所	・ひさしの下 ・入り口の上	・ひさしの下 ・入り口の上 ・柱の上	・屋根の上 ・ひさしの下や上 ・入り口の上 ・柱の上

4-5. 総結

韓国は植民地時代を起点に社会的状況や経済的構造、これまでの慣習など、様々な面で大きく転回していった。

情報伝達のための看板文字は長い歴史の間漢字に依存していた。ハングルは貴族や知識層に軽視され、また、日本の植民地化によるハングル使用禁止にもかかわらず、民族のアイデンティティ確立に最も重要な要素となってきた。つまり、ハングルは韓国が日本や中国とは異なる独自の文化を主張する姿勢の一つの象徴となったのである。

また、看板文字は漢字、ひらかな、カタカナ、ハングル、アルファベットなど多様な言語が書かれるようになり、植民地時代の当時の複雑で変化の激しい社会的な状況を表わしていた。

しかしながら、『朝鮮人の商業』にみられる当時の韓国人の商店は伝統的な商業形式を残しているものが多く、文字は主に漢字が使われハングルは部分的に用いられていた。いずれも韓国人の商店看板は大形化し、商標が描かれるなど近代化の社会的状況に備えていく様子がみられた。このように看板が多様になったのは、当時の社会的な状況や商業文化の近代化が商業発達を反映するものとも考えられ、また商店において看板の役割は非常に重要なものとなり、結果的にこの時期に形成された看板文化は今日の韓国看板文化の基盤となった。

第5章 現在の韓国看板の成立過程とその特徴

韓国の現代は、「祖国の近代化」を巡り、急速に発展と変化を示してきた。近代化を巡る社会的な変動や政治的状況の中でハングルの使用に関する運動は政策的に休まず続けられてきた。政府の政策的な「ハングル専用運動」や「ハングル醇化運動」が看板デザインにおいてどのような影響を及ぼしたか、また、看板をどのようなものとして特徴づけてきたかを文献と現地調査をもとに考察た。さらに、ハングル看板の形成過程を探ることによって、看板におけるハングル表記の情報伝達の特徴と機能を抽出することを目的とした。

5-1. ハングル政策が看板に及ぼす影響

韓国における国語（ハングル）政策が看板にどのように影響したを考察することは、今日の看板文化の形成課程を考えるに非常に重要なことである。そのため、韓国におけるハングル政策と教育がどのように進められた

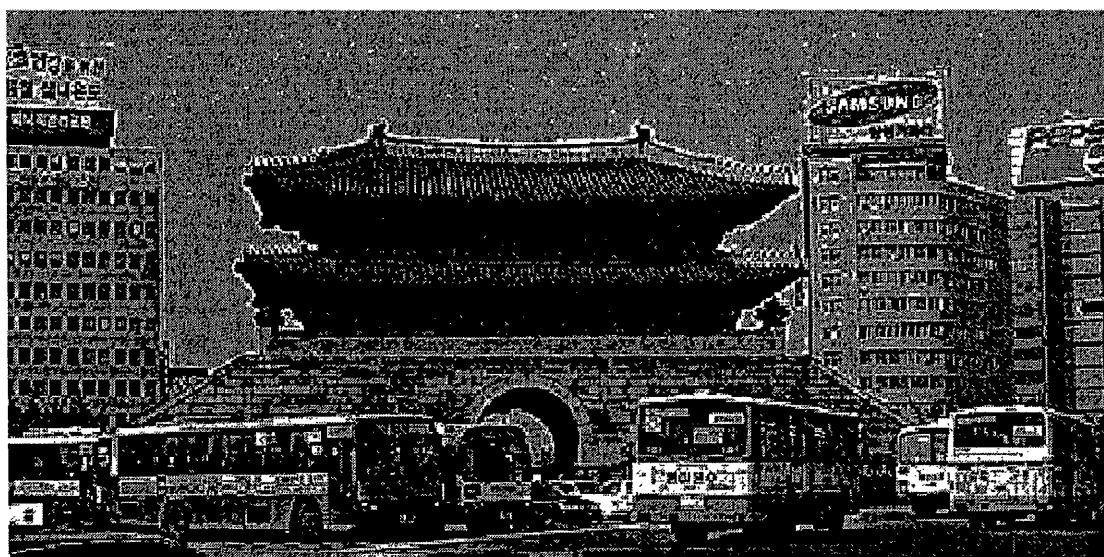


図71 ソウルの南大門周辺

かを『韓国における国語・国史教育』(森田芳夫、原書房、1987)に基づいて以下のようにまとめてみる。

5-1.1. 日本式看板撤去運動

韓国の国語教育は、1945年日本から解放されてから失われた国語（ハングル）に対する認識が強化され、朝鮮語学会を中心としてハングル専用と漢字廃止運動が行われた。

ハングル専用に関する法律は1948年10月9日から採択されることによって、ハングル漢字混用の主張と分かれ、50年も経った今日に至までその論議は続けられている。1948年10月9日には「日本式看板一掃運動」が行われ、また50年、韓国動乱以前に、鉄道駅構内の駅名表示をハングルにしたことが記されている。

1957年12月6日、国務会議は「ハングル専用積極推進に関する件」を決議し、看板、掲示文、客種印刷物はハングル専用とした。内務部は1958年8月21～27日をハングル勧奨期間と定めて、看板の書き直し運動を全国的に展開し、中国料理屋（図72参照）を除く看板はほとんどハングルに書き直させたという。

5-1.2. 国語醇化運動

ハングル専用運動とともに、解放直後から始められていた国語醇化についても、新聞、放送、学術、映画、音楽、建築、スポーツ、美容、服装、家事、食品、菓子の用語等にわたって、直しことばを記した資料が数多く刊行され、政府としてもその推進につとめた。

・教科書から漢字除去

前述のように、朴正熙大統領は、1968年以後、ハングル専用政策を強力に進めており、68年10月28日、「1972年度から中高校の入学試験と大学入



図72 中華料理屋の看板

このような看板は全国的に同じ形式をもって今日至っている。これらの看板は黒の板に白文字か、金文字で商店名が書かれて、板の両側に赤の布を垂れていて、長い間中国料理屋のシンボルとなってきた。

試予備考査には、漢字を出題しないこと、客大学の入学試験にも出題しないよう」に指示した。

1970～74学年度まで満5年間は、大学課程、高校の古典の一都および漢文を除いて、その他の教科書から漢字が除かれてしまった。

・漢文教育用基礎漢字の制定

1972年6月5日に公布された文教部令第300号で教育課程を改正し、中学校の教育課程に「漢文」が新設され、漢文学習を通じて、伝統文化の基礎の上に、新しい民族文化を創造する態度を養うと記した。

漢字併用の理由として、新聞、雑誌その他の刊行物が漢字を混用していること、重要な概念を示す大部分の用語が漢字語であり、かつ同音異義語が

相当数あって、ハングルだけでは意味の把握がむずかしいこと、また英語を併記しながら漢字を便わない矛盾を指摘していた。

今日の「看板文化」が形成されるには様々な原因がありうるが、その中、最も影響されたと思われるは日本から解放されてからのハングル教育である。そのため、韓国における国語（ハングル）教育が看板にどのように影響したを考察することは、今日の看板文化の形成過程を考えるに非常に重要な意味を持つ。

5-1.3. ハングル専用運動

1948年5月31日に韓国国会が成立し、憲法討議が始められた際に「憲法をハングルで書いて宣布する」運動が起こされた。「憲法正本の文章をハングルで書き、そのハングルの脇に漢字を書入れること」の動議が国会に提出されて可決された。

1) ハングル専用運動（李承晩政権時代）

1948年5月31日に韓国国会が成立し、憲法討議が始められた際に「憲法をハングルで書いて宣布する」運動が起こされた。「憲法正本の文章をハングルで書き、そのハングルの脇に漢字を書入れること」の動議が国会に提出されて可決。7月17日に大韓民国憲法公布式で、李承晩はハングルで書いた憲法正本とハングル・漢字混用の正本の二つに署名した。

同年7月24日に、国会の文教厚生委員会に139名の議員により、ハングル専用法制定建議案が提出され、9月15日に国会議員140名の連署によるハングル専用法案が提出され、9月30日に文教厚生委員会の審議を終えた。この案には反対者が多かったが、「ただし、当分の間、必要な時は漢字を併用できる」を付記して、10月9日、法律として公布された。

『ハングル運動50年史』によると、1948年10月9日、日本式看板一掃運動が行なわれたこと、また50年、韓国動乱以前に、鉄道駅構内の駅名表示

をハングルにしたことが記されている。

1957年12月6日、国務会議は「ハングル専用積極推進に関する件」を決議した。その内容は、次のようなものである。

- ・文教部は、ハングル専用法と同法の施行今を制定する。
- ・看板、掲示文、客種印刷物はハングル専用とする。
- ・1958年1月から定期刊行物はハングル専用とする等を骨子とした。

政府はこれを効果的に実施するため、1958年1月施行の「ハングル専用実践要綱」を決定した。内務部は1958年8月21～27日をハングル勧奨期間と定め、看板の書き直し運動を全国的に展開し、中国料理屋を除く看板はほとんどハングルに書き直させたという。

2) 軍事政権以降

軍事政権はハングル専用に熱意をもち、1961年12月29日大法院規則で法院の文書には「標準語であるハングル国語体で横書き分かち書きにする」ようにと記した。1962年4月、日常用語の中の漢字語と外来語を純粋な韓国語に代える作業を行なった。 1963年12月に、政府公文書規程を改正し



図73 南北動乱（朝鮮戦争）直後のソウルの看板、1951年
街の看板はまだ漢字が多く使われていていた。

て、文書はハングル横書きと定めた。

1968年3月14日、政府はハングル専用5か年計画の指針を公表し、当時の常用漢字を69年度に700字に減らして72年度までに漢字を一掃する。さらに新聞および客種刊行物の漢字を年次的に減らして、72年度までにハングルを専月とし、客種公文書、人事記録カードから漢字を一掃する。

11月18日、ソウル市内の区庁、保健所等の公文書、看板を1969年2月以後ハングル専用とすることに決定した。

12月9日、朴大統領は牙山にある顯思祠（李舜臣將軍を祀る）を視察して、懸板の文字をハングルに直すよう指示した。

11月24日、公文書および政府の刊行物、公告、廣告文等はハングル専用にするよう示した。<ハングル専用に関する法律の但し書にかかわらず、政府が発行するすべての公文書その他の表現物（標語、ポスター、垂れ幕、



図74 1960年代のソウルの商店

選挙運動の風景であるが候補の名前や街の看板はすべてハングル化となっている。

政府刊行の官報は、1963年から横書きになり、内容にハングル文が漸次多く見られたが、1969年から『官報』の題名を『관보』とハングルで書き、69年6月以後、内容に漢字がほとんど見られなくなった。



図75 水産庁の看板

1966年発足した水産庁、国税庁の看板はすべてハングルで書くようになった。



図75 仁寺洞商店街

この道路の両側は主にギャラリー、古本屋、骨董品屋、喫茶店、文房具屋などが多く、韓国の芸術や生活文化が感じられる商店街として国内の人だけではなく、観光客も多く訪れるところである。

5-2. ソウルの仁寺洞看板の特徴（仁寺洞看板の調査の分析結果）

前述したハングル政策が看板にどのように影響したか、看板をどのように特徴つけているかを把握するため、韓国において最も代表とされる仁寺洞商店街の看板を調査して分析を行った。調査方法は、現在の韓国のソウルの仁寺洞の商店街の看板を中心として調査し、写真撮影をもとに看板のデザイン要素の特徴の分析を行った。

調査、分析の対象とした仁寺洞は、韓国の伝統的な町で古くからの住宅地であった。都市化に連れ次第に商業街となり古本屋、画廊、骨董品屋、レストラン、喫茶店、居酒屋などが多くなり、今ではソウルで最も代表的な商店街の一つとなった地区である。

仁寺洞の看板の中で分析の対象としたものは、主に商業建物の1階と2階



図76 仁寺洞のハングル看板

ハングルの看板文字は毛筆で書いてあって非常に洗練されたものと考えられる。

までにある看板221点である。仁寺洞の大部分の商店には少なくとも2つ以上の看板が設置されており、そのうち、形態が異なる看板の場合、最高2点までを分析の対象とした。分析の内容は看板のデザイン要素となる形態、文字内容、看板に書かれている文字の書き順、レタリングのタイプ、文字の数などを分析した。その結果は次の通りである。

5-2.1. 文字の表記方式（文字の配列順）

仁寺洞の看板の表記方式は統一されていないもののが多かった（図77, 78, 79参照）。221点のうち126点の看板が左から右へ書かれていて、2段文字の横書き看板28と併せると154点が左から右書きである。縦書きの看板の場合は一行書きと2行書き看板があって、2行書きの看板の場合はその書き順に一定の基準がない。また、正方形の看板に4文字が書かれている看板が3つあったが、書き順が各々違っている。（表8参照）

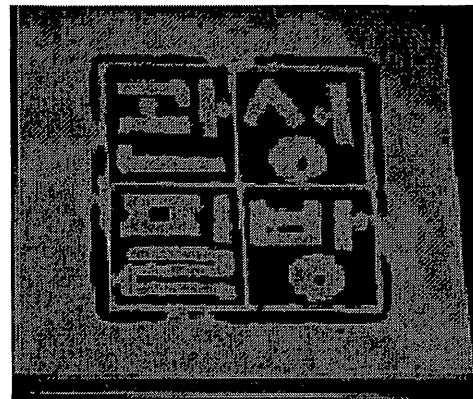
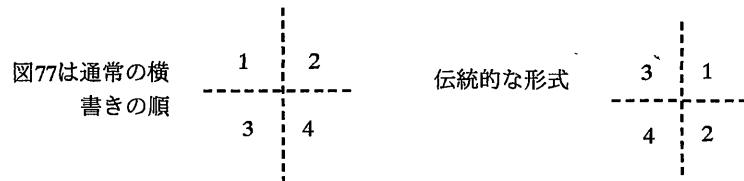


図77 筆房の看板

この看板は図78店のもう一つの掛け看板であるが、このような形式は通常の横書きの場合左から右へ、上から下へ書くものであって、伝統的な印章の形式から変形されたものと考えられる。



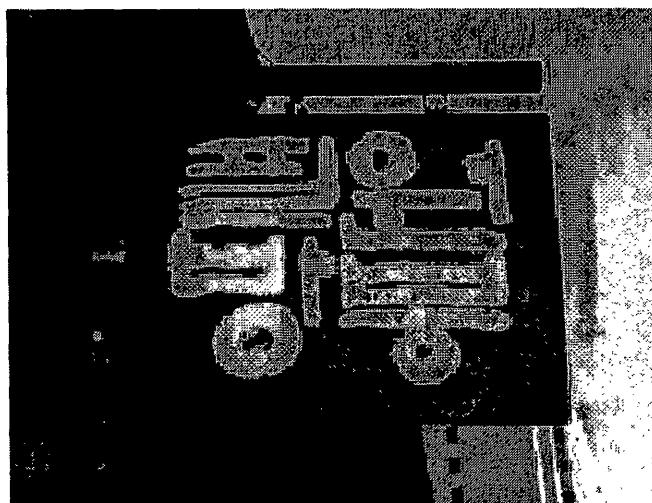


図78 仁寺洞筆房の看板

4文字のハングルで書かれているが、書いている順番が伝統的な形式を用いているため、この場合の看板文字そのものが一つのロゴマークとなっている。

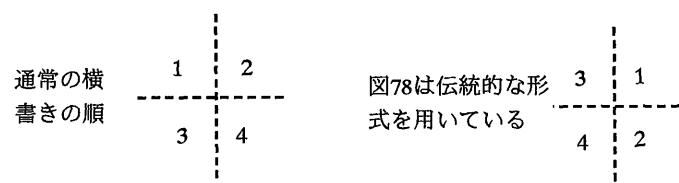




図79 レストランの看板

左の看板は「花を投げたい」、右の看板は「流れる水のように」という商店名であり、詩的な表現の看板である。この看板は両方とも縦書きであるが、左の看板は右から左へ、右の看板は左から右の順に読むように書かれている。始めの文字を少し高めに書いて読み始めの場所を示している。また、小さい文字で売っている商品名やメニューが書かれている。

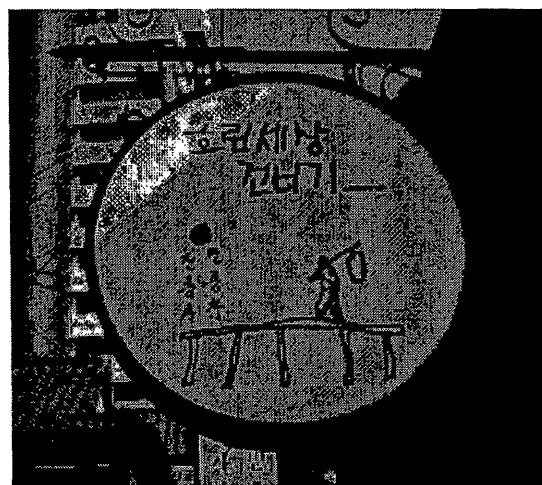


図80 喫茶店の看板

書かれている商店名は「暗い世の中渡り」という意味のハングル表記。2行の横書きがハングルのみの商店名であって、小さい縦2行の文字には商品名が書かれている。

表7 看板文字の表記方式（書く順番）

1	→	126
2	←	6
3	→→	28
4	↓	39
5	1↓ 2↓	9
6	2↓ 1↓	6
7	1 3 1 4 2 2 1 3 2 4 3 1 2 3 4	3
8	1-7までの表記外の混合したもの	4

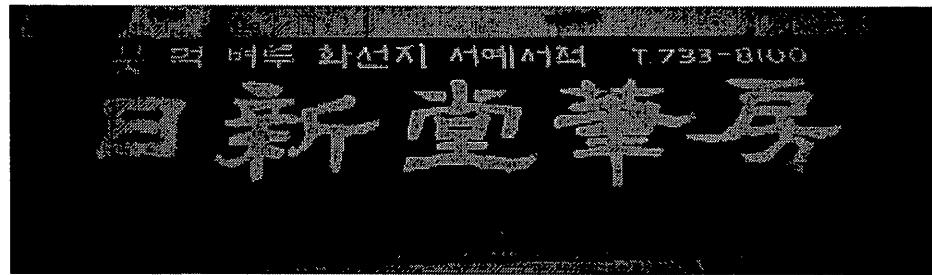


図81 筆房の看板

漢字とハングル混じりの看板であるが、商店名は漢字でその上にハングルは商品名が書かれている。「筆房」は朝鮮時代からの商店名であって古い形式である。

表8 看板文字の種類

1	ハングルのみ	128
2	漢字のみ	47
3	英語のみ	6
4	ハングルと漢字混じり	18
5	ハングルと英語混じり	10
6	漢字と英語混じり	5
7	ハングル、漢字、英語混じり	1

表9 看板のレタリングのタイプ

1	ゴシック	50
2	明朝体	14
3	宮書体	7
4	毛筆体	87
5	究めてデザイン化された書体	61



図82 仁寺洞のレストランの看板

看板の文字は「ソッテ」と書かれていて、小さい文字は「分けられる豊かさ」と書かれている。伝統的なイメージを浮かばせる看板であるが、その商店についての情報として商品や業種より商店のイメージを看板の内容として挙げているのが多く見られる。

表10 看板の文字の数

1	2文字	13
2	3文字	29
3	4文字	25
4	5文字	20
5	6文字以上	133

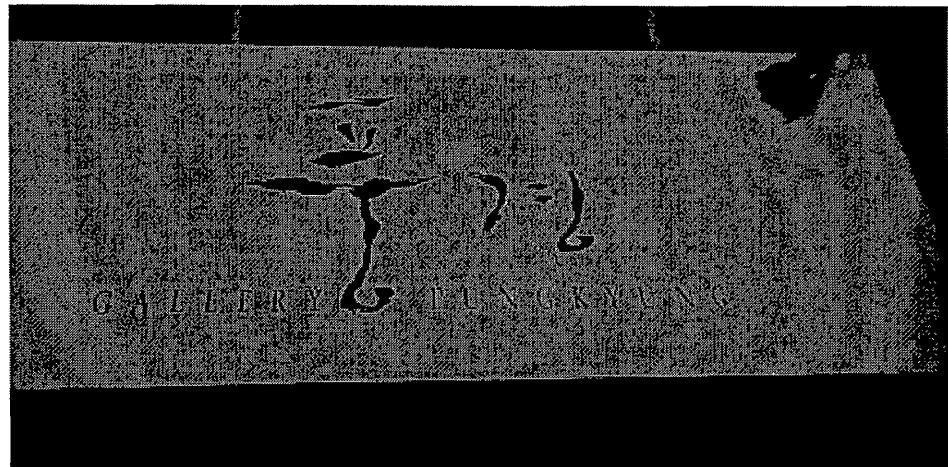


図83 「風景」という意味のギャラリーの看板

風景というイメージを十分生かしてデザインされたハングルの看板である。伝統的な道具である毛筆の質感が生かされているデザインである。

5-2.2. 看板に書かれている文字種類

分析の対象とした221点の看板に書かれている文字は様々である（図81, 83参照）。ハングルのみの看板が128点、漢字のみの看板が47点、英語のみの看板が6点、ハングルと漢字混じり、漢字と英語混じり、ハングルと英語混じりなど文字が一つの看板の上に同時に書かれていて、多様な文字が使われていることが明らかになった。（表8参照）

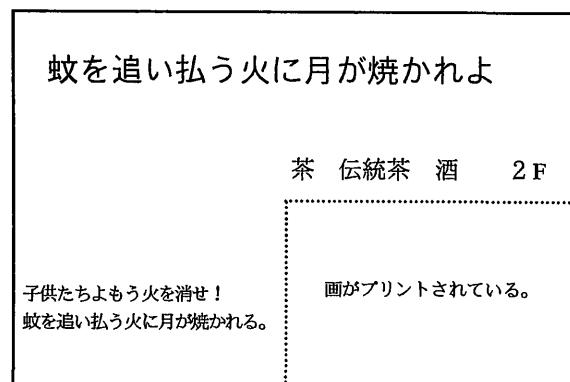
5-2.3. 看板のレタリングタイプ

仁寺洞の看板におけるレタリングの大きな特徴は、毛筆体が多く使われていることである（図78, 81, 83参照）。ゴシック体の看板が50点、毛筆体の看板が87点であり、宮書体の看板文字は7点あるが、それも本来は毛筆で書くものであり、さらに極めてデザイン化された書体のうちにも筆を利用しているものも多くみられるなど、毛筆体によるレタリングが仁寺洞看板の大きな特徴の一つとしてあげられる（表9参照）。



図84 喫茶店の看板

看板に書かれている文字情報の内容



5-2.4. 看板の文字の数

仁寺洞の看板に書かれている文字数は6文字以上使われている看板が133点であってやや多い（図79, 80, 81, 82, 84参照）。一番多く使われている場合は32文字であった。それは看板に商店名だけではなく、商品名やサービス内容などが看板に書かれているためである。2文字の看板が13点、3文字の看板が29点、4文字の看板が25点、5文字が20点である（表10参照）。

5-2.5. 看板が示す情報内容

これらの221点の看板の中、看板に書かれている文字の情報すべてから商品やサービスの内容が具体的にわかる看板は153点であって、商品やサービス内容が具体的にはわからない場合が68点もある。

その他、仁寺洞の看板の大きな特徴と取り上げられるのは商店名として「詩的な表現」が見られることである。それは221点の看板のうち26点に見られ、その例を幾つかあげると次の通りである。（図68、69、70参照）

- ・流れる水のように
- ・わが夫は木こり
- ・月鳥は月のみ思う
- ・静かな音
- ・カボチャの種を持ってきたつばめ
- ・月を飲んでしまった池
- ・くらい世間を渡る
- ・仁寺洞の人々

など、これらの商店名は、主に喫茶店やレストランの商店名であるが、このような商店の看板は大部分がハングルを用いていて商店名を一つのイメージとして伝えようとするものと考えられる。

5-3. 慶州の看板文字（慶州市内の看板調査の分析結果）

韓国は、かつて日本や中国と同じく漢字文化圏であって、古くから看板デザインにおいても漢字は最も重要なデザイン要素として用いられてきた。しかし、今日韓国は自国文字ハングルを日常生活の情報伝達やコミュニケーションの手段としているが、看板に用いられているハングル表記は決して美しく書かれているとは言い難いのである。

街並に氾濫している看板に書かれているハングルは、その美しさを判断する根本的な基準も持たず増えつつあり、むしろ看板本来の機能が問われるだけでなく、街の景観を壊す一つの原因ともなっているのである。そこで本章の調査内容は、看板においてハングルレタリングの変遷過程を考察することと、またどのような特徴を表しているかを把握することを目的とする。

そのために、韓国の慶州市内の商店街の看板324点（窓ガラスに書かれている文字は除く）を写真撮影して分析を行った。また、1970年代と1980年代の看板デザインに関する研究論文のデータと文献を部分的に引用した。

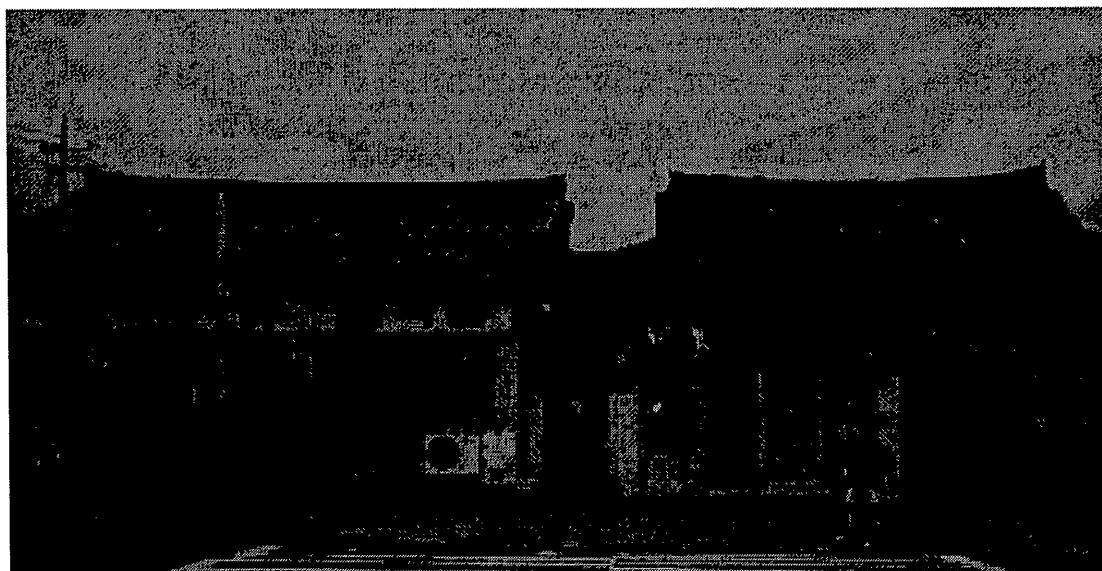


図85 慶州市内の商店風景

5-3.1. ハングル看板の書体

慶州における調査の結果、現在の看板に用いられている文字の大部分はハングルであって、書体は大きく二通りであったことが分かった。その一つが「ゴシック体」で、もう一つは「デザイン体」である（別紙参考資料4参照）。ゴシック体は、324点の中164点（約51%）であって、全部同じスタイルであるが、デザイン体（一般的に書体名が確立されていないものの総称）の場合は、集計されている数だけスタイルが異なるものであった。

ゴシック体は、1970年代から本格的に使われた最も普遍的なスタイルとして、また製作の面でも他の書体より書きやすいことで、ハングル看板に圧倒的に多く使われた書体である。1976年の「看板デザインの分析研究」[注64]には調査されている看板文字の44%がゴシック体で、デザイン体が47%、筆記体9%であった。

1985年の看板デザインに関する研究[注65]によるとゴシック体が調査した看板の80%を占めていて、ハングル看板の文字デザインの大きな特徴となっていることが明らかにされた。このようにゴシック体がハングル看板を特徴づけるようになった原因は、ゴシック体が他の書体より目立つことと、太ゴシック体への応用、書きやすいことがあげられる。しかし、最も大きな原因は急激な経済成長によって看板の需要が増大するに対し、ハングルに看板に適した新しいタイプのレタリングを創作し、デザイン性を向上させるための充分な時間を持たなかつたことであると考えられる。

5-3.2. ハングル書体の変遷課程と特徴

慶州の看板調査の分析結果とこれまでの先行研究にもとづいてハングル書体の一つの傾向を見い出すことができた。それは1970年代から今日まで、ハングル看板の書体の中、「ゴシック体」が一番多く使用されていたことである。初期（1900年代）のハングル看板には、「毛筆を用いた伝統的な書

体」が多かったが、1950年代の看板はゴシック体の基礎となる書体が多くみられるようになる。1960年代は朝鮮動乱後間もない時代であって、特徴とされる看板文字はあげられないが、手書きの文字を始め個人の多様な書体が使われたが、その後ゴシック体は看板文字として定着するようになった。

ハングルにおける「ゴシック体」は、英字のアルファベットの書体から由来したものである。1903年、Alternate Gothic という名前の（serifがなく横と縦の太さが同じである書体）が出た以降、それが日本を通して入って、韓国に導入されたものであって、そのまま使うようになった〔注66〕。ハングルが創られた初期の書体と非常に似ている面も多いが、ハングルならではの書体名とはいひ難いのである。

ハングルが一般庶民の情報伝達やコミュニケーションの手段として本格的に使われたのは、ハングルがつくられた1446年からおよそ450年経って、今から約100年前からである。看板にハングルが本格的に使用されたのは、1945年に日本から解放されてからである。ハングルがこれほど早く一般化されるようになったのは社会的な状況、つまり、「政策的なハングル専用運動」と「ハングル教育の拡大」が大きく影響したのである。しかし、ハングル文字の造形的な美しさに対する関心や工夫が乏しく、歴史的にみると数多くのハングル書体があったにも関わらず（参考資料3参照）、こうした書体は看板に生かされていないまま今日に至っているのが現実である。

現代の都市に氾濫する看板広告において、文字は情報を伝え、視覚経験されるものとして、文字を造形的に美しく表現することは大変重要なことである。また、看板文字の内容は、看板全体の質に関わるものであって、商店のイメージを大きく左右するものである。従って、情報伝達のための言語として不充分な文字の氾濫は、都市全体の機能と景観の質を落す原因となるのである。



図86 現在の仁寺洞の古本屋「通文館」

ますます巨大化されていく現代都市におけるパブリック空間での看板は、与えようとするメッセージの明確さと文字の造形美が調和されるべきである。よってこれらの看板は各々の地域において地域文化を高める重要な要素となるのであろう。

5-4. ハングル看板の課題

今日韓国の看板の課題は一言でいえるものではない。しかしながらハングル看板に著しく特徴とされるものは、書かれている文字の意味が分からぬことと、看板に数多くの文字が使われていることである。これらの課題は、ハングル専用政策が看板に及ぼした影響だけではなく、ハングルがもつ特性や、また、韓国人が持つ伝統的な慣習との関係、新たな現象の発生として今日の韓国の看板を特徴づけているものもある。ソウルと慶州の看板調査をもとに考察してみると次のようである。

5-4.1. 表音文字

看板に書かれているハングルの中、意味が不明確な言葉が商店名として使用されている。ハングルはそもそも「表音文字」であることから、漢字



図87 1955-1965年の「通文館図」

今のはじ洞に移す以前の店舗の看板。この看板に書かれている文字のスタイルは看板書体として、よく使われた書体である。しかし、今日ではこのような書体はほとんど使われていない。



図88 1867年の「通文館」

この看板はおそらくペイントで書いたと思われるが、今日ではこのようなペイントで書く看板はほとんどなくなっている。

熟語（造語）をハングルで表記している看板の場合、看板本来の情報伝達という機能を十分果たしているとは言い難い。

ハングル看板における新たな現象は「詩的な表現」が商店名として使われていることである。上述した漢字熟語のハングル音読みはその意味が分からぬ一方、詩的な表現を用いてハングルのみの表記を計ろうとしたと思われる商店が増えている。しかしながら、このような商店は商品やサービス内容とは直接関係のない韓国人の生活文化や慣習を描いたものが多く、一つのイメージとして顧客の情緒的な面に訴えている。ただし、これだけでは商業の内容が十分伝えられないため、商品名やサービス内容を書き加えるなど、限られているスペースにいかにデザインするかが大きな問題となっている。

5-4-2. 表記方式と文字の数

今日の仁寺洞の看板は文字のレタリングや文字の種類、形態など比較的多様な看板が形成されている。文字は韓国における看板デザインの要素の中で最も重要とされている。しかしながら、看板に書かれている文字の書き順が統一されていないことは、情報伝達の面ではその役割を十分果たしているとは言い難い。看板本来の機能である情報伝達が損なわれていると考えられる。さらに、看板の文字の数が非常に多いことが注目される。ソウルの看板221点の看板のうち使われている文字の数が6文字以上が133点であって、全体の51%を示している。このような看板の場合は、商店名がそもそも長いものもあるが、商店名だけでは商店についての情報が十分与えられないため、商品名やサービス内容など様々な情報が込められているためである。しかし、いうまでもないが、文字数が多過るためにかえって情報が伝わりにくくし、また文字数の多い看板が数多くひとつの建物に附設されると建物の美観を損ない、ひいては都市景観を損なう原因となりうる

のである。

1945年日本から解放されて間もなく、1948年から「ハングル専用運動」が政策的に実施されたが、1950年南北動乱（朝鮮戦争）が起き、ハングルを使う一つの民族が二つに分かれることになった。同じ言語（ハングル）を使いながら非常に異なる目的をもつ、資本主義経済体制の看板文化と共産主義社会の看板文化が形成されることになった。

「ハングル政策」は韓国における日常の文字生活において自国文字であるハングルのみを使おうとする政府次元の政策である。この政策ではハングルの専用を促進し、ハングル使用に障害のある場合、その解決を模索することなどである。[注67]

しかし、1950年朝鮮戦争直後の写真資料にも漢字の看板が多く写っている。一つの例として仁寺洞の古本屋「通文館」の看板は漢字を用いて商店のシンボルとして今日に至っている（図86、87、88参照）。

看板におけるハングル専用運動はこれらの写真資料からみると徐々に変化し、1970年代「セマウル運動」と伴って定着したと考えられる。

1980年代から高度経済成長による外国商品の韓国進出によって外来語、外国語（主に英語）などがハングル表記とされた。看板における政策的なハングル使用は可能となったものの、その意味が正確に伝え得ないものが多く、統一されていない文字の表記や無分別な設置、必要以上の多い看板の数、などは看板の機能と役割が問われており、根の深い問題を抱えて今日に至るまでそれが続いているのである。

このような調査分析から、韓国における看板のハングル使用は、韓国独自の歴史と社会的な状況が作り出したものといえ、一つの看板が形成するもに、その店の店主の思想や個性が現われるだけではなく、その社会の歴史や文化が大きく作用していることがわかった。仁寺洞の場合は店それぞれの看板がデザイン的に非常に優れたものが多く見られたが、これらはい

ずれも短い時間に作り出されたものであって、また慶州は世界的な文化都市と言われているにも関わらず、看板そのものの形態や素材、表記する文字情報の正確さなど、看板全体の質の成長が要求されるのである。

都市環境における看板制作では、情報源としての言葉の選択や文字のデザインは商業的に自然な行為であると同時に、それをどのようにデザインしていくかによって、新たな文化を作り上げる原動力にもなるのであろう。

図89は韓国の都市における一般的な風景であるが、建物の表面の大部分が文字で構成されている。この写真にみられるように、看板を媒体とする広告活動に文字が看板デザインにおいていかに重要なデザイン要素であるかが感じ取られる。従って、看板における文字は、文字がもつ意味が明確に伝えられる情報伝達の機能とその情報がビジュアル的にいかに美しいかが重要視されるのである。

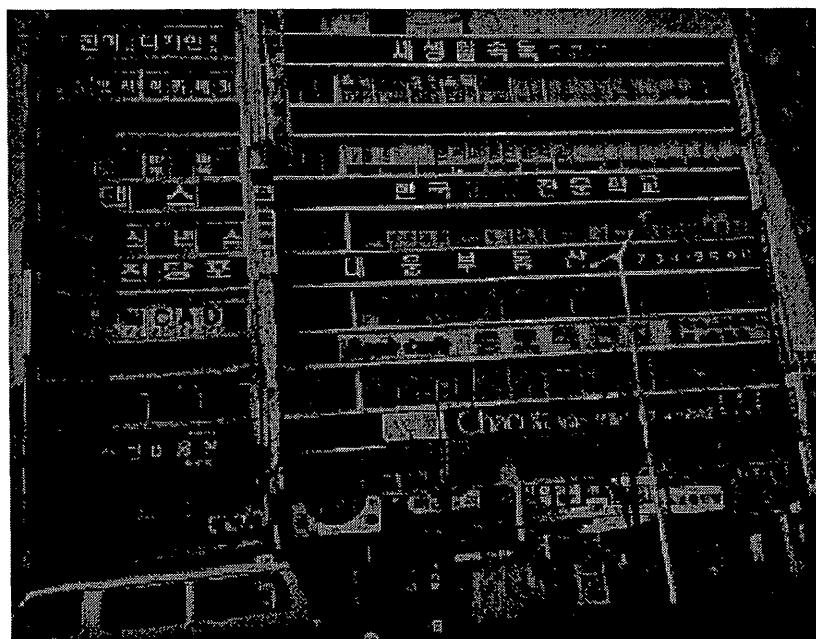


図89 ソウル中心街の商業建築物の看板

文字を中心とした看板広告は街全体が文字で構成されてるように思われるほど、このような風景は韓国の都市の中での一般的なものであって、商店と看板、看板と文字との関係が問われている。

5-5. 総 結

看板の機能で最も重要視されるのは、限られているスペースに商店名や商品名、サービス内容など様々な情報をより正確に明示することであろう。

韓国では看板によって情報を与えるうえで古くから漢字に依存してきたが、1960年代から本格的に推進された「ハングル専用運動」や「ハングル醇化運動」によって今日のようなハングル表記看板が形成された。ハングル政策によってそれまでの漢字の商店名を、そのままハングル表記に書き直すことになり、看板の漢字熟語の「ハングル音読みの看板」はその意味が正確に伝えられないものが多くなった。また、漢字の看板では商店の正面以外の場所にハングル看板が掛けられていて、一つの商店にそれぞれ異なるデザインの看板が混在してしまう結果となっていることがわかった。また、ハングルのみの看板には商店名に「詩的な表現」を使い、商店の性格を一つのイメージとして伝えようとすることが多く、そのため、多くの文字が使われているにもかかわらず、それだけではその商店の情報が不足するため、さらに文字を書き加える必要性が生じている。

今日の看板を特徴づけるハングルは1945年日本からの解放とともに民族のアイデンティティを高める重要な要素なり、それは「看板のハングル化」という大きな軸を形成した。しかし、漢字や外来語のハングル表記はその意味が正確に伝え得ないことで、看板の機能や役割が喪失しているだけではなく、都市環境においても大きな阻害要因となっていることが明かである。韓国の文化は長い間漢字文化であり、言語の70%が漢字から構成されていたといわれている。これらの漢字語は韓国語として表記され音声言語として定着していた。しかし、看板に現われている漢字語の構成はそれがハングルと表記されることによって、音声言語として役割を十分果たせるとは言い難い。フランスの言語社会学者「ソシュール」は、「言語とは特定な音声で意味が連合されていて、意味の伝達ができなければ言語として役

割を果たすことができないと」言う。ハングルは「表音文字」であることから、漢字の組み合わせでつくられて、ハングルで表わしている看板はその文字は読めるが、それが視覚伝達効果、このような文字は辞書にも書かれていないことで、看板の内容の本当の意味を知るには非常に難しいことがしばしばある。

結 語

現在の看板というものは、できるだけ他の商店と差異化を計り、顧客に商店名覚えさせることを目的とする場合が多い。しかし、個々の看板の形態とは別に看板が集まって形成されると都市景観の問題、或いは環境の問題となり、その地域を大きく印象づけるものとなる。

韓国における看板の大きな特徴は早くから「文字看板」を主として形成され、変化、発展してきたことである。文献上では高麗時代から看板に漢字が使われてきたが、その文字表記は朝鮮時代を経て今日に至るまで、社会的変化に大きく影響され、時代別に大きな特徴を表わしてきた。

高麗時代の看板に関する最も早い記録である『高麗図經』(1123年)には「王城本無坊市 推自廣化門至府及館 皆爲長廊間 榜木坊門 曰永通、曰廣德、曰興善、曰通商、曰存信、曰資養、曰孝義、曰行遜...」(2卷3都邑坊市条)とあり、坊門には永通、廣徳、興善、通商・存信・資養・孝義などの内容の看板が設置されていたと述べられている。これらの看板は全て2文字であって、商業とは直接関係のない儒教的思想や経営信条などを主に表していた。

朝鮮王朝時代に入ってからは、官設商店や六矣塵を始め、基本的に一つの店には一種の商品を販売することと、市場の常設商店は両班に対し御用的性格を持ち、その規模や売っている品物によって「塵」、「店」、「房」、「局」、「家」など、それぞれ異なる言葉を表わした。

このように朝鮮時代の看板には主に売っている商品の名が商店名となっていたが、看板と言う言葉は統一されておらず、「榜木」、「額」、「懸板」など多様な言葉で表わしていた。これらの言葉が持つ意味の関連性や一般的な建物標識との区別のため、伝統的な看板を「商業懸板」と定義することにした。

朝鮮時代末期からは身分制度の崩壊や日本による植民地政策が本格化さ

れていくにつれ、ハングル教育とその使用の重要性が高まってきた。それまで看板文字は主に漢字で表記されたが、この時期は漢字だけではなく、ハングル、ひらかな、カタカナ、アルファベットなど様々な文字が各々混じって使われるなど、植民地政策による社会的な状況を現わした。書かれている文字の内容は、主に売っている商品の種類や商号を表わしていたが、それだけではなく、商品の品質の説明や店の住所、電話番号、店主の名前、ロゴマーク、商標、絵など様々な情報が書き込まれるようになった。

1945年、解放と共に日本式の看板は「ハングル専用運動」によって撤去され、中国の看板を除いたすべて漢字表記の看板はハングル表記に書き直された。これらのハングル政策は「看板のハングル化」という大きな軸を形成したが、表音文字である諸問題点を抱えながら、80年代からはハングルのみの「詩的な表現」を看板に用いて、商店名を一つのイメージとして与えようとする新たな現象を生み今日に至っている。

最後に本研究の成果として次の内容が明かになった。

- 1) 韓国の看板には高麗時代から「文字表記」をしてきた。
- 2) その文字は社会的文化的状況に大きく影響され、漢字から、日本語、ハングルなどに至っている。
- 3) 看板に書かれていた文字の内容は時代によって変化し、各々の時代の価値観や社会的な影響が反映されていた。
- 4) 現在の韓国の看板は日本の植民地時代にその基礎が形成され、また「看板」という用語もこの時代に日本から移入されたものである。
- 5) 看板のデザインを決定する要素としては看板の形態、色彩、書かれる文字、設置される場所など様々であるが、漢字のハングル表記は情報伝達において限界をもたらしている。

韓国における看板の歴史的意味は、看板そのものが各々時代の社会的な状況を文化的な特性を反映するものとして、看板を通して各々時代の社会

広告活動の断面が読み取れることである。広告活動のために媒体となった文字が個人の選択によるものでありながらも、社会的状況と生活文化というものは個人の表現活動に大きく影響し、全体としての特徴を表わし、一つの文化として形成されてきた。従って、韓国における看板文化はそれぞれの時代に敏感に反応しながら変化してきて、特に看板文字の変遷は、韓国ならではの社会的文化的特徴が読み取れる重要な要素であった。

21世紀、アジアを中心とした国際化に向けて、韓国の看板がどのように変容していくかは注目されるものであり、まだ、どのような看板文化を造りあげていくべきかは今後の課題でもある。

注

- 1) 扁額 第2章の2-5.1参照
- 2) 懸板 同上
- 3) 柱聯 第2章の2-5.2参照
- 4) 『朝鮮人の商業』、(朝鮮総督府、調査資料第21、1925、全426^冊-ジ)、
この中では植民地時代の韓国人商店の看板105点、およそ23種の業種が調査されている。本書は、朝鮮総督府が韓国における従来の商業慣習を調査することを目的として行った調査をまとめたもので、商業都市及び店舗、商人の種類及び性質、商業取引慣習など様々な商業行為を報告している。
- 5) 仁寺洞はソウルの最も中心地として主に、古本屋、骨董品屋、毛筆屋、焼物屋、紙屋、喫茶店、ギャラリーがある文化、芸術、歴史性のある商店街である。
- 6) 『三国史記』、朝鮮民主主義人民共和国科学院、218、1958
- 7) カンマンギル：韓国商業の歴史、教授教養国史総書、27、1974
- 8) 鮎貝房之進：雜巧、姓氏巧及族制巧・市塵巧、朝鮮印刷株式会社、261、1937
- 9) 朝鮮民主主義人民共和国科学院：三国史記、316、1958
- 10) 『都市計画史概論』 ユンチョンソプ、文運堂、47、1996
- 11) 『高麗史節要』 卷1太朝 己猶 2年条、笠井出版社、1960
- 12) 「朝鮮時代漢陽市街の行廊建築に関する研究」、金裕聖、延世大大学院
建築工学科、28、1986
- 13) 『高麗図經』、亞細亞文化社、1972
高麗図經は1123年に徐競が中国の使臣として高麗に来て約1ヵ月間滞在しながらみた当時の首都である開京の事情を集めて中国で著述した本である。
- 14) 新漢和辞典、渡部末吾、大修館、468、1980
- 15) 『韓国のすべて』、韓国観光公社、24、1995
- 16) 李朝時代はほぼすべての制度を高麗の例に沿って定め、特に首都の建

設においては多くの制度を継承したことが見られる。『太宗実録』の卷15、太宗10年正月乙未条には市場の設置において昔の首都の制度を模倣したという記録がある。

- 17) 前掲5) 30、1986
- 18) 『都市計画市』、ウンチョンソプ、文運堂、53、1996
- 19) 『朝鮮人の商業』、調査資料第21、朝鮮総督府、15、1925
- 20) 『韓国商業の歴史』、カンマンギル、教養国史総書、1974
- 21) 『都市計画史概論』ウンチョンソプ、文運堂、1996
- 23) 昔の人形劇、仮面劇、などの演劇や綱渡り、逆とんぼなどの演出者や出演者を指した言葉。
- 24) 『都市計画市』ウンチョンソプ、文運堂、64、1996
- 25) 『韓国商業の歴史』、カンマンギル、教養国史総書、37、1974
- 26) 同上、46
- 27) 同上、54
- 28) 同上、64
- 29) 『朝鮮王朝実録』正宗13年正月

行廊とは主要な建築物（宮殿では殿閣、寺院では本堂、住宅では本体建物）を囲いこみ、保護しながら外部に対して空間を限定する壙の役割をすると同時に、ある機能をもった「内部空間」をもつ建築物である。この建物の用途が宮殿や官庁などでは格の高い用途として使われる時は行閣と呼ばれる。漢陽の大路辺に設置された市場行廊は都市的規模として応用されたものと思われる。形態上の行廊は壙の役割をする長い形態となり、そのためソウル市街の行廊は「長廊」あるいは「長屋」とも呼ばれた。都市的スケールで大路を外部とすると、小路を包括する市民の住居空間は内部と言える。従って大路は外部から市民の住居地域である内部に入る門（中路、小路ら）の両側にある壙のように空間限定の要素の役割をする建築物がこの市場行廊である。（金裕聖：朝鮮時代漢陽市街の行廊建築に関する研究、延世大大学院・建築工学科、43、1986）

- 30) 『都市計画史』、ウンチョンソプ、文運堂、101—103、1996
- 31) 『朝鮮王朝実録』、正宗13年正月、国史編纂委員会、深求堂、1973
- 32) 『市場の社会史』、ジョンスンモ、ウジン出版、33、1992より引用

33) 公廊は朝鮮時代の行廊の別称であって、政府が設置し、公的に認定された商店という意味である。公廊は李朝時代以降に生じた言葉であると思われる。

34) 六矣塵とは、李朝時代に鐘路を中心に設置された六種の大市塵を称する言葉である。主に、立塵（絹布販売）、錦布塵、錦紬塵、紙塵、苧布塵、内外魚物塵など6種類であるが時代によって商品種類や市塵の数が増えることもあった。

35) 『雜巧、姓氏巧及族制巧・市塵巧』、鮎貝房之進：朝鮮印刷株式会社、261、1937

37) 『市場の社会史』、ジョンスンモ、ウンジョン出版、33、1992

38) 『また、戻って来て見たソウル-ソウル1951年冬』、成斗慶写真集、1994

39) Carlo Rossetti、ソウル学研究所：Coreae Coreani 、森と木、112-115, 1996

40) 『韓国とその周辺国家-100年前韓国のすべて』、イサベラ・ビショップ、図書出版サルリム、54~55, 1994

41) 石碑：高宗8年（1871）に立てた斥和碑を称じる。「西洋の蕃人が侵入するに戦わないというのは和親のことである。和親を主張するのは国を売ることである。（洋夷侵犯 非戦則和 主和売国）」

42) 『漢韓大字典』、李相段、民衆書林、502、1966

43) 『漢韓大字典』、李相段、民衆書林、284、1966（堂号：堂宇の号、別号）

44) 同上、492

45) 同上、618

46) 『広辞苑』、新村 出編、岩波書店、591、1991

47) 『漢韓大字典』、李相段、民衆書林、637、1966

48) 「朝鮮時代後期の商業資本の発達」、カンマンギル、高麗大学校出版部、40、1973

49) 『客主』、キムジュヨン、創作と批評社、7冊の中2冊、7、1982

50) 『朝鮮人の商業』、調査資料第21、朝鮮総督府、185、1925

51) 「商業懸板」とは、韓国の伝統的な看板として、伝統的な建物標識である扁額、懸板とは異なって商業のために使われてきた商業標識である。「高麗時代から李朝時代末期までの韓国の看板に関する歴史的研究」、デザイ

ン学研究、71、1998に元づいている。

52) 「近・現代韓国と外国の都市計画史比較研究」、ウンジョンソプ、72、1987

53) 『都市計画史概論』、ウンジョンソプ、文運堂、108、1996

54) 同上、142

55) 「韓国都市研究」、ホンヨンヒ、15、慶北大学

56) ユンシヨンソフ「近・現代韓国と外国の都市計画史比較研究」

57) 『朝鮮現勢便』、朝鮮總督府、昭和14年、p176

58) 『ソウル市内日帝遺産踏査記』、ジョンウンヒョン、図書出版ハンウル、296、1987

59) 『都市計画史概論』、ウンジョンソプ、文運堂、121、1996

60) 『韓国100年1876年～』、東亜日報社、218、1978

61) 同上

62) 同上

63) 『写真から見る近代韓国上・下』、ソムンダン、1986
『写真から見る朝鮮時代・生活と風俗（続）』、ソムンダン、1987
『民族の写真集 1.2』ソムンダン、154、1994

64) 「看板デザインの分析研究—ソウルの繁華街を中心に」、イゼウォン、梨花女子大学教育大学院、41、1976

65) 「看板デザインに関する研究—文字・色彩を中心に」、ウンヒヨンジュン、梨花女子大学産業美術大学院、26、1985

66) 『ハングルの文字表現』キンジンピョン、ミジンサ、69、1996

67) 『韓国現代国語政策研究』、フォマンギル：国学資料院、141、1994

<図・表の出典目録>

図1 著者撮影

図2 「朝鮮時代漢陽市街の行廊建築に関する研究」、金裕聖、延世大大学院建築工学科、30、1986

図3 『都市計画史概論』、ウンチョンソプ、文運堂、51、1996

図4 歴史新聞編纂委員会：歴史新聞、四季節、17、1996

図5 『都市計画史概論』ウンチョンソプ、文運堂、68、1996

図6 同上、70

図7 京城府史二巻、496を同上の72より再引用

図8 「朝鮮時代漢陽市街の行廊建築に関する研究」、金裕聖、延世大大学院建築工学科、83、1986

図9 同上、101

図10 同上、96

図11 『Coreae Coreani』、Carlo Rossetti、ソウル学研究所、森と木、61、1996

図12 朝鮮時代末期および、朝鮮総督府時代に日本人向けに日本で製作された絵葉書、筆者所蔵

図13 同上、筆者所蔵

図14 同上、筆者所蔵

図15 同上、筆者所蔵

図16 『Coreae Coreani』、Carlo Rossetti、ソウル学研究所、森と木、66、1996

図17 『韓国商業の歴史』、カンマンギル教養国史総書、84、1974

図18 朝鮮時代末期の商店

図19 『日本民衆の歴史と朝鮮』、久保井規夫、株式会社明石書店、32、1996

図20 『韓国の美11、山水画』、中央日報社、27、1994

図21 同上、21

図22 『写真に見る韓国100年（1876～）』、東亜日報、1976

図23 『韓国の美21、檀園金弘道』、中央日報社、148、1994

図24 同上

図25 「韓国の商業」国立民俗博物館、105、1994

図26 『韓国の美19、檀園金弘道（部分）』、中央日報社、8、1994

図27 『韓国の美19、風俗画』、中央日報社、137、1994

図28 『韓国の美19、風俗画』、中央日報社、94、1994

図29 同上、161

図30 同上、142

図31 『京城府史』、一巻、湘南堂書店、401、1934

図32 筆者撮影、1996年

図33 筆者撮影、1996年

図34 国史編纂委員会、深求堂、1973

図35 『日本民衆の歴史と朝鮮』、久保井規夫、株式会社明石書店、序論、1996

図36 「韓国の商業」国立民俗博物館、81、1994

図37 『韓国の風俗画集』、イソジ、ソムンダン、204、1998

図38 筆者所蔵

図39 『写真に見る韓国100年（1876～）』、東亜日報、816、1976

図40 『ソウル市内日帝遺産踏査記』、ジョンウンヒョン、図書出版ハンウル、296、1987

図41 ソウル市立博物館準備委員長である長氏所蔵の実物の看板の観察と写真撮影を許可してもらった。

図42 『写真に見る韓国100年（1876～）』、東亜日報、63、1976

図43 同上、198

図44 筆者所蔵

図45 『写真に見る韓国100年（1876～）』、東亜日報、218、1976

図46 『民族の写真集 1.2』ソムンダン、154、1994

図47 『朝鮮人の商業』、朝鮮総督府、126、1925

図48 「仁丹」看板が見られる清川の商店街

図49 屋根看板がみらる安城の商店街1930年代

図50 『Coreae Coreani』、Carlo Rossetti、ソウル学研究所、森と木、227、1996

図51 『民族の写真集 1.2』ソムンダン、154、1994

図52 『朝鮮人の商業』、朝鮮総督府、70、1925

図53 同上、310

図54 『民族の写真集 1.2』ソムンダン、1994

図55 『朝鮮人の商業』、朝鮮総督府、74、1925

図56 『民族の写真集 2』、ソムンダン、154、1994

図57 『朝鮮人の商業』、朝鮮総督府、278、1925

図58 同上、278

図59 同上、254

図60 同上、400

図61 同上、38

図62 同上、202

図63 同上、302

図64 同上、390

図65 同上、396

図66 同上、118

図67 同上、52

図68 同上、100

図69 同上、16

図70 同上、78

図71 <http://www.inv.co.jp/~fumo/korea02.html>

図72 筆者撮影

図73 『また、戻って来て見たソウル-ソウル1951年冬』、成斗慶写真集
1994

図74 KOREA 20 年、京郷新聞社、258、1968

図75 同上、383

図76 筆者撮影

図77 同上

図78 同上

図79 同上

図80 同上

図81 同上

図82 同上

図83 同上

図84 同上

図85 同上

図86 同上

図87 同上

図88 『通文館本房秘話』、李謙魯、民学会、255、1987

図89 同上、111

＜表の目録＞

表1 研究の構成と概要表

表2 韓国の年代表

表3 伝統的な建物標識の比較表

表4 『朝鮮人の商業』における看板デザイン要素の分析統計表

表5 『朝鮮人の商業』における業業種とその数

表6 韓国の看板の時代別比較表

表7 看板文字の表記方式（書く順番）

表8 看板文字の種類

表9 看板のレタリングのタイプ

表10 看板の文字の数

<参考文献>

■論文

- ・「看板デザインの分析研究－ソウル」、イゼオン、梨花女子大学教育大学院、1976
- ・「看板デザインに関する研究－文字・色彩を中心に」、ウンヒョンジョン、梨花女子大学産業美術大学院、1984
- ・「ソウル仁寺洞一帯の商業機能の浸透課程に対する都市生態学的解析」、ウンジョンソク・ソンヒヨン、1986
- ・「朝鮮時代漢陽市街の行廊建築に関する研究」、金裕聖、1986
- ・「商業建築物の看板付着比による使用者の視覚感応に関する研究」、キムスンウク、仁荷大学大学院建築工学、1993
- ・「朝鮮時代漢陽の街路空間の構成と景観の特性に関する研究」、ミンギヨンテ、延世大学大学院建築工学科、1993
- ・「水道と通して見た都市空間の歴史性について－仁寺洞の重畠された体系の考察を中心に－」、ソヨンジュー、ソウル大学大学院建築学科、1993
- ・「ハングル書体の造形性に関する研究－板本古体と板本筆書体を中心に」、シンユンギル、中央大学社会開発大学院文化芸術学科、1993
- ・「開化期前後の漢陽の都市管理と施設の変化」、キムミンキヨン、延世大学大学院建築工学科、1995

■関連著書

- ・『朝鮮の市場経済』、朝鮮総督府、調査資料第二十七、1924
- ・『朝鮮人の商業』、朝鮮総督府、調査資料第二十一、1925
- ・『雜巧、姓氏及族制巧・市場巧』、鮎貝房之進、朝鮮印刷株式会社、1937
- ・『朝鮮現勢便』、朝鮮総督府、1939

- ・『KOREA : 20YEARS IN PICTURES』、京郷新聞社1968
- ・『朝鮮後期商業資本の発達』、カンマンギル高麗大学出版部、1973
- ・『韓国商業の歴史』、カンマンギル教養国史総書、1974
- ・『写真に見る韓国100年（1876～）』、東亜日報、1976
- ・『韓国人の思想と性格』、朝鮮総督府、韓国学研究所、1976
- ・『ソウル600年史』（巻1）、ソウル特別市史編纂委員会、1977
- ・『朝鮮時代の都市社会の研究』、孫禎睦、一志社、1982
- ・『客主1～7』、（7冊）クムジュヨン、創作と批評社、1982
- ・『伝統文化と西洋文化（1）』、人文科学研究所、成均館大学出版部、1985
- ・韓中日関係資料集『朝鮮王朝実録緯一』、檀国大学付設東洋学研究所、1986
- ・『写真から見る近代韓国上・下』、ソムンダン、1986
- ・『写真から見る朝鮮時代・生活と風俗・続』、ソムンダン、1987
- ・『韓国人の生活構造』、韓国人の家の話し、李圭泰、キリンヨン、1991
- ・『看板のはなし』、キムヨンベ、図書出版キハソ、1991
- ・『韓国の市場の商業史』、株式会社新世界百貨店、1992
- ・『市場の社会史』ジョンスンモ、ソジン出版、1992年
- ・『韓国貨幣の変遷』、国立民俗博物館、1993
- ・『ソウル600年－古宮の懸板－』、チェカンヨル、芸術の殿堂 1994
- ・『韓国の商業取り引き』、国立民族博物館、1994
- ・『また、戻って来て見たソウル-ソウル1951年冬』、成斗慶写真集、1994
- ・『民族の写真集 1.2』ソムンダン、1994
- ・『韓国とその周辺国家』-100年前韓国のすべて-、イサベラ・ビショップ、図書出版サルリム1994

- ・『韓国生活文化100年（1894～1994）』、ジョンワンギル他8人、図書出版、ジャンウォン、1995
- ・『韓屋の再発見』、（株）住宅文化社、1995
- ・『韓国人の生活と風俗』、民族問題研究所、アセア文化社、1995
- ・『朝鮮時代コミュニケーション研究』、金福壽他5名、韓国精神文化研究』1995
- ・『ソウル民俗大観』、11～13、（風水編、慣習編、宗教編）ソウル特別市、1996
- ・『韓国の市場1～4』（4冊）ジュヨンハ外2人、空間メディア、1996
- ・『コレア-コレアニ、Corea Coreani』、カルロ・ロティ、ソウル学研究所 森と木、1996
- ・『韓国廣告史』、申寅燮、ソボムソク共著、図書出版ナナム、1998

■日本の看板に関する資料

- ・「家蔵看板図譜」、杉浦三郎兵衛編、杉浦丘園、1940
- ・『ネオンサインと電気看板』、関重広、電気書院、1954
- ・『看板の意匠』、彰国社（建築写真文庫29）、1955
- ・「江戸の看板」、松宮三郎、東京看板工業協同組合、1959
- ・『日本の看板』、屋外廣告研究会編、マール社、1975
- ・『ビジュアルコミュニケーション』、藤沢英昭外3名ダウイット社1975
- ・『日本廣告デザイン史』、渡辺素丹、技報堂、1976
- ・『江戸看板図譜』、林美一、三樹書房、1977
- ・『江戸店舗図譜』、林美一、三樹書房、1978
- ・「岩手の看板展-忘れられた文化財が語る庶民の生活」、岩手博物館、1983
- ・『幕府・明治K A N B A N展』、日本テレビ放送網・読売新聞社、1984
- ・『北京の看板』天理大学天理教道友社共編、天理教道友社、1987

- ・「商人たちの心意氣－看板の歴史」、小山市立博物館、1988
- ・『なにわ看板考』、上田安写真集、創元社、1991
- ・「くらしに生きた看板の歴史特別展」、横浜市勤労福祉財団編、横浜市勤労福祉財団、1992
- ・『日本の広告』、申寅變編、図書出版ナナム、1993
- ・「江戸の看板文字のメッセージ企画展」、歴史民俗博物館、1993
- ・『日本傑作広告』、大伏肇、青蛙房、1994
- ・「看板にみる商人の心意氣」、松江市立松江郷土館、1994
- ・「江戸の看板広告の原点をたどって」、千葉県立上総博物館、1995
- ・『江戸商売絵字引－絵で見る江戸の商い』、高橋幹夫、1995
- ・『江戸歳時記巻』、国書刊行会、1996
- ・『日本屋外広告史』、谷峯藏、岩崎美術社、1989

■中国の看板に関する資料

- ・『満州看板從来』、堀越善博、日本国際観光局、1941
- ・『老北京店舗的招幌』、林岩黄庶生他4名、博文為社出版、1948
- ・『満州招牌考』、満州事情案内所編、第一書房、1982
- ・『中国の広告－その過去と現在』、申寅變編著、図書出版ナナム、1991
- ・『老北京城興老京人』、海峰出版社、1993
- ・『中国招幌』、1994
- ・『中国の顔』、李瑛俊、悦話堂美術文庫、1995

参考資料¹

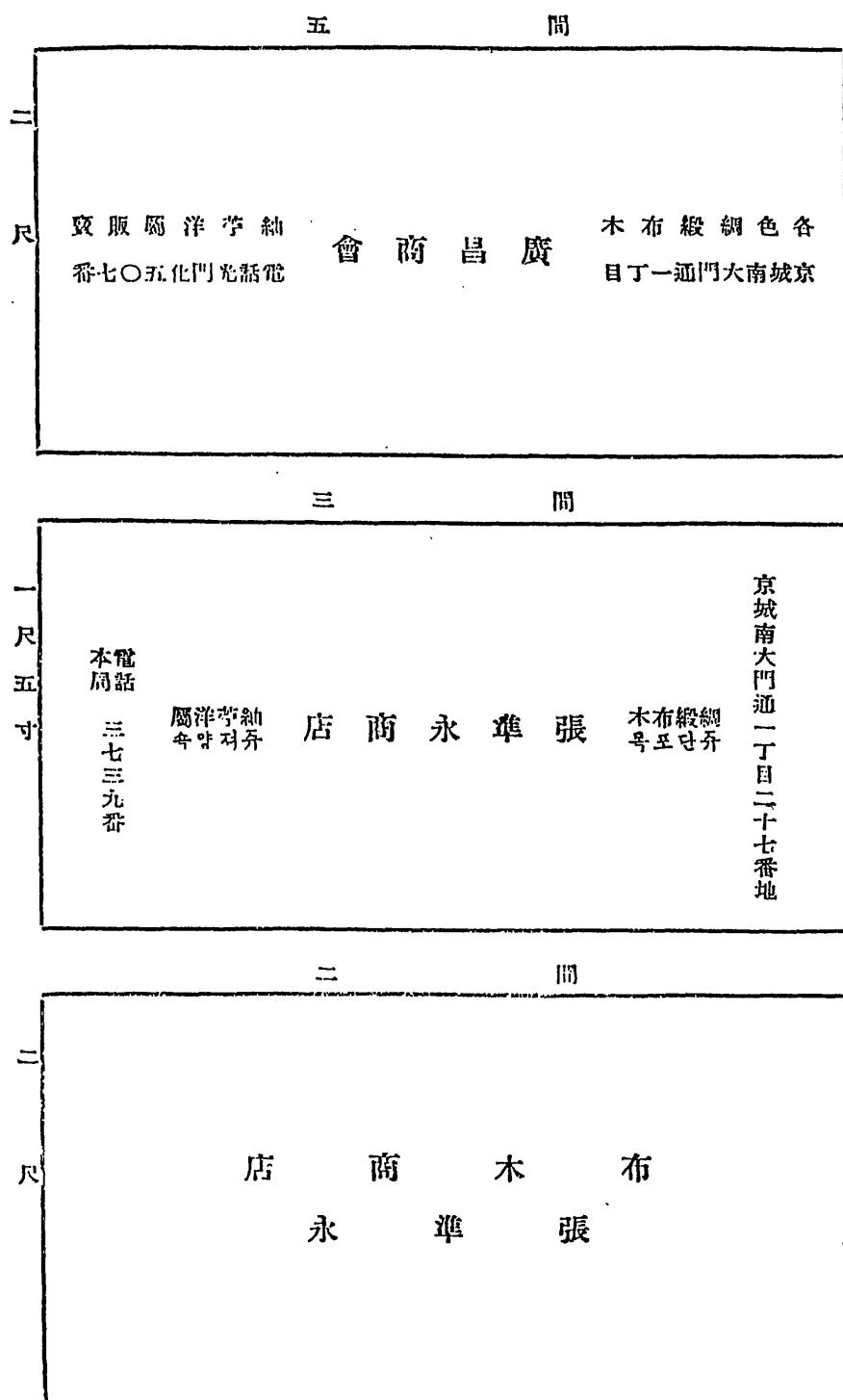
『朝鮮人の商業』による看板調査表、1925

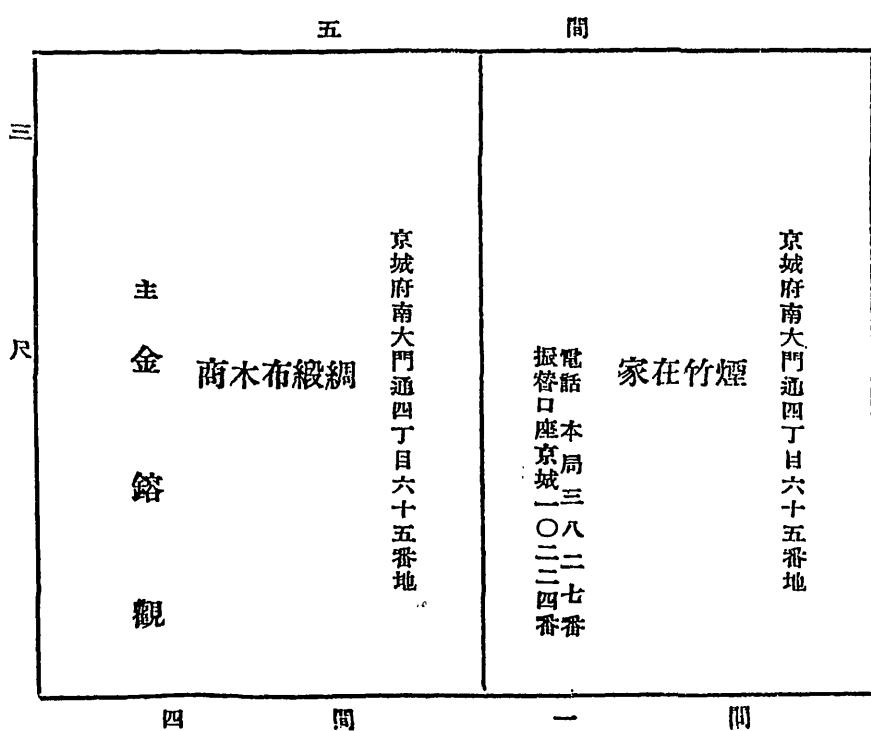
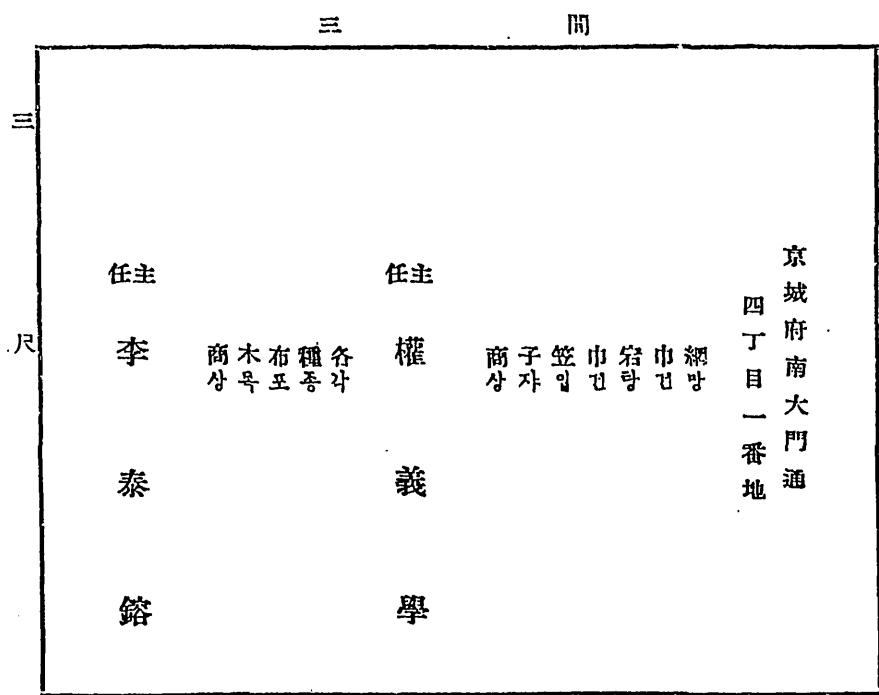
布木商

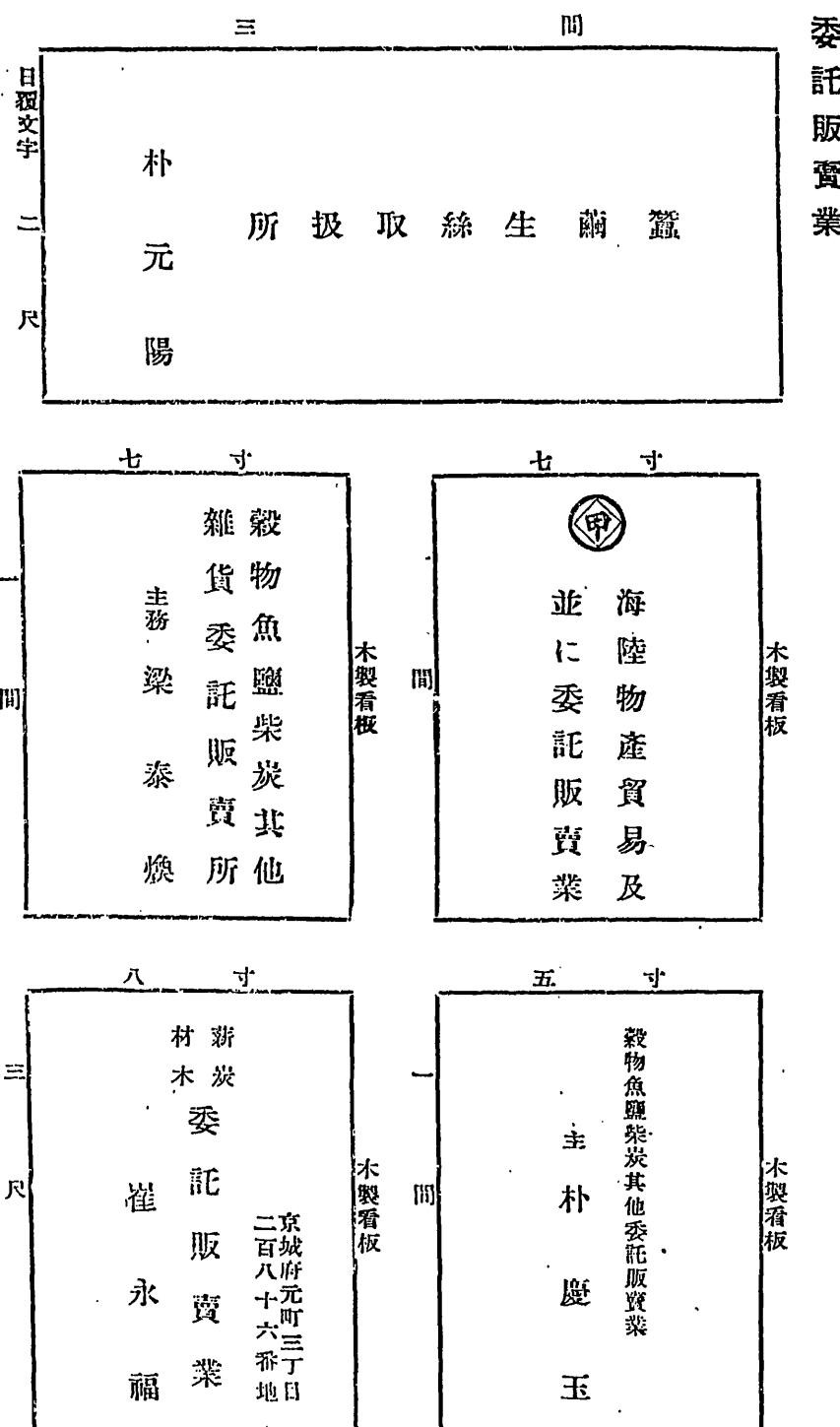
一尺五寸	部貨雜物毛 振替口座京城 一八三九番	部木布綢綱 京城府南大門通 一丁目百〇三番地
	電光化門 三三九五二 長六二二	共貿易株式會社
	九三二二五七 九三二二五七	社部賣物毛
	九三二二五七 九三二二五七	社部賣物毛
	九三二二五七 九三二二五七	社部賣物毛

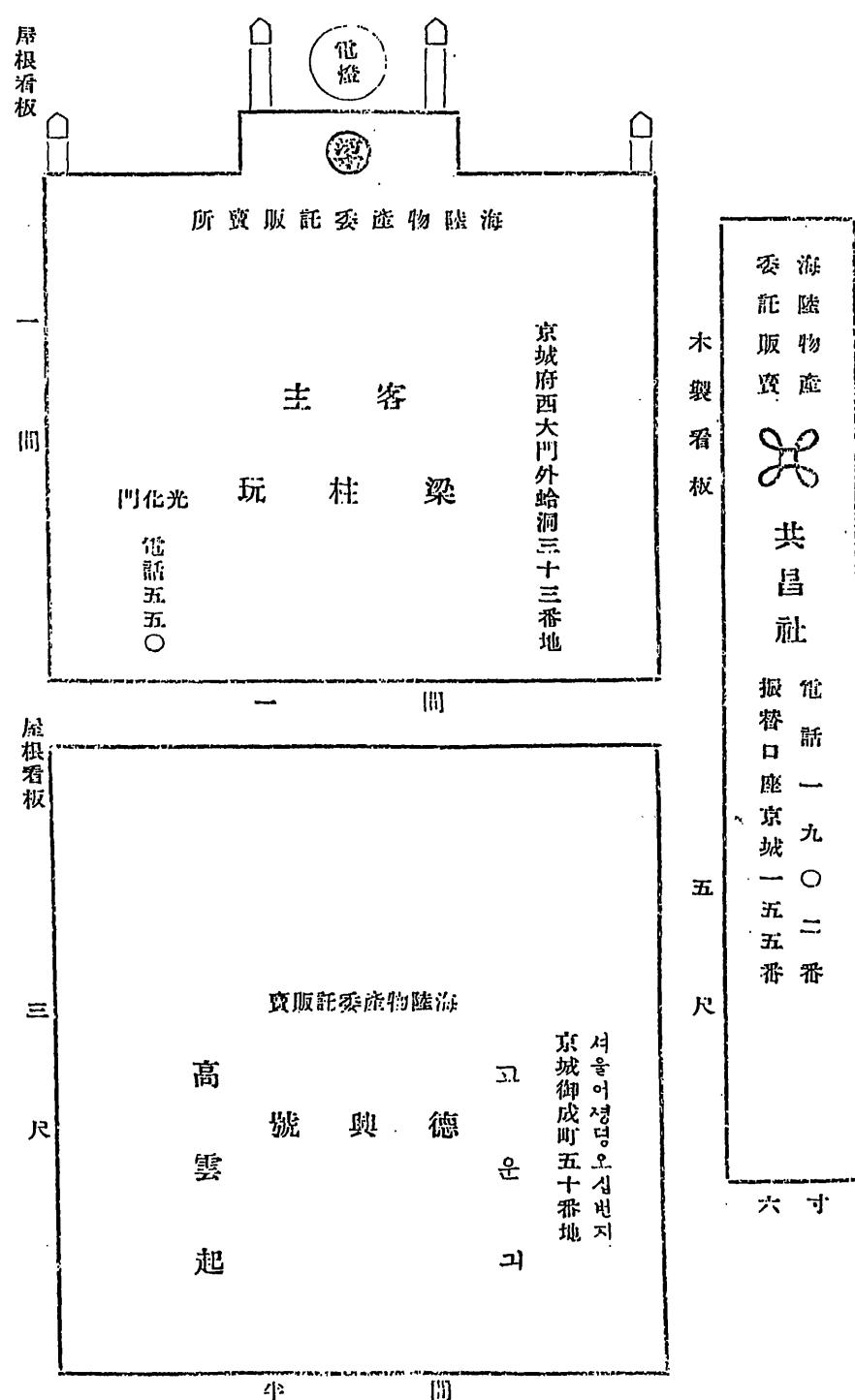
三
間
三
尺
京城府清進洞九十二番地
綾羅綢緞木商
電話光化門
振替口座
番番

二 尺
布 木 商
金 淳 悅 商 主









喪式及結婚用具賣業

六間

主 金 永 學
電話光化門二二七八番地
應酬價廉件每塵物貰號昌永具諸喪婚式舊新

京城鐘路三丁目二十八番地

三間

主 申 高 店 物 貰 社 應 普
鐘路二丁目二十五番地
申高店物貰社應普各種新舊新舊
泓永 所備具物貰造新舊新舊
均寬

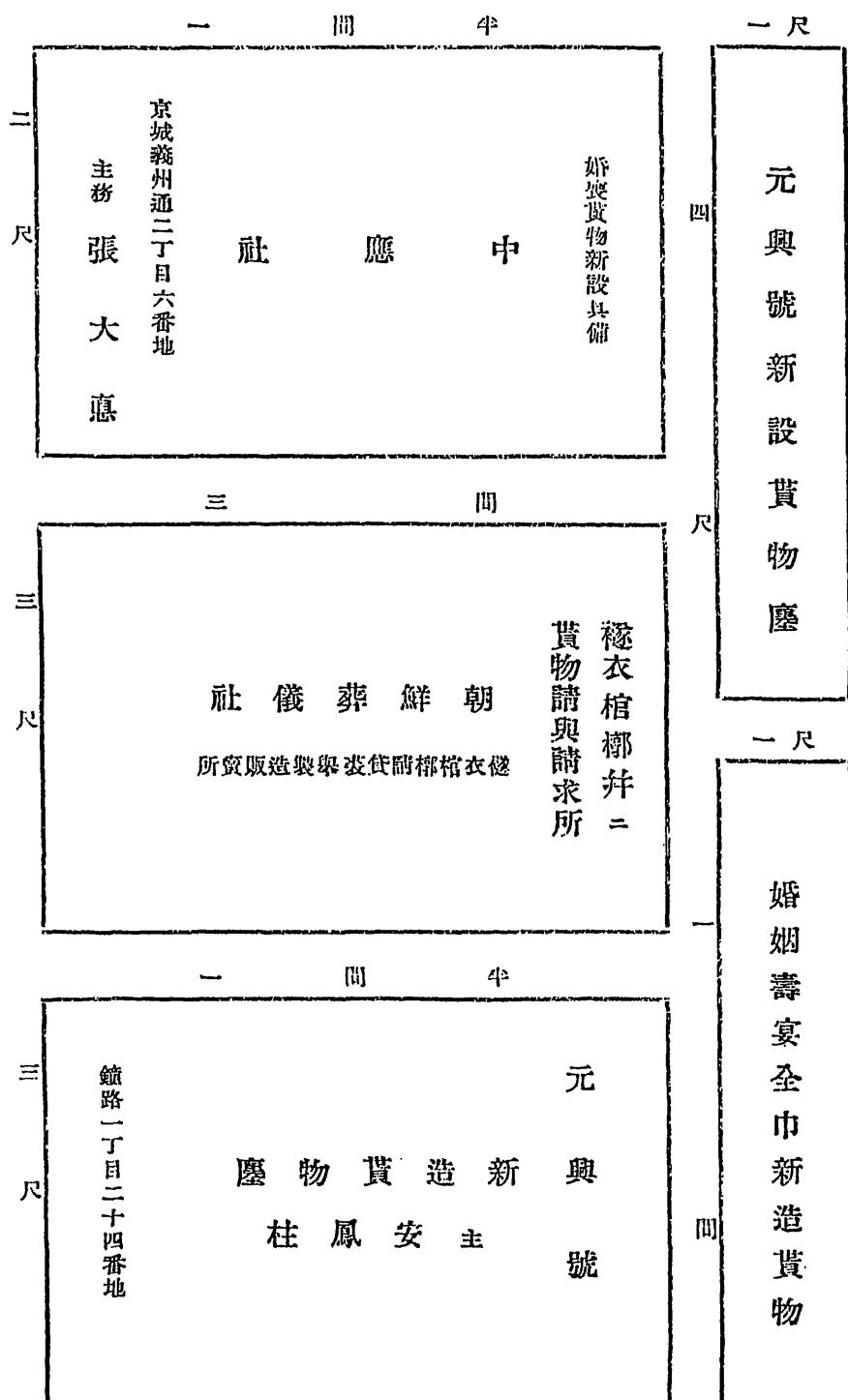
二間

主 金 永 學
電話光化門二二七八番地
應酬價廉件每塵物貰號昌永具諸喪婚式舊新

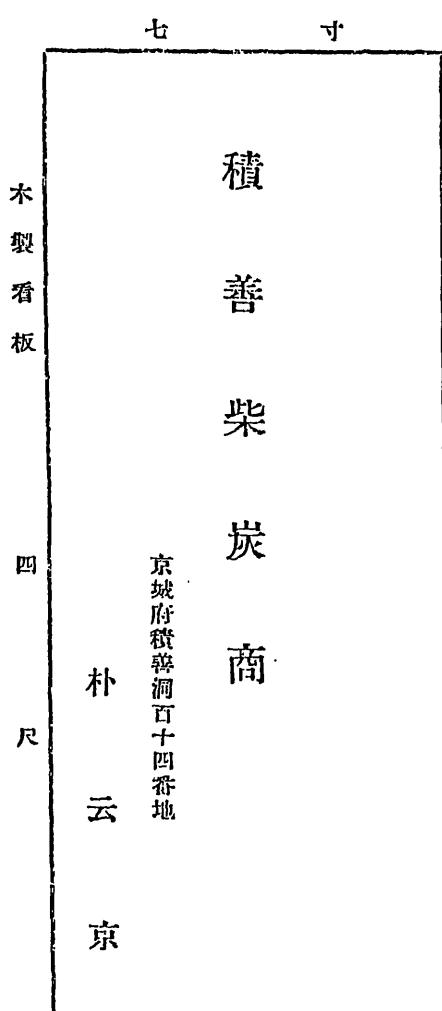
寺佛具品製新等椅文幕軍器陣舖具諸喪初具諸婚姻

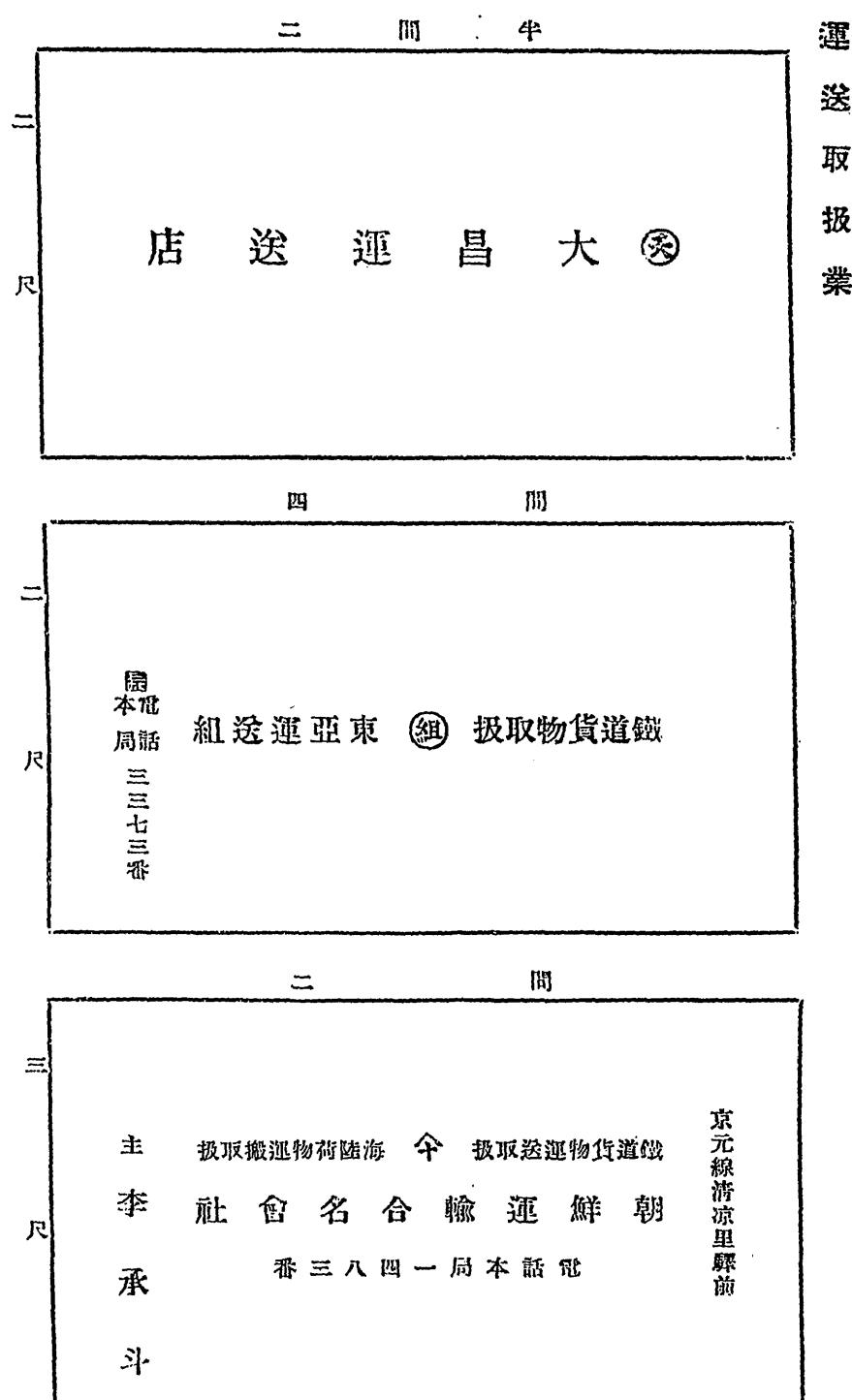
東興貲物屋

完東張地番七十三目丁三路鐘城京



薪炭販賣業





製藥並に販賣業

二間半

三尺

振電話
替金町
口長
座本
京城周
一三百
〇八〇一
九番番地

房 莖 莓 輝 弼 趙

蓼莘唐草藥材直輸入都散賣

三間

二尺

鋪 本 房 藥 堂 生 濟

番八二七一局本話電

四間半

二尺

朴宜卿乾材藥局藥材乾卿宜朴

三間

三尺

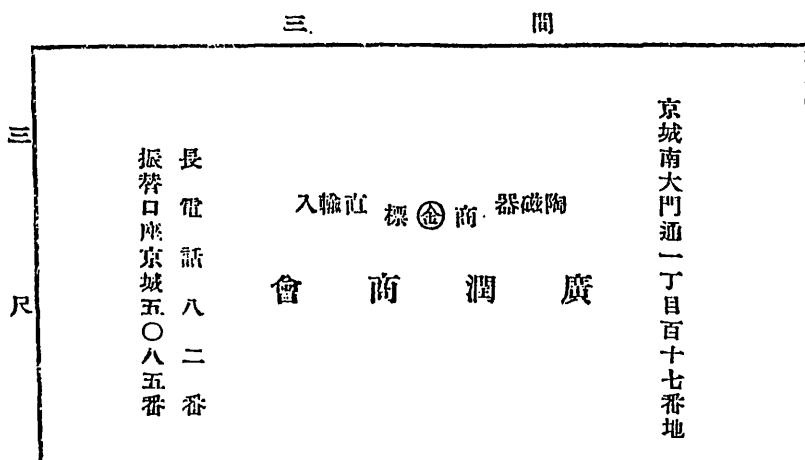
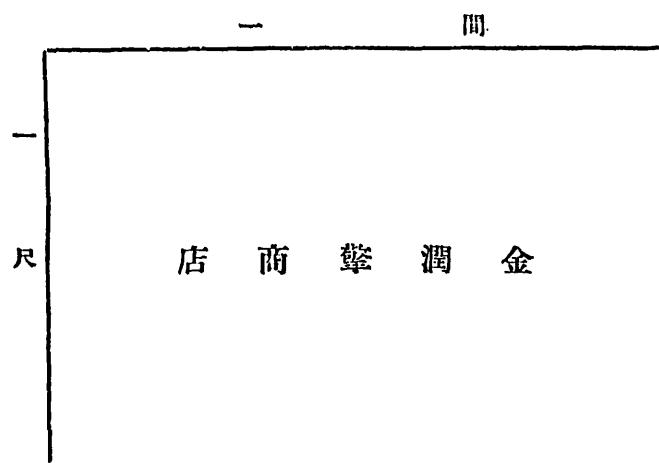
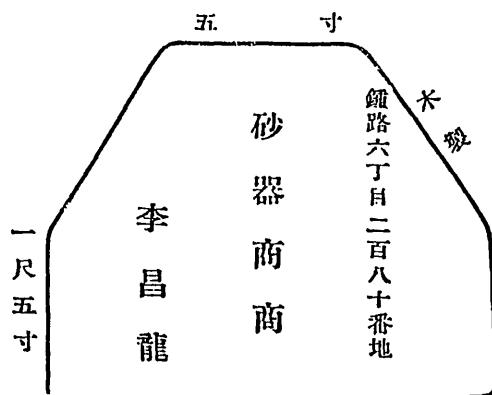
局 藥 材 乾 弼 聖 崔

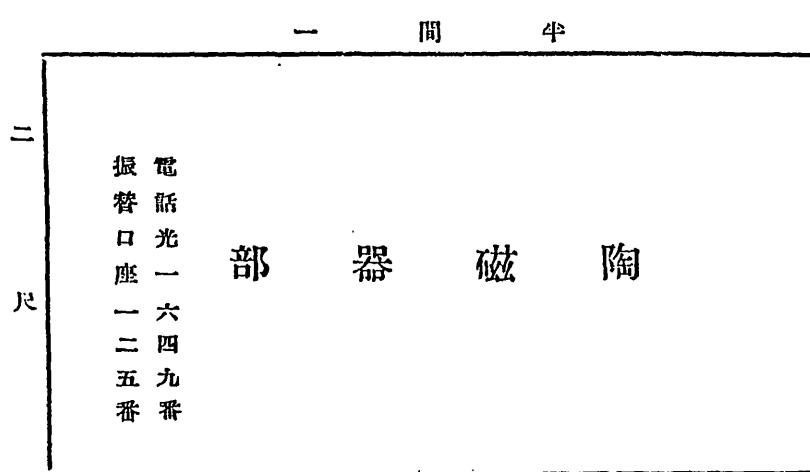
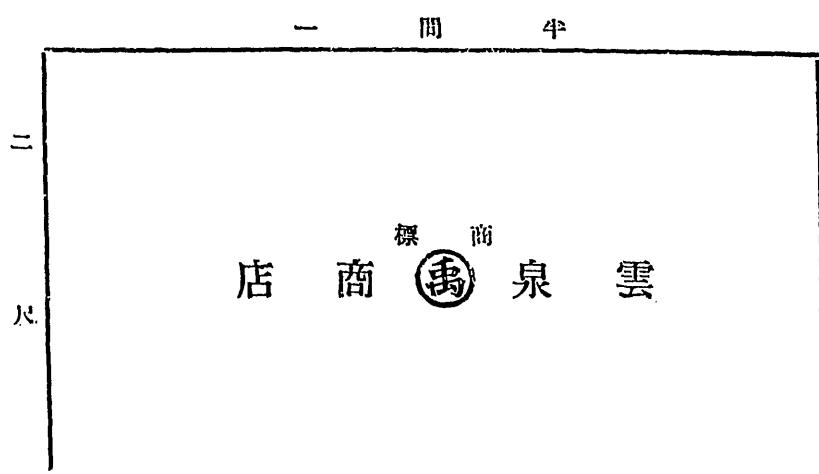
地番三十三目丁一通門大南

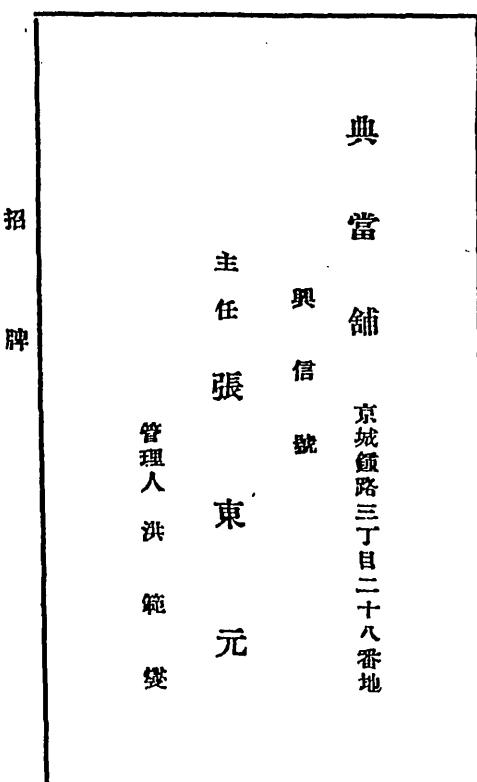
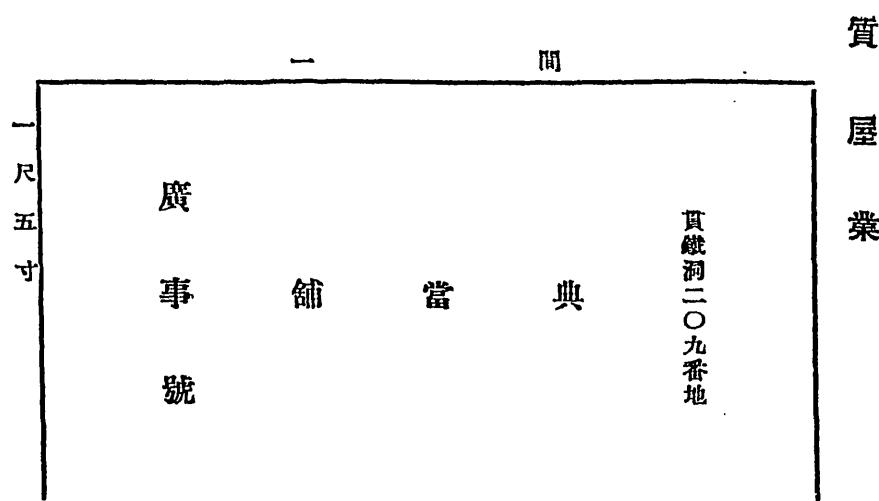
宿屋及飲食店業

<p>紙額 一尺五寸</p> <p>三 尺</p> <p>館 風 清</p> <p>鮮 朝 料 理</p>	<p>一 尺</p> <p>步 行 號 行 號</p> <p>京 城 府 竹 添 町 一 丁 目 三 十 八 番 地</p> <p>主 金 敬 天</p> <p>主 雇 営 業</p>
<p>一 間 半</p> <p>二 尺</p> <p>館 松 清</p> <p>主 鄭 相 玉</p> <p>冷 麵 湯 飯 酒 食 具 全</p>	<p>六 寸</p> <p>床 食 家</p> <p>二 尺 五 寸</p>
<p>一 尺</p> <p>東 一 堂</p> <p>屋 食 濟 經</p> <p>옥 식濟경</p>	<p>三 尺</p> <p>床 食 家</p> <p>二 尺 五 寸</p> <p>一 器 十 錢</p> <p>비 립 밥 一 器 十 錢</p>

陶磁器販賣業







仲介業

土地家屋賣買所
仲介所
價
所
典執行委託販賣所
(麻野籬ニ記シアリ)

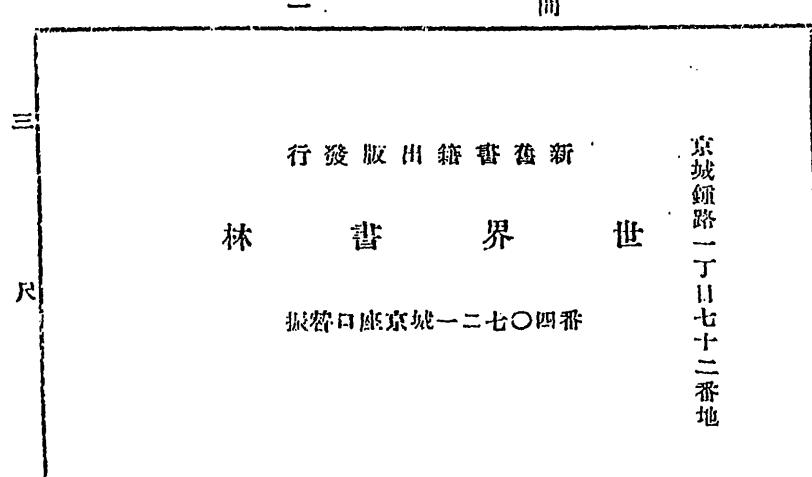
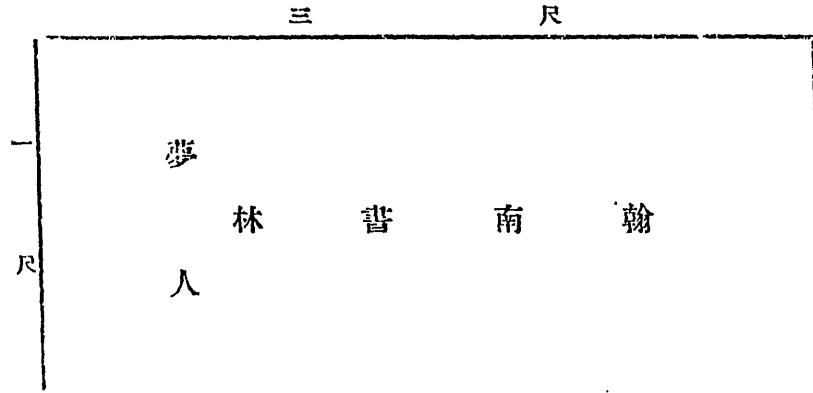
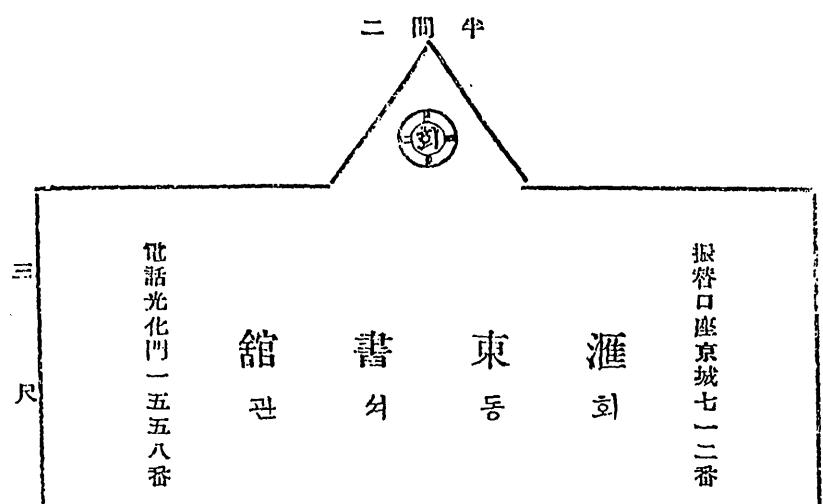
家 土地
賣 買 紹介營業所
木製看板

大正十三年四月
日

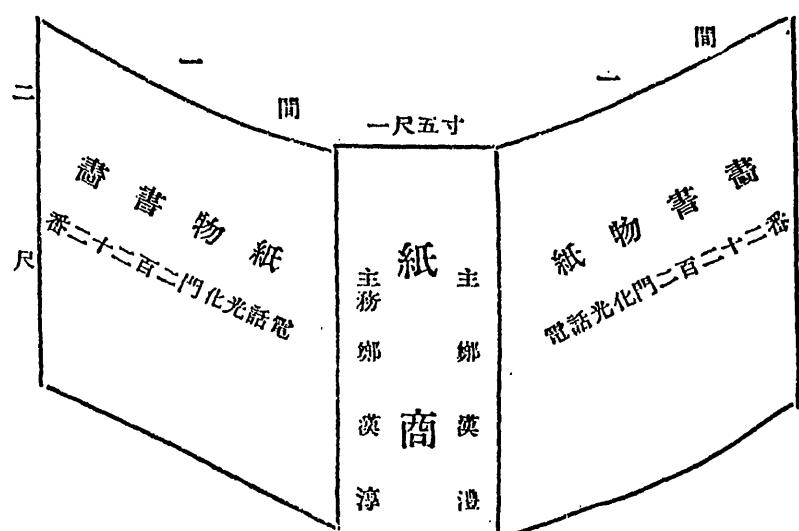
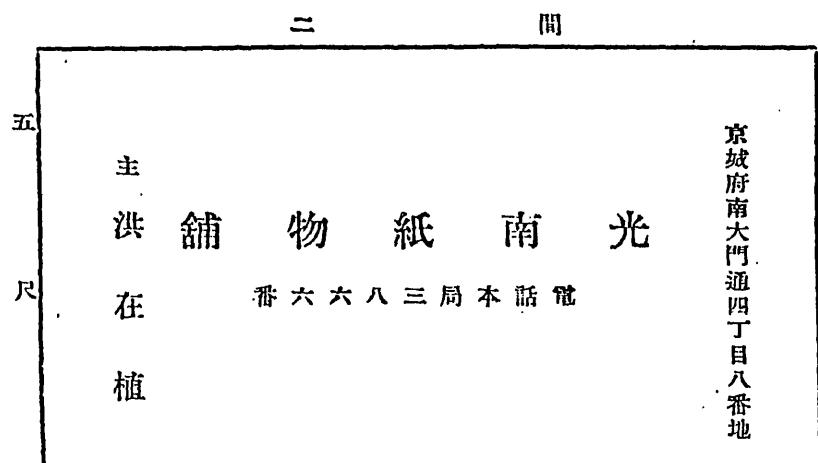
福 德 房

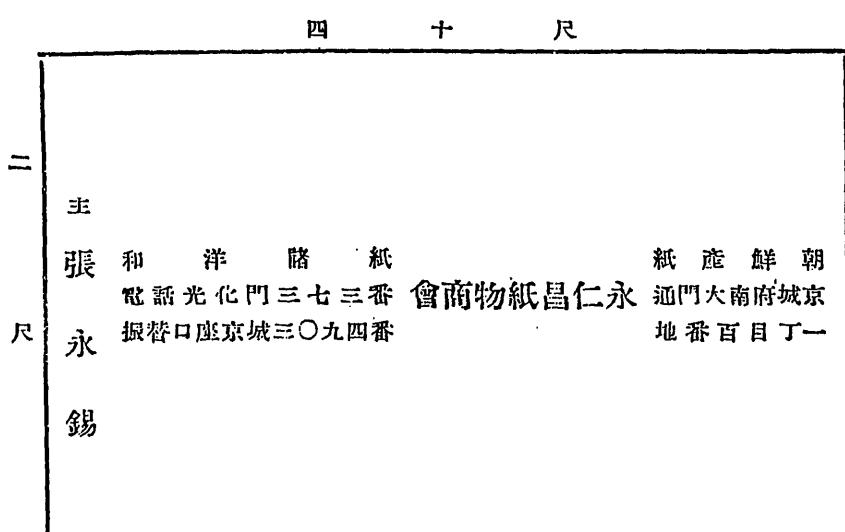
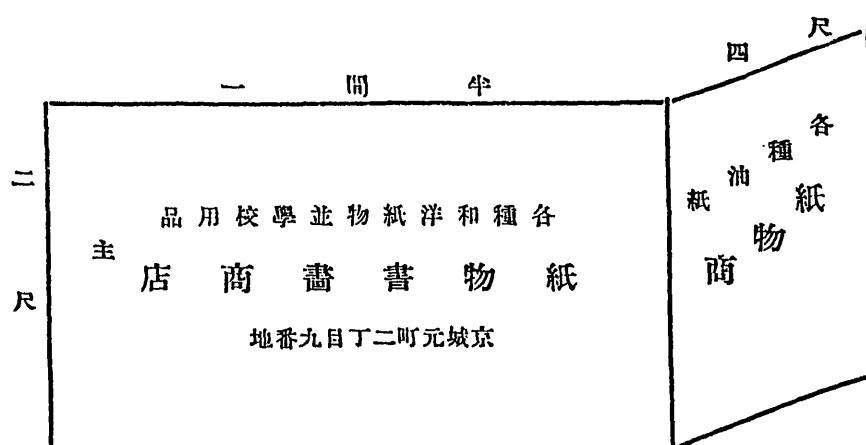
(木綿製野籬ニ記シアリ)

書籍販賣業



紙類販賣業





冠 物 販 賣 業



間

二 尺

主 金 元 營 房 笠 統
務 朴 浩 慎 鎭

寄 朝 朝 一 邑 仁 朝

京城鐘路四丁目三十四番地

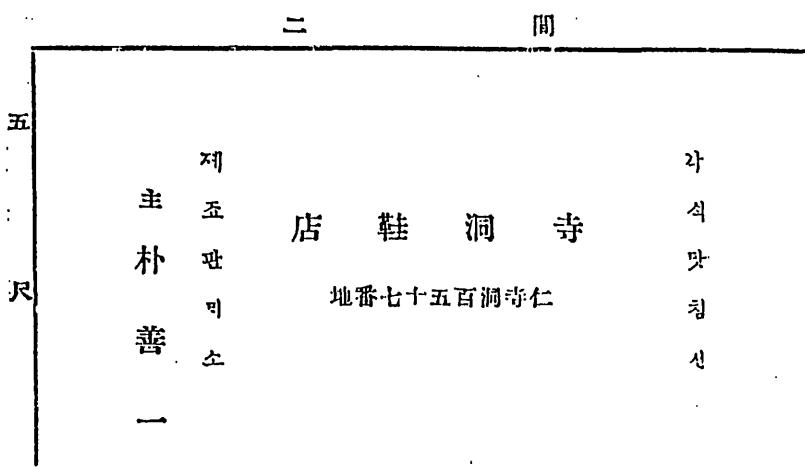
四 間

二 尺

主 朴 振 賀 口 座 京 城 七 十 四 番
務 朴 浩 慎 鎭

京城南大門通四丁目七十三番地

履物販賣業



問四間
各種勳製造散賣所
主金殷柱
南大門通二丁目三番地

三間半
主金股柱
道화무고종각화양
店約特司公順同商賣散都靴무고種各靴洋
점약특사공순동상매산

毛筆及毛皮類販賣業

京城南大門通四丁目七十二番地

劉鳳元

商賣散都品料材竹筆毛

二尺五寸

間

京城南大門通四丁目七十二番地

劉鳳元

店商浩明洪
賣版物節尾馬

三尺

鑑乘町一丁目百三十四番地

一

間

店商賣販縫裁二並物毛種各
肆鍾金主地番十三百二目丁二通門大南府城京

一尺五寸

二間

木製品販賣業

廣興木物商店

各式木器新舊種類

二尺

一間

永成號機械廠

三尺

主蔡浩植

京城仁寺洞六十三番地

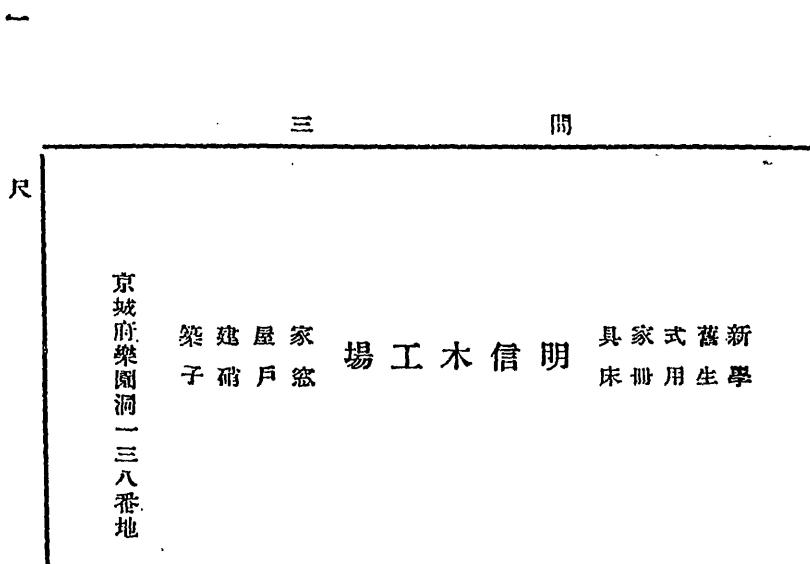
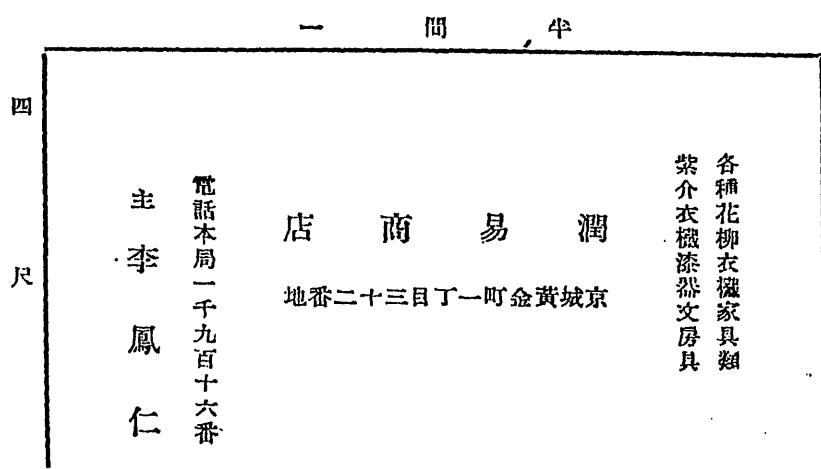
一間半

廣進號新式木製物造所

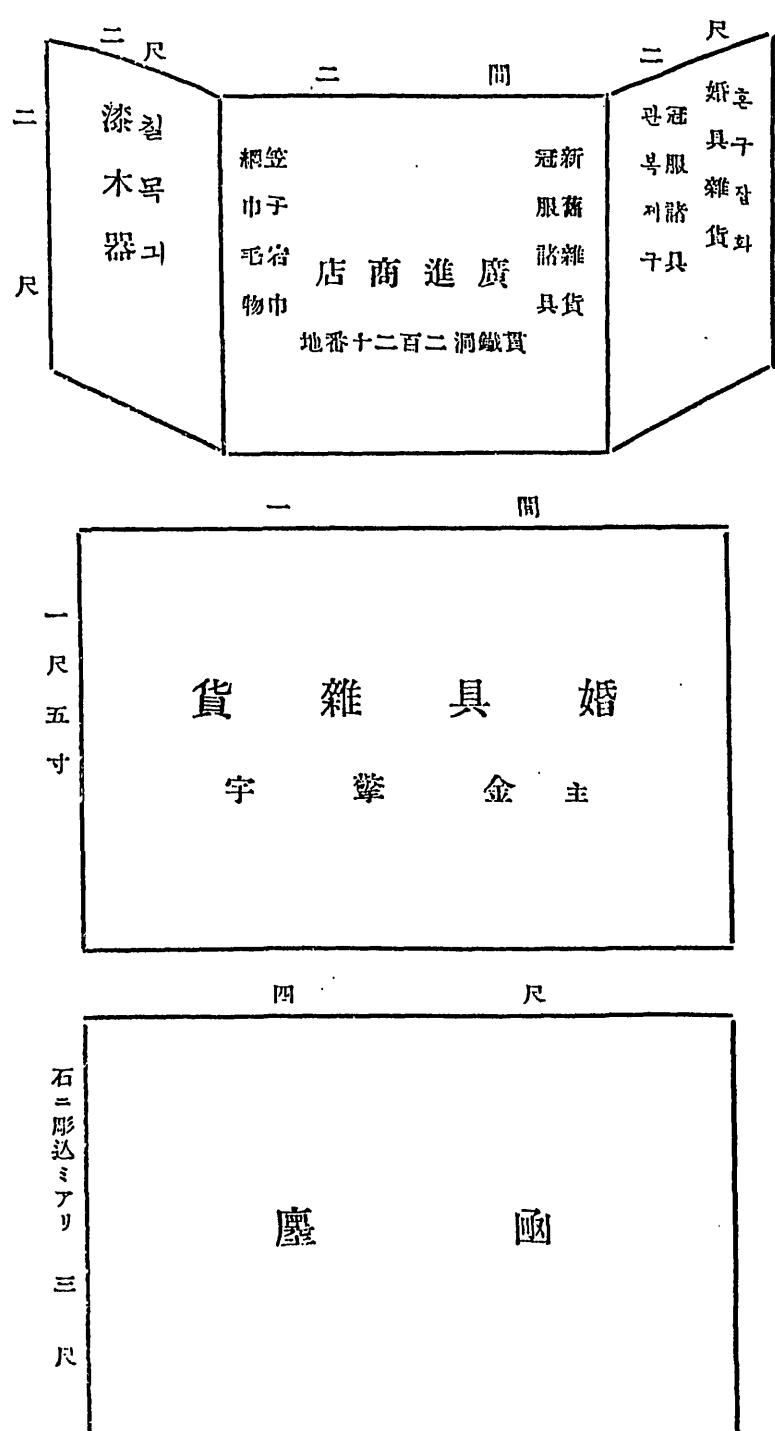
京城西大門町二丁目八十七番地

一尺

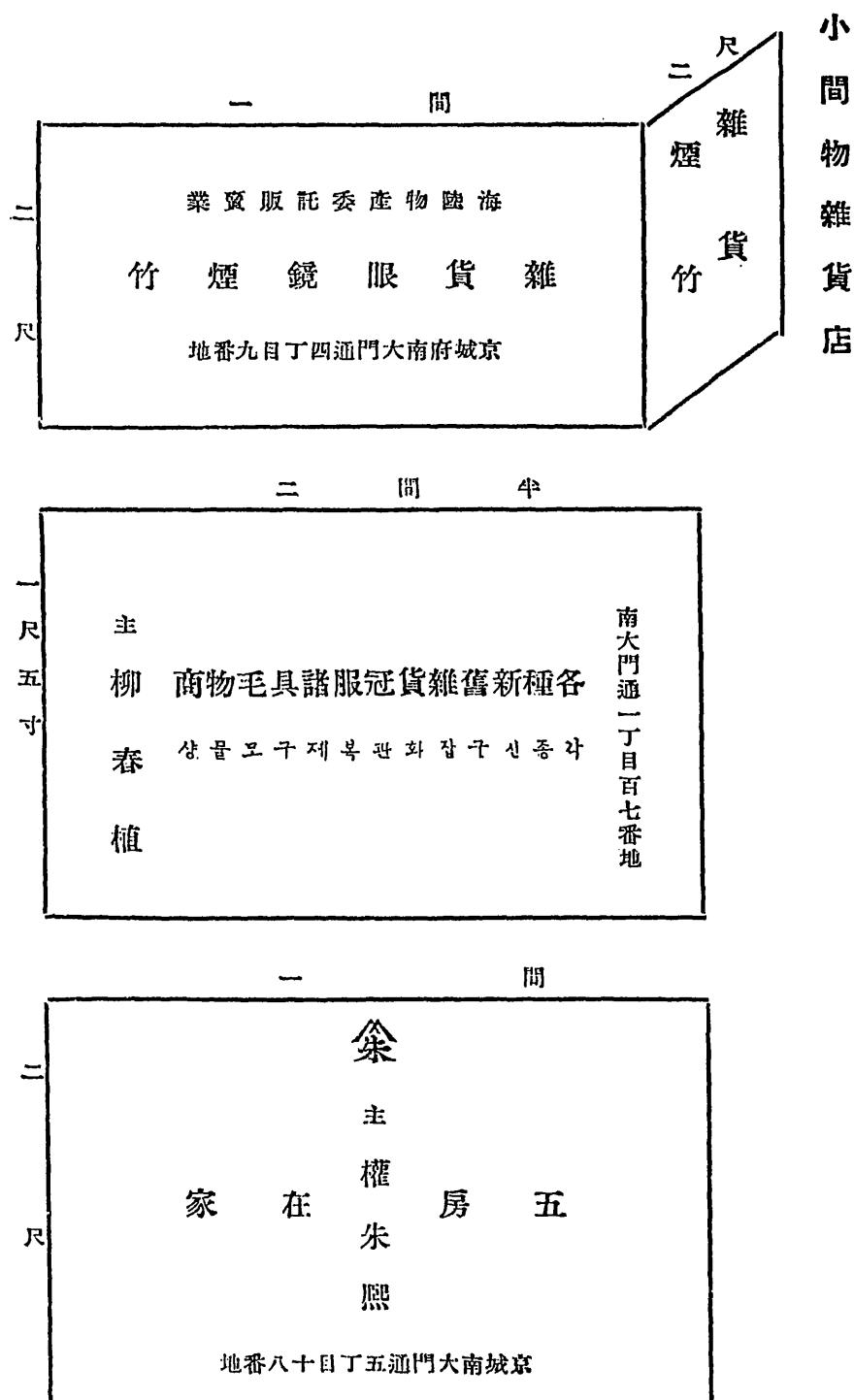
主金奉圭

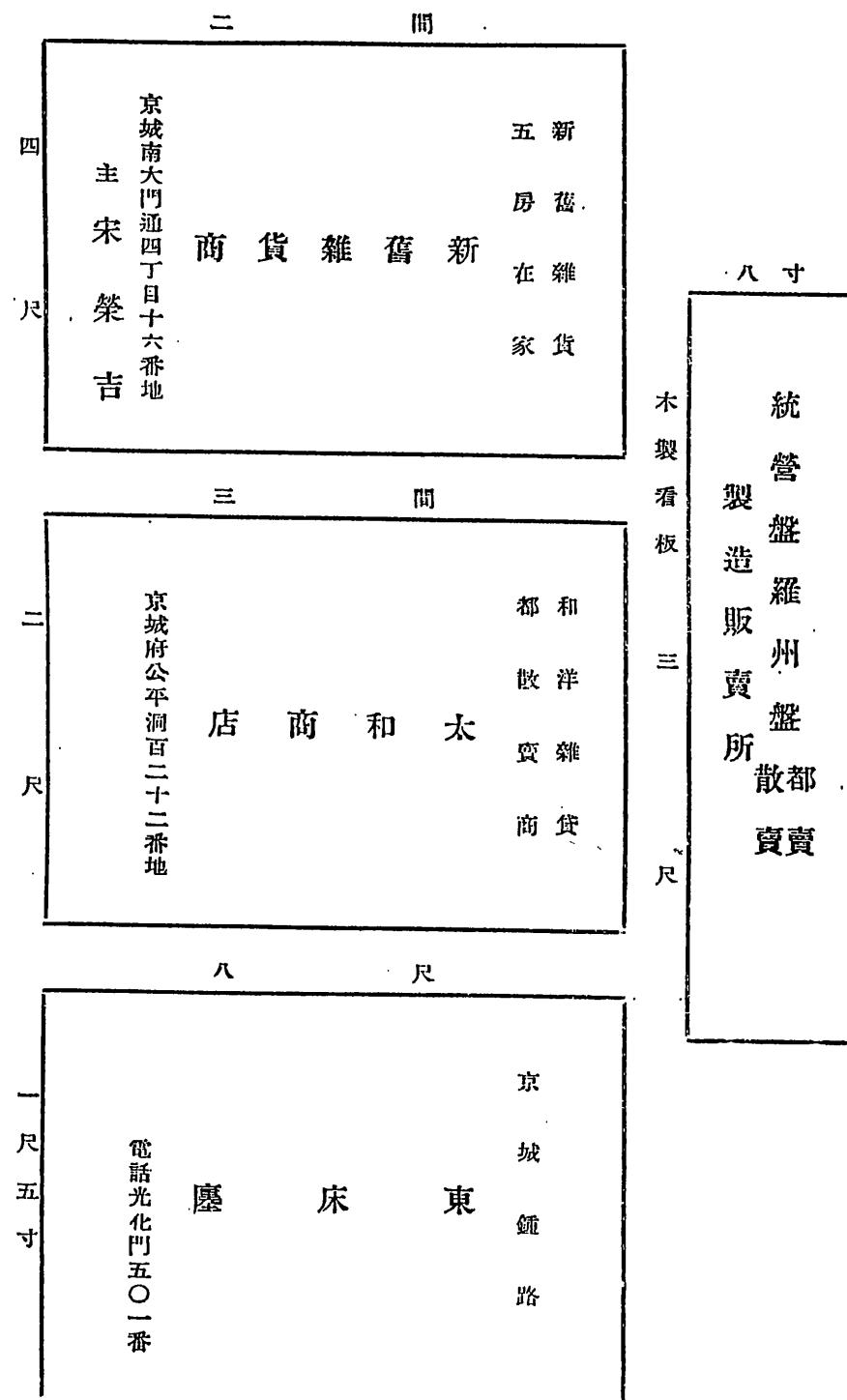


結婚用具販賣業

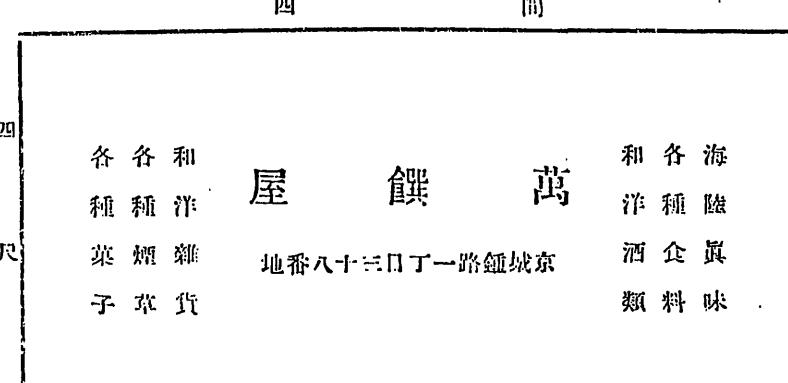
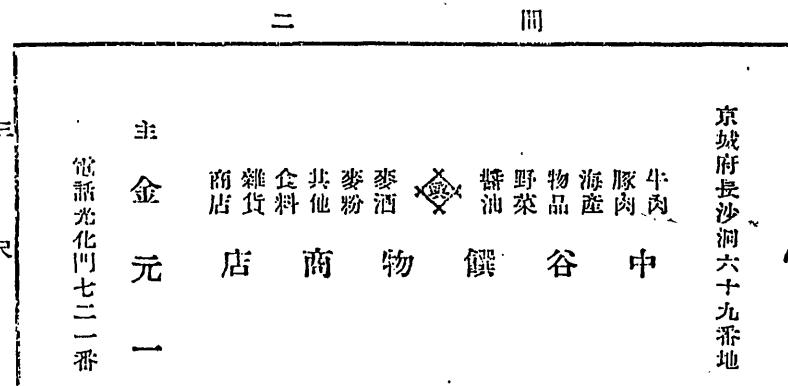
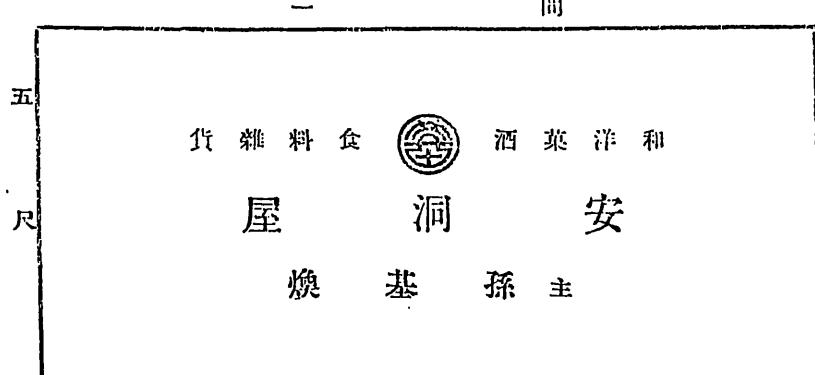
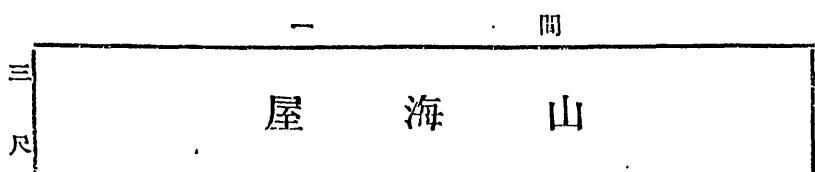


五間	
二尺	各五新新婚 色色婦郎函 七八唐元冠所 号孫衫服入
	瑞麟網笠各婚雜新 洞巾子種具 三十月宕染一 番子巾料式貨舊 地
二間半	
一尺五寸	主賣販造製被長二並服冠具婚轎步及轎人四種各 林地番八十二目丁二通門大南府城京換引金代方地 泰 完
四間	
一尺	賣散都種各器木漆衫禮服冠貨雜具婚男女 京城鐘路

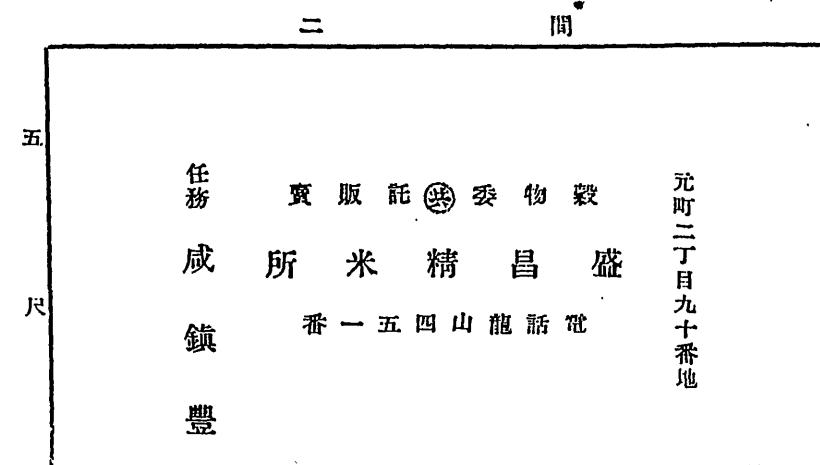
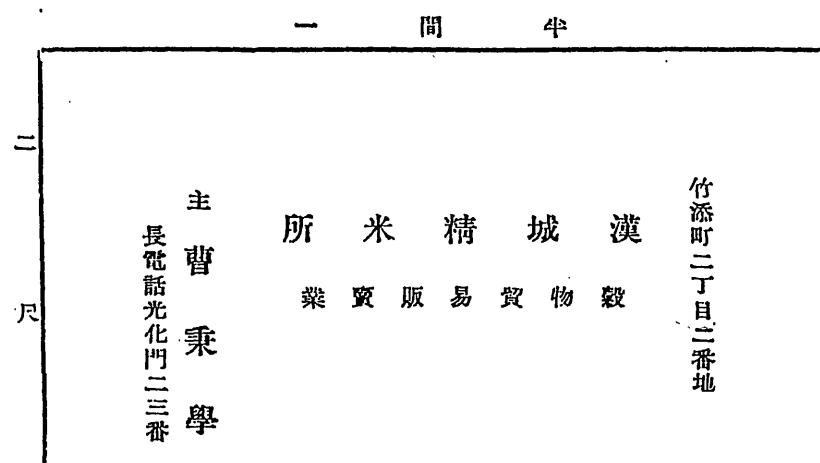
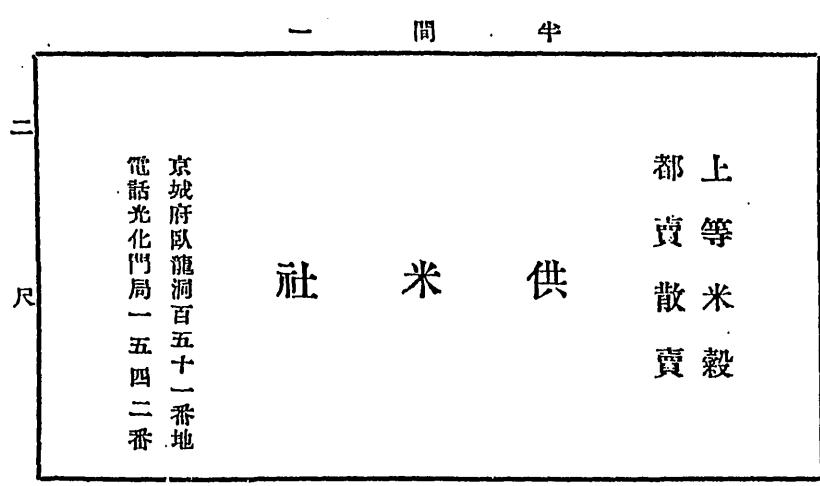




食
料
雜
貨
店



穀物販賣及精米業



金銀細工製品造販賣業

二間

主商賣散都造製品工細術美銀金
申會商信光
地番二十八目丁二通平太
光均

間

三間

製金
造銀
美術
賣品
李聖基
金銀商
地番四目一丁
萊莊

尺

四間

主賣散都物珮真及品造製術美銀金
申泰和
地番三目二十
路鍾

尺

参考資料2

『朝鮮人の商業』による商業用語表、1925

朝 漢	鮮 諺	國 語
去來、興成	거리、홍성	取引
興販	장人	商賣
商人	홍판	貿易すること
買錢賣貴	상인	商賣人
本錢、本金	무전매구	廉く買つて置いて高く賣ること
物主	매불은홍청	賣急がずして高價を待つこと
放賣、發賣	분전、분금、잇전	資本、元金
판다	풀주	資本主
판다	방매、발매	販賣
판다	산다	買ふ
판다	판다	賣る

乃終	始作	殷盛	落價	高騰	刀踊	別般	等分	反庫	物件	商品	看品、看色、標株、標木	見樣	
니종	시작	은성	락가	고등	도용	별반	등분	반고	거릉	불건	상품	간풀, 간식, 표말, 표목	견양
終り	開始	繁盛	物價の下落	騰貴	特別	等級	在庫品調べ	商品	品物	風袋	內容	見本	雛形

今番	리두	近日
來頭	일간	暫時
日間	집간	商店
曹間	염�、염포、시진	店の表の入口
店肆、店舗、市座	마포	店舗を設けて營業する商人
露門	보부장	行商
坐賣	좌고	商品を馬に積み行商する者
裸負商	천문	商品を船に積み行商する者
行廊、廊下	말장소	街衢にてなす營業
假家	배장소	貸家
街業	가업	行廊
賈家	가가	行廊
行廊、廊下	횡랑、랑하	行廊
賈家	체가、체집	行廊

家盤	가전	屋敷	마을
都家	도가	商人集會所、共同倉庫	고, 부고, 창고
庫、府庫、倉庫	고, 부고, 창고	倉	당, 당시
場、場市	당, 당시	市場	반수
班首	반수	負商又は裸商の長	부수
使喚、使役、使喚軍	부수, 부역, 부수군	商家の使用人	부수
首使喚	부수	番頭	부수
差人、差人軍	차인, 차인군	商業使用人	부수
閱入軍	열입군	商店へ客を呼入れる者	부수
掌財	장지	金錢の出納を取扱ふ者	부수
布木壓	포목전	吳服店	부수
白木壓	백목전	太物屋	부수
鐵物壓	철물전	金物屋	부수
銀房	은방	銀細工品販賣店	부수

船價	선가
財物	자물
阿睹物	아도물, 돈
金錢	금전
銀錢	은전
銅錢	동전
白銅錢	백동전
紙錢、紙貨	지전, 지화
登記、書留	등기, 서류
小包郵便	쇼포우편
郵票	우표
印紙	인지
郵便局	우편국
電報紙	전보지
船賃	선가
財產	자물
金錢	금전
銀貨	은전
銅貨	동전
白銅貨	백동전
紙幣	지전
書留	지화
小包郵便	우편우편
郵便切手	우표
收入印紙	인지
郵便局	우편국
電報賴信紙	전보지

保證人、證人	보증
保證人を立てるこ	립보
金を貸すこと	채금, 빚주다
金を借りること	채득
還すこと	환납
代物辨済	대물辨濟
質入	질
質物	질물
抵當	抵當
保管	保管
依頼	의탁
委託	부탁
尙當	당면
典物	典물
典執	典執
典當	典當
管守	관수
咐囑	여당
相換	상환

銀麪壓	차던
冊肆	온국전
木器壓	척사
長木壓、杖木壓	목기전
乾材局、藥局	장목전、장목전
果物壓	간지국、약국
飯饌假家	과즈집
庖厨	파물전、묘전
酒幕、旅閣、步行客主	반찬가가
理髮所	포주、포주、관、달임방
筆房	쥬막、려각、보힝각주
	목욕집、목간
	리발소
	필방、붓방
筆を作つて賣る店	八百屋
	牛肉屋
	宿屋
	湯屋
	床屋
	米屋
	麪屋
	本屋
	木製品賣店

典當鋪、典當局	전당포、전당국	質屋
福德房	돈취리、돈장스	金貨業
魚物塵、生鮮塵	어물전、생선전	家屋周旋所
床塵	상전	魚屋
毛物塵	모물전	骨董店
鞋塵	혜전、집쇠장스	毛皮類販賣店
砂器塵	사기전	履物類販賣店
貝物塵	핀물전	陶磁器販賣店
櫟塵	장전	鎔職を云ふ
喪頭都家	상두도가	簾等を作り販賣する店
穀屬、穀食	葬具店	穀物
綢緞、緋緞	곡속、곡식	絹物
白木、布木	죽단、비단	木綿類
	범목、포목	

参考資料3

「ハングルの視覚的研究」による

現在のハングルの書体と歴史的なハングルの書体、1990

가나다라마바사아자차
카타파하아야어여오요

現行細明朝体

가나다라마바사아자차
카타파하아야어여오요

現行シン明朝体

가나다라마바사아자차
카타파하아야어여오요

現行特見出明朝体

가나다라마바사아자차
카타파하아야어여오요

現行SK中明朝体

가나다라마바사아자차
카타파하아야어여오요

現行MS太明朝体

現在使われているハングル書体

가나다라마바사아자자
카타파하아야어여오요

現行シングラフィック体

가나다라마바사아자자
카타파하아야어여오요

現行細ナル体

가나다라마바사아자자
카타파하아야어여오요

現行デナル体

가나다라마바사아자자
카타파하아야어여오요

現行宮書体

가나다라마바사아자자
카타파하아야어여오요

現行ビック体

가나다라마바사아자차
카타파하아야어여오요

現行SK太明朝体

가나다라마바사아자차
카타파하아야어여오요

現行細ゴシック体

가나다라마바사아자차
카타파하아야어여오요

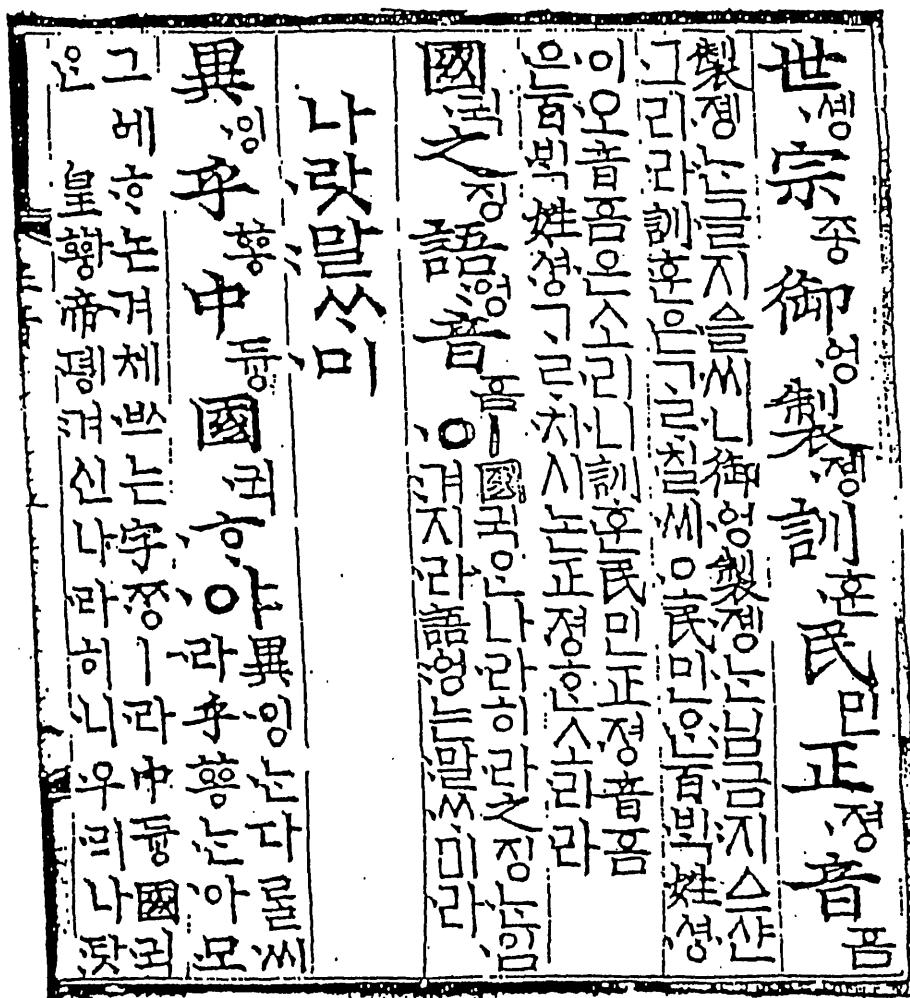
現行ゴシック体

가나다라마바사아자차
카타파하아야어여오요

現行見出ゴシック体

가나다라마바사아자차
카타파하아야어여오요

現行グラフィック体



音正民訓

国宝第70号、本の大きさ23.2×16.5cm、木版本、1446年刊行。

訓民正音の文字は誰によって書かれた物であるかと言うことは知られていない。原文に収録されたハングルの書体は幾何学的構造のゴシック体（版本書記頒布体一漢字の小篆体）である。

ハングル書体の構成は、点、直線、斜線、円等によって成されていて、線の太さと点が重さのある感じでありながらも、優しい感じであり、完成された文字の形は正方形または長方形を成している。

特徴としては、木版本でありながらも文字の角の形に丸みを少し与えて、角の鋭い形を優しくしている。

종·시	공	라·파	디	거	호	미	大	··	··	··	··	··
息·업	獨	··	··	··	··	··	··	··	··	··	··	··
식·순	··	··	··	··	··	··	··	··	··	··	··	··
··	업·사	이	··	주	··	라	··	천	··	리	··	라
서·로	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
호·미	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
웃·오	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
모·獨	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
민·똑	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
사·은·는	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
로·늘·져	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
마·구·머	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
라·다·서·씨	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
구·어·오	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
給·버	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
孤·孤	··	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··
··	사	··	··	··	··	··	··	라	··	··	··	··

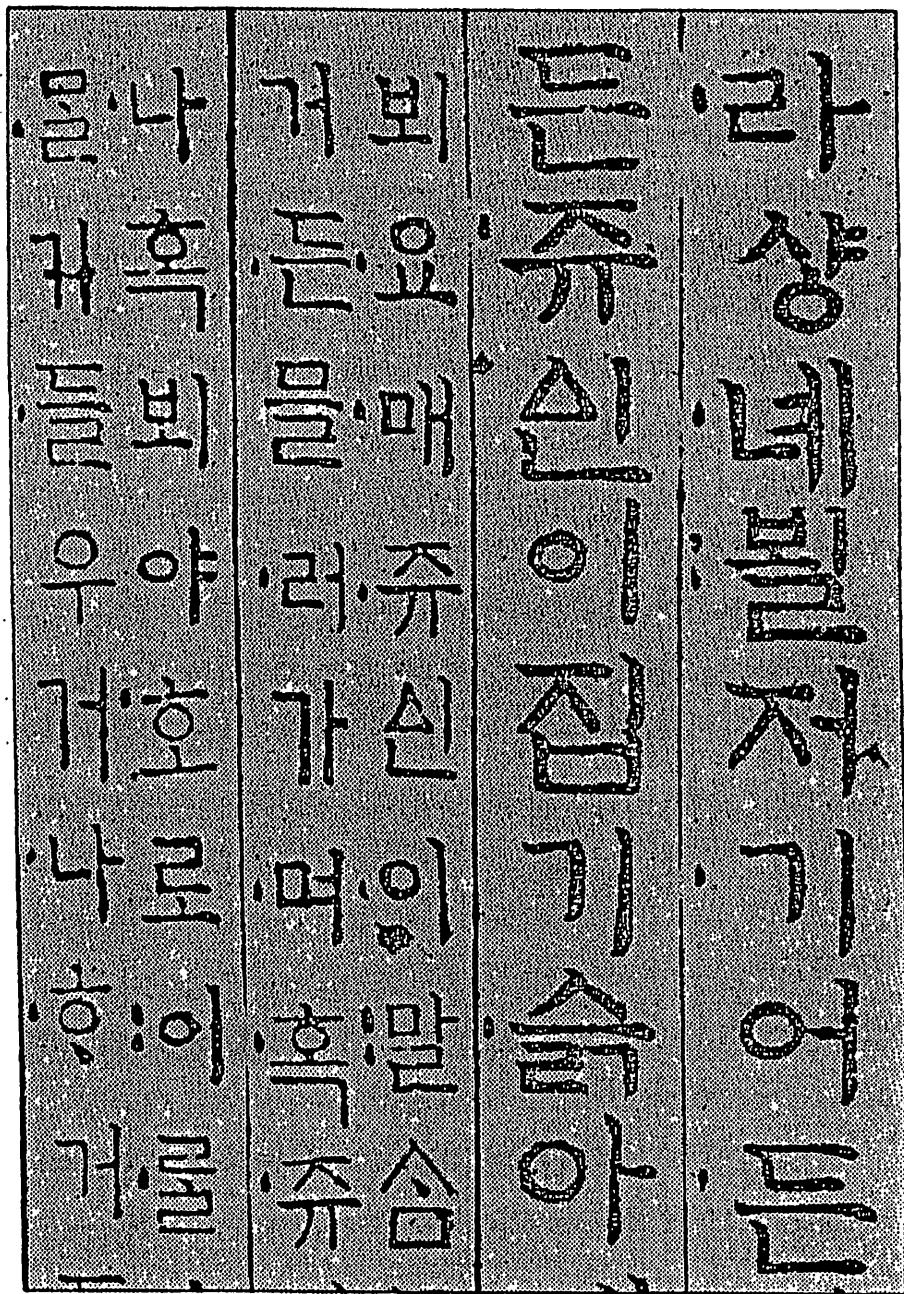
訳譜詳節

宝物第523号、金属活字本、1447年に活字を作り1449年に完刊。

この本に使用された活字は、最初のハングル金属活字であり、声点が文字と一緒にになっている。このように、以前は点で表されていた声点が文字と一体化する現象は、1592年の任振倭乱の直前まで続く。

訳譜詳節の書体は東国正韻の物より線が太く重さがあるが、文字の画の最初と終わりが鋭い形をしているので優しい感じはしない。

文字の大きさは大きいもので1.4×1.8cmであり、小さいもので1.4×0.9cmである。



朱子增損呂氏鄉約諺解

この本は1455年カンヒアンの字本で作った、乙亥字とそのハングル字で、1574年以前に刊行されたものである。

この乙亥ハングル文字はゴシック体でなく、漢字の隸書に該当するものである。

よって、乙亥ハングル体は初めてのハングル楷書体である。

この文字では、主に送りがなを振ったり、諺解に使われた。

小學 헌 諺 解 卷之四

內 4 篇 편

贊 古 고 第 四 4

네 일상 고 흠이니 太 韶 예 봤자 라

孟 明 子 4 道 性 善

稱 칭 堯 요 舜 逊 시 니 其 4 言 언 曰 월 舜 金 은

爲 위 法 律 於 어 天 天 下 하 사 可 乎 傳 편 於

後 後 世 세 늘 시 我 아 는 猶 유 未 미 免 면 爲 위

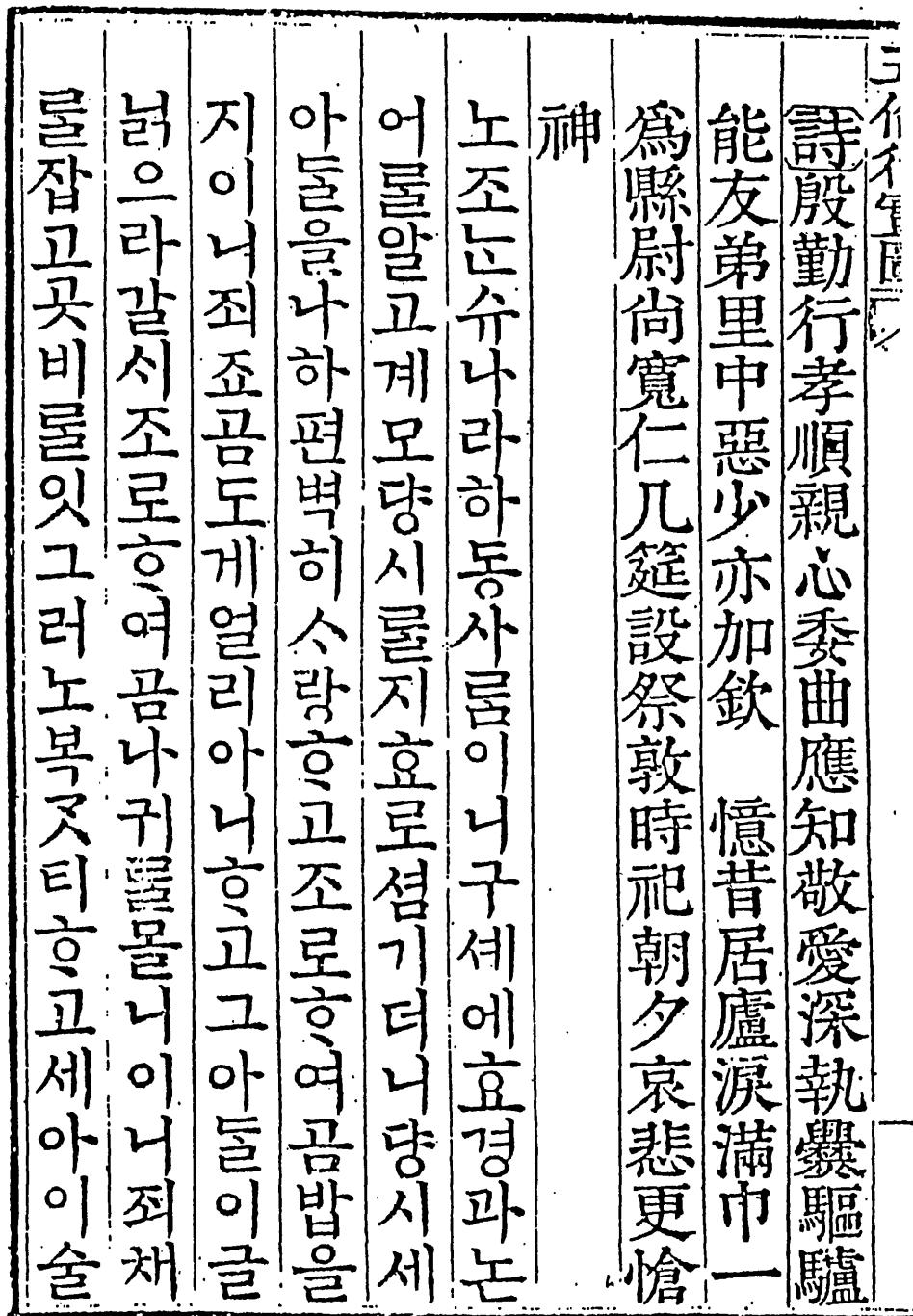
鄉 향 人 인 也 야 니 是 시 則 즉 可 乎 憂 우 也 야

1 憂 우 之 지 如 여 何 하 오 如 여 舜 逊 而 이 已

小学諺解

1580年に作られた庚辰ハングルにて、1587年刊行。

書体の整理が進み、乙亥ハングルより優れていて、宮体の基礎になった。



五輪行実図

1795年の銅活字である整理字と一緒に製作したハングル字で木製活字である。1797年に刊行。字形の均衡がとれてきて宮体の完成体のようだ。

여수기록기적도리
련주성부찌사례호시고이에
르시거늘을일엽다만흔사람이
식의조차온곳을아지못호야비
은아지못호니금수와다름이어
이다련주찌로조차온줄을아니
큰은혜를감사함이당연한도리

聖書直解

1892年刊行。近代式連活字。

20世紀前期に使用された活字の母胎となった。

謝 辞

この論文を完成するに当たり、多くの方々のご指導とご助力を頂きました。

この研究に取りかかることができ、そしてこのような未熟でありながらなんとかたどり着くことができましたことは、九州芸術工科大学の石村真一教授ならびにお茶の水女子大学の波平恵美子教授のご指導によるものです。

石村真一先生のご親切で細かいご指導は論文の完成度を高めることができました。波平恵美子先生には九州芸術工科に在職中の、1996年からご指導頂きました。全く右も左分からない私を暖かく導いて下さり、研究に対しての配慮とご指導はもちろん、日本の文化についても様々なことについて細かく学ぶことができました。本当に心から感謝致します。

糸井久明教授にはご親切なアドバイスとご指導頂きました感謝致します。また、九州産業大学の教授であり、本大学の名誉教授である古賀唯夫先生にもご指導を頂きました。本当に感謝致します。

また九州芸術工科大学の佐藤優教授には色々とお世話になりました。研究性から修士過程までご指導頂き本研究への出発点となりました。心から感謝致します。

韓国の民族博物館の学芸員の方々の資料提供や、商業史博物館の学芸員の方々の資料の提供、特に、ソウル市立博物館の準備委員長である、ジョニヤンモ先生の実物看板の写真提供とアドバイスをしてくださいましたことは大いに役立ちました。

また、九州大学の朝鮮学研究所の方々には文献研究上で多くのご助言をいただきまして、本当にお世話になりました。

韓国の母校の教授である、権喜耕先生はご本人の日本での留学経験をもって、日本の留学が可能となるように導いてくださり、常に研究に対する精神的な面を支えて下さいました。そして、母校の指導教授である伊享子先生のご指導と応援は大変大きな勇気となりました。本当に感謝します。

ソウルの看板調査と慶州の看板調査には、30度を超える暑さの中での調査でしたが、アメリカに留学中で一時帰国していた妹の恵貞の支援で楽しく終えることができました。そして、私の留学が可能となり、安心して研究に励むことができましたのは、身元保証人である久保晴義さんのおかげです。留学当初1992年から今日に至るまで物心両面助けて下さり、また色々と励まして下さいました。心から感謝します。

そして、5年間授業料免除をして下さいました日本の文部省と自由な研究生活ができるようにしてくださった九州芸術工科大学の親切な方々にお礼申し上げたいです。

また、韓国の母をはじめに家族の愛と信頼は大きな力となりました。特に夫である文福基にはお世話になりました。この場を借りて謝意を表わします。

最後に、このようなすべての環境と条件を備えて下さいました神様に感謝し、栄光を捧げます。